

マスターアーカイブ モビルスーツ RX-93 vガンダム

MASTER ARCHIVE MOBILESUIT RX-93 v GUNDAM



モビルスーツ「vガンダム」を描き下ろしビジュアルと膨大なテキストで紐解いたMS研究書

宿命のライバル
シャア・アズナブルと
一騎打ちを演じた
アムロ・レイの
新たなガンダム

RX-93

v GUNDAM

F.S.F.
IF 001

アクシズの地球落下を阻止した
伝説のMS、RX-93(vガンダム)の開発経緯やメカニズム、バリエーションなど計画の全貌を詳細に解説!!

マスターアーカイブ モビルスーツ RX-93 ヴガンダム

MASTER ARCHIVE MOBILESUIT RX-93 vGUNDAM



ISBN978-4-7973-9721-5

C0076 ¥2700E



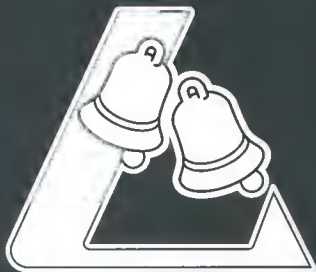
9784797397215

定価 本体2,700円 +税

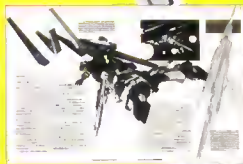


1920076027000

©新編・サンライズ



宇宙にかかる光芒は、ガンダムが人類に見せた希望と奇跡の光——





マスターアーカイブ モビルスーツ RX-93 vガンダム

MASTER ARCHIVE MOBILESUIT RX-93 v GUNDAM





ROX

1993 V-GAME

Rox

H. H. H.

H. H. H.

ISBN978-4-7973-9721-5

C0076 ¥2700E



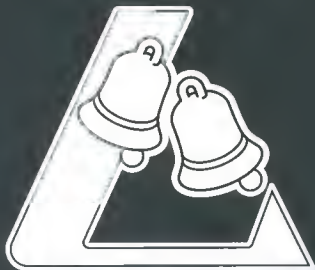
9784797397215

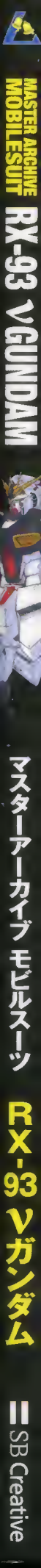
定価 本体2,700円 +税



1920076027000

©創通・サンライズ





**MASTER ARCHIVE
MOBILESUIT
RX-93**



✓ GUNDAM

| | |
|-----|--------------------|
| 010 | RX-93(νガンダム)の開発経緯 |
| 036 | 〈νガンダム〉の構造とシステム |
| 080 | アムロ・レイと〈νガンダム〉 |
| 086 | RX-93(νガンダム)の武装案 |
| 112 | カイラム級機動戦艦〈ラー・カイラム〉 |
| 116 | 〈ラー・カイラム〉の艦載MS |

■ 041

大船千尋(p01 ~ p086-1u7, p113-1x1)

* 豊 元(p036-059, p062-063, p066-075, p125)

二宮茂幸(p064-065)

横村 望(p060-061, p080-085 & captions)



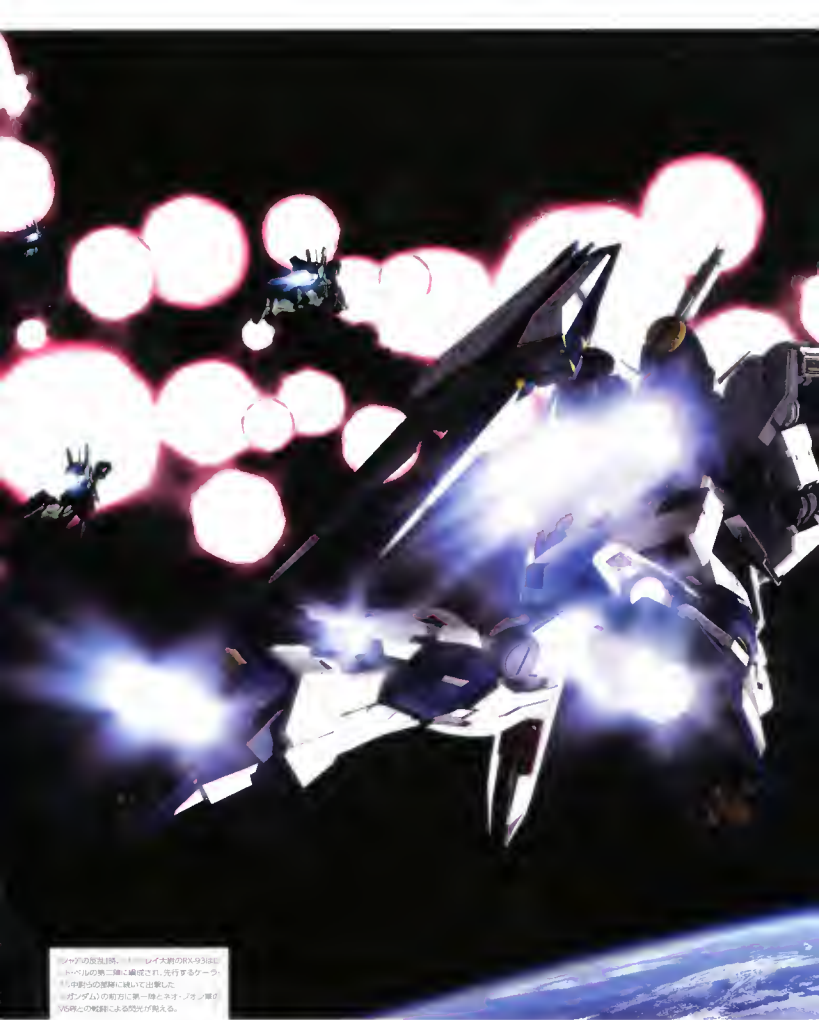


RX-93は「ジオ」の両軍を倒す地球連邦軍の意向と、シャア・アズナブルを敵対とするネオ・ジオン勢力への対抗を任務とする外観戦闘型機に、ド・ベルおよびアムロ・レイの搭乗が一役を生

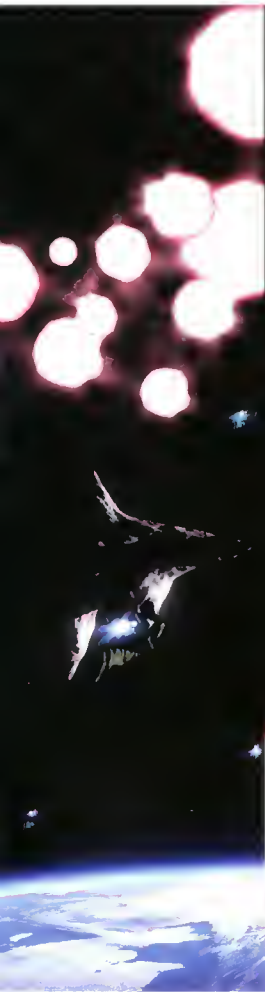




RX-93
、現在MMA(戦艦中)に不
明)認定されて、いるアムロレイ大尉(当時)が最
後に搭乗した機体である。「シヤアの反乱」にお
ける戦艦ヘール「ソフト」に投入されたことか
ら、あまりにも移動距離が短く、その実態に
「はこれまでほとんど知られていなかった」



シャアの反乱部隊。……レイ大尉のRX-93は、
バーベルの第二機へ編成され、先行するクワ
・ラン隊との連携に就いて出撃した。
④ガンダム1の前方に第一機とネオ・ジオン軍の
V6機との戦跡による閃光が見える。





『ν』大敵が目標し、νはニュータイプパイロットが言うことに適化したMSであったと考えられる。それはファンファンネルやサイコフレームといった攻撃を拒む兵器に頼らず、運動性や反応性、どこにほ損いやすさまで含めた機体全体のコーディネートを指す。本人がニュータイプパイロットであった大敵の機体によって、ひとつの方向性では究極と告げるMSが誕生したのである。



RX-93(νガンダム)の開発経緯

DEVELOPMENT OF RX-93 νGUNDAM

時代は戦争によって形作られ、戦争は幾多の英雄を生む。宇宙世紀においても、それは同様であり多くの英雄が生まれ、そして戦火の中に消えていった。中でも、一年戦争のトップエースとして知られるアムロ・レイ中佐(最終階級)は、その悲劇的な最期によって人々の記憶に残り、伝説の域へと達した。地球への落下コースに乗った小惑星「アクシズ」を押し返さんとした彼は、愛機と共に文字通り消失したのだ。本書では、この宇宙世紀最大の英雄が最後に搭乗したことで知られる名機RX-93(νガンダム)を中心に、その関連機種について時代背景と共に解説を試みるものである。



RX-93のコンセプトは「ガンダム制敵に似て、怪しい」ことには異なっていないが、自然の生態に対して勇敢な死を以て自動攻撃したというレイ(大尉)のイメージが残されていることから、少なくとも通常はパイロットがダイレクトに機体のファンネルの動きを制御しているわけではないと推定される。ファンネルはパイロットの攻撃や防御の意思に応じて基本的にオートで動く。もちろん機能的に制御制敵を行うことも可能であるが、その際にファンネルを何番まで操作できるかは、状況やパイロットのニュータイプ能力次第であった。



機体
「」に機体
RX-93
を特徴づける装束のひとつである。この「」は、
「」である。このような非対称のデザインは当時
ほかに存在せず、機体乃至も敵艦との識別を
「」があったようである。





【時代背景】

U.C.0087年3月2日、反地球連邦組織「エウーゴ」所属の機動部隊が、治安維持組織「ティターンズ」の拠点となっていたサイド7を襲撃、試験中の新型モビルスーツ（以下、MS）2機を奪取した。俗に「グリーン・オアシス事変」と呼ばれるこの奇襲攻撃により、地球連邦は「半長」の内戦状態へと突入してゆくことになる。後に「グリプス戦役」と名付けられることになるこの内戦は、リベラル寄りのエウーゴ陣営とラディカルなティターンズ陣営による軍内での主導権争いなどという単純なものではなく、アナハイム・エレクトロニクス社（以下、AE社）やルオ商会といった大手企業、ニュータイプ研究所を始めとする政府系諸機関、シオン共和国、さらには各地に潜伏していた旧シオン公国軍の残党など、さまざまな勢力・組織の思惑が複雑に絡み合いながら、混沌の度合いを深めていった。中でも、後の歴史に大きな影響を与えたのが、ハマーン・カーン率いるアクシズ系旧公国軍残党勢力である。

小惑星「アクシズ」——旧公国軍のオーストロイド・ヘルトにおける活動拠点として扱ったこの基地は、公国軍残党勢力の活動拠点として戦後最大となり、軍民合わせて3万人以上ともいいう反地球連邦コミュニティを形成した。彼らは乏しい資源と財力の大部分を軍に投じ、無視できない規模の艦隊戦力を整えると、母港たるアクシズごと地球圏へと帰還。内戦状態を巧みに利用して、敵対する両陣営の間を渡り歩きながら、いつしか危険な第一線としての立場を確立していった。こうした動きを可能としたのは、サビ家の公女、ミネハラ・オサビの摂政としてアクシズを導いたハマーン・カーンの存在あればこそであ

る。20歳そここの若さで似合わず、類まれな外交・軍事のセンスを持ち合わせたハマーンは、混乱を極めた地球圏においてキープレイヤーとして存在感を発揮した。

U.C.0088年に入り、パワーバランスがエウーゴ陣営に傾き始めたことを敏感に察知したハマーンは、ティターンズとの交渉ラインを最後まで確保しつつも、エウーゴと同盟を締結。ティターンズの拠点たるセダンの門にアクシズを衝突させることで戦場をかき乱し、間隙を突いてグリプス2を占拠してみせた。当時、グリプス2はティターンズの手により戦略兵器「コロニー・レーサー」へと改修されており、その支配権は内戦の勝敗を決定付けるものと言われていた。それゆえ、エウーゴ陣営はアクシズとの同盟関係を破棄し、同年2月14日に「メールシュトローム作戦」を敢行。グリプス2を奪取しつつ、これを発射することでティターンズ陣営の主力艦隊を殲滅することになる。

一方、アクシズはというと手痛い失態を演じたかに見えて、その実、主力艦隊を後方に下げることで戦力を温存。エウーゴ陣営は内戦の勝者となりながらも、最終決戦において艦隊戦力の大部分を消耗する結果に終わった。

かくして、地球圏に軍事的空白が生じると、ハマーンは主力艦隊を呼び寄せ、本格的な軍事介入に打って出る。U.C.0088年2月29日、各サイドのスペース・コロニーへと制圧部隊を送り込み、地球連邦に不満をいだいていたスペースノイドの諸派を糾合して勢力の拡充を図ると、大胆にも地球侵襲作戦に着手した。その勢いは留まるどころを知らず、旧シオン公国軍やティターンズの残党勢力を取り込み、組織名を「ネオ・ジオ

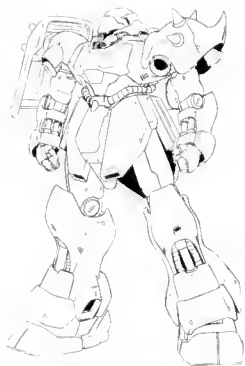


へと改称。そして、旗艦「サダラー」以下の艦隊により首都タカールを武力制したうえ、艦隊外交によってサイド3「ジオン共和国」の領土割譲を迫るなど、破竹の進撃を続けることになる。だが、ネオ・ジオンの相手は、士気の低い正規軍部隊ばかりではなかった。ティターンズとの戦いで実戦経験を積んでいたエウゴ系の部隊は、頑強に粘り強く抵抗を続け、反撃の機会を伺い続けていたのである。

そして、ほとんど好機が訪れる。U.C.0089年11月、ハマーンから下流派がサイド3市民の支持を思いうように得られず、内政に苦慮する最中で、ネオ・ジオンの青年将校、グレミー・トトが突如として反旗を翻したのだ。グレミーは、自らがサビ家の主筋の血を引くと考えていたように、我こそはザビ家の「当然後継者である」と主張すると同時に、ハマーンが幼いミネハを傀儡としていると批判し、即刻、権力の中心から身を引くようにと要求したのだった。

当然、ハマーンがこの要求を受け入れるはずもないのだが、グレミーがオウギスト・キタンやラカン・タカランといった実力派の将校に加え、強化人間ブル・ワウを中核とするニュータイプ部隊を指揮下に収めたことで、事態は急変してゆく。確かな戦力を得たトト派反乱部隊は、奇襲同然の攻撃によりアクシズを占拠、徹底抗戦の構えを見せたのである。これに対してハマーン陣営が、マシュマー・セロ、キャラ・スーン指揮の各巡洋艦隊を前面に展開させ退く気を微塵も見せないとなれば、残された選択肢は全面的な武力衝突のみとなる。

かくしてコア3域において、ネオ・ジオンの主導権を賭けた決戦の火蓋が切って落とされた。そして、その陰でエウゴ所属の機動巡洋艦、ネル・アーガマが動き出す。甲艦で戦国南域に侵入したネル・アーガマは、わずか5機程の艦載MS部隊を巧みに用いて戦場に割って入り、グレミー・トトとハマーン・カーンという両派のトップを立て続けに打ち破ってみせたの



■AMS-119(ギラートガ) MSN-03(サクトーガ)

「ギラートガ」は、MSN-03「サクトーガ」の改良型で、主に「ギラートガ」の改良型として開発された。その特徴は、主に「ギラートガ」の改良型として開発された。その特徴は、主に「ギラートガ」の改良型として開発された。



「ギラートガ」は、MSN-03「サクトーガ」の改良型で、主に「ギラートガ」の改良型として開発された。その特徴は、主に「ギラートガ」の改良型として開発された。その特徴は、主に「ギラートガ」の改良型として開発された。

して進まず、むしろエカムやNSPといった他の反地球連邦活動グループの活性化に合わせて、ネオ・ジオン再建に向けた動きまで生じていたのである。そして、そんな「ジオンの再興」の旗手となったのが、グリフス戦役の最終局面において戦死したと思われていたシャア・アズナブル旧公国軍人佐であった。

シャア人佐は知っていたとおり、かつて一年戦争時にジオン公国軍所属のMSパイロットとして目覚ましい戦果を挙げ、赤い彗星の異名で呼ばれた人物である。父、ジオン・ズム・タイクンが暗殺された経緯から、ザビ家と複雑な関係が生じていたものの、ア・バオア・クー攻防戦の後に当時、アステロイト・ヘルトにあったアクシズへの進軍に加わり、しばらくはハマーン・カーンとも良好な関係を保ち、指導者層の一翼を担っていたと言われている。ところが、方針の違いからハマーンとの関係は決裂。これに前後して地球側に復帰した彼は、クワトロ・バジーナなる偽名で地球連邦軍の軍籍を得てエウロコの名に引き込まれるなど、独断路線を採ることとなる。つまり彼は、一時的とはいえネオ・ジオンの潮流であるアクシズに身を置いていたことがある上、エウロコ時代の活動から地球連邦軍

内部の事情にも詳しく、さらに思想家ジオン・ズム・タイクンの遺児として多大な政治的影響力を有していたのである。ハマーンという指導者と政治的象徴であったミネバ・ラオ・ザビを同時に失ったネオ・ジオンという組織を立て直すことができる人物がいるとすれば、彼を置いて他にない。シャア・アズナブルとは、そんな稀有な人材であったのだ。

さて、シャアがネオ・ジオン残党の実権を掌握したのが、いつなのかについては諸説あって定説を見ないところだが、一説によればU.C.0090年5月頃には最大規模のネオ・ジオン残党グループであったタンサン・ボジドン少将麾下の部隊を傘下に収めることに成功していたという。その後にホルスト・ハーネスら、アクシズ組の軍官僚らとも合流、戦災難民が多く收容されていることでも知られる開放型と密閉型を接続させた急造コロニー「スウィート・ウォーター」を拠点と定め、ジオン再興運動を加速させている。この流れが、やがてRX 93 ヴァガンタムが投入されたことも知られる。シャアの反乱（第二次ネオ・ジオン戦争）へと繋がることになるのは、讀者諸兄も十分に理解しているところであろう。



種で、この写真では、ナル、一本なしの本セットを「ずら」で「適切」している様子が確認できるが、このような方法を「理由」、いふとよく判「」る。



【アナハイム・エレクトロニクス社の誤算】

「宇宙世紀という時代を牽引してきた」人組織「地球連邦」が、エウゴとティターンズという一極に分裂し相争うことになったグリプス戦役は、いくつもの意味において歴史的な転換点となった。人類社会を二分したこの戦いにおいて、月面経済界の雄、AE社は、内戦の一極を担ったエウゴの設立に深く関わることで、政治、経済、軍事の各方面において飛躍的に存在感を増大させ、機動兵器市場においては独占状態を築くに至った。

しかしながら、クリプス戦役で勝利することで政権を奪取してみせたエウゴ陣営であったが、立て続けにハマーン戦争が勃発したことで経済的に疲弊し、我が国の春を謳歌するというわけにはいかなかった。戦後復興と経済の立て直しは急務であり、ネオ・ジオンの瓦解を以て軍事の脅威が低減したと考えたエウゴ政権は、たたちに軍事費の引き締めに着手した。次世代主力MSと目されていたRGM-88X ジェダの採用キャンセルを皮切りに、兵器調達の大胆な見直しが行われたのである。

歴史上のスポンサーとしてエウゴを後押ししてきたAE

社にしこみれば、いざ投資を回収しようという段になって情勢が急変したわけであるから、話が違うと言いたかったことであろう。それでも、ジョン・パウアーを筆頭とする政権内の国防派を介することで、RGM-88Xをベースにコストパフォーマンスを改善したRGM-89 ジェガン の制式採用だけは死守してみせたが、ローエンド機と位置づけられる機体だけに数を売らねば利益に繋がらず、必ずしも短期的な収益に直結したわけではなかった。AE社としては、莫大な開発費を投じてきた可変MSに代表される第1世代MSをこそ地球連邦軍に売り込みたいところであったが、その点において連邦議会の財布の紐は固かったのである。

クリプス戦役の最中からのことではあるが、傑作機との評価を得ていたMSZ-006 ズガンダム でさえ、高額の製造価格と維持管理費を敬遠され、大量調達には結びついていなかった。ならばと、地球におけるエウゴの協力組織であるカラバに対して「Zプラス」と名付けたバリエーション機を売り込んだものの、こちらもエウゴ政権トド



は戦理の対象となり、設計

は伸び縮むこととなる。さらに、頑強さに定評のあったZ系のフレームを

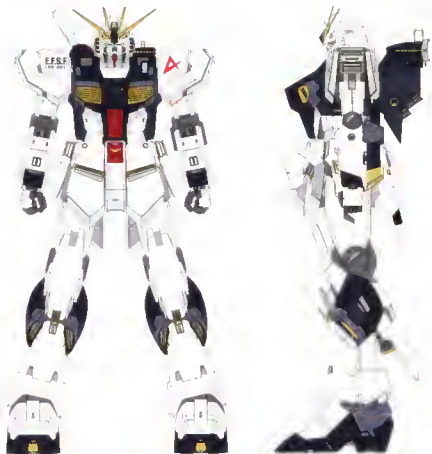
活かした可变機も検討されたが、MSZ-007

量産型Zガンダム、やRGZ-91 リ・カサィと争頭とするこれらの機体価格は、いずれもコストハランに苦慮した挙げ句に大量調達には至らず、次々と計画が頓挫することになった。とうにか、MSZ-008 ZIIを再設計した簡易可変機を「サブ・フライト・システム（以下、SFS）」の役割を兼務させるという附加価値を「乗せ」つつ、シャアの反乱後にRGZ-95 リセクルとして補用に持ち込むことになるものの、それが限界であった。

つまり、U.C.0090年初頭のAE社にとって、地球連邦軍向けの次世代ハイエンド機の座を確保することは、極めて大きな課題であったと言える。そんな折、軍内幹部にガンダムの再来を望む、奇妙な論議が生まれる。一時的にはいえ、ネオ・ジオンに首都タカールの制圧を許したという屈辱感がそうさせたのか、一年戦争時に伝説

的な戦果を挙げ、反攻作戦の象徴ともなったRX-78-2/3 ガンダムをB社（の技術で新生させようという言説が驚くべきことに真実に検討され始めたのである。約10年の間に発展を続けてきたMSの歴史を顧みることなく、政治的な象徴物として新兵器を開発しようというのだから、愚策としか、いような話ではあるか、そこは前々人たるAE社のこと、予算の獲得につながる受注の機会を見逃すことはなかった。

資金面さえ確保してしまえば、あとは諸々と開発ラインを稼働させるだけのことだ。AE社は、改めて次世代ハイエンド機の座を目指して動き始めることになる。そして、この動きがやがてRX-93 ヴァガンダムへと繋がっていくことになるのだか、それらU.C.0090年以降に開発されたRX-93以前の試作機群を、便宜的に「RX-9x系」と呼称し、解説を試みていきたい。



【RX-9x系試作機群】

RX-9x系のコンセプトを一言で表すのであれば、**人型非可変試作MS** となるであろう。当時、主流となっていた19メートル級の機体（RGM-89 ジェガン）の頭頂高は19メートル。よりも人いきい20メートル超級の人型機体フレームに高出力ジェネレーターを搭載することで、サイコミュ兵器を含む様々な武装オプションを搭載可能な余裕をもたせようというのである。それはMSZ-010 Z ZガンダムやMSZ-011 Sガンダムなどを経て、莫大な開発費を投じて磨き上げてきた可変機構の導入を見送るという判断であったが、軍上層部が抱く理想形がRX-78-2/3である以上、この点は譲れないポイントであったのだろう。航続距離や巡航速度については、SFSや増加ブースターの利用によって担保し、MS本体には複雑な機構を組み込まない。それが軍縮時代のハイエント機のあり方であること、AE社としても認めなければならなかったのである。

さて、RX-9x系の初期試作機にあたるRX-90については、**μガンダム** というコードネームを除いては、ほとん

ど詳細が明らかになっていない。RX-93以前のサイコフレーム試作機であったとする資料があったかと思えば、一方で「サイコフレームを含むサイコミュ兵器は未実装であった」とする記録も存在するなど、数少ない資料の間ですら矛盾が生じているのだ。それらの情報をすべて否定することなく、また別個のプロジェクトにおいて開発された機体とも考えずに、ひとつの流れの中で生み出された試作機群であったと解釈するのであれば、おおよそ次のような経緯を経ていたものと推測される。

まず、サイコミュ兵器を搭載しない状態で、20メートル超級非可変MSの製造に着手。ロールアウトした試作機（製造番号00531）は、ほどなく地球連邦軍の手に引き渡され運用試験に供されたようだ。U.C.0092年に入ると、地上で抵抗活動が続けていたネオ・ジオン残党部隊との戦闘に、RX-90と思しき機体に参加していたとする証言が散見されるようになる。ただし、優れたパワーを見せてネオ・ジオンMSを圧倒したものの戦闘中にオーバーヒートを起こして墜落し、結果的に撃破されたというエピソード



も伝えられているなど、この時点で完成度は決して高くはなかったようだ。ちなみに、この試作機の思わぬ喪失により、重力下試験を行うことができず、後のRX-93の開発にも遅延が生じるなど芳しくない影響を与えたとも伝えられている。これが事実であるとするれば、RX-9x系はRX-93に連なる位置づけにあったことになり、後者の開発元であるフォン・ブラウン工場と同じ、もしくは極めて近い関係にある部門で設計・開発が行われたものとも考えられる。

なお、 μ ガンダム の型式番号については、当初はMSAナンバーが割り当てられていたとも言われるが、地球連邦軍からの承認を得た時点でRX-90とされたようだ。 μ ガンダム については、他にもYRX-90Aという型式番号が記載された資料も存在しているが、これは開発初期のある段階における仕様を示すものと思われる。また、地上用増加装甲システムの運用試験用機体として、RX-90とはほぼ同様の外観を有するRX-92Bなる機体ที่ใช้られたという情報も存在する。断定するだけの根拠に

乏しいのが実情ではあるが、U.C.0092年以降、地球連邦軍による試験的な実戦投入が行われた段階を以て、開発計画の再編が行われ、特に重力下仕様様のRX-9x系の試作機がRX-92Bとして承認・登録されたのではないだろうか。

ちなみに、RX-90やRX-92といったRX-9x系試作機群について、個々の機体の仕様について詳細に記した記録は現時点で見えていないが、機体フレームの製造まで進んだ少なくとも1機には、コア・ブロック・システムが導入されていたとの証も存在する。この試作機は、さまざまな武装のテストベッドとして利用され、最終的にはサイコフレームを含むサイコミュ関連装備の実験に用いられたとも伝えられている。これが事実であれば、RX-90 μ ガンダム を指して「RX-93以前のサイコフレーム試作機」とする記述も、サイコフレームが実装された時期はともかく、素体が設計された時期はRX-93以前であるという意味において、まったくの嘘ではないということになるだろう。

【ロンド・ベルとRX-93】

既に述べたとおり、発足当初のロンド・ベルの戦力は、必ずしも必要十分とは見えなかった。事実、発足間もないU.C.0090年5月にコア3沖で発生したダンジダン派ネオ・ジオン残党勢力との戦闘においては、旗艦「ネル・アーガマ」が被弾するなど手痛い損害を被っており、口立った戦果を挙げることなく月面都市「アンマン」への後退を余儀なくされている。この失態により、艦隊司令ブライト・ノア大佐が一時的に解任されるなど、結成早々に体制の立て直しが行われる運びとなった。

そうした経緯もあって、ロンド・ベルは地球連邦政府に対して、再三に渡り戦力の増強を訴えることとなる。姿を消したままのネオ・ジオン残党勢力の甲冑は、第三〜四世代に該当する高性能MSを保有しているグループも存在していると目され、それらがシャア・アズナブルという新たな指導者を得て、組織内編されつつあることの脅威を改めて主張したのである。こうした論調に、ロンド・ベルの発足にも関わったジョン・パウアーを筆頭とする国防派勢力の後押しが加わったことで、後に一定の予算枠の獲得に成功。やがてRGM-88X「ジェダ」やRGM-89「ジェガン」といった最新鋭機の追加支給を受けることにもまで漕ぎ着けたのだった。

しかしながら、いかに新鋭機といえどもこれらは第三世代MSの範疇に留まる機体であり、打撃力の中核とするには未だ力不足と言えた。それゆえ、ロンド・ベルのMS部隊を率いることとなったアムロ・レイ大尉（当時）は、さらなる高性能MSの配備を求め続けることとなる。そして、採用が見送られ、行き場を失っていたZ系非可変試作機、RGZ-91「リ・ガズィ」をどうにか受領し、艦隊側で手を加えて戦力化に成功することになるのだが、この機体にしても、いかに付け焼き刃の感が拭えない代物に過ぎなかった。

状況に変化が生じたのは、U.C.0092年末の12月25日のこと。ロンド・ベル艦隊司令にブライト・ノア大佐が復職したのである。どうやらノア大佐は、艦隊を離れている間もロビー活動を続けていたようで、着任の手土産とばかりに地球連邦軍がAE社に開発させていた新型機をロンド・ベルに廻す段取りを付けてきたという。ただし、件の新型

機がそのままの形で納入されたかと言えば、決してそうではない。これ以降、迎刃者サイドであるロンド・ベル、より具体的に言えば、アムロ・レイ大尉からの要求に応じて仕様変更が行われているのだ。このような流れの末に完成した機体こそが、RX-93「νガンダム」という訳である。つまり、艦隊復帰に際してノア大佐が配備を取り付けていた開発中の試作機とは、前項で解説したRX-9x系試作機群のいずれか、おそらくはRX-92の空間戦仕様機であったものと推測される。

では、RX-93の開発においてレイ大尉が果たした役割とは、どのようなものであったのだろうか？　しばしば、RX-93をして「アムロ・レイ大尉が設計した」とする主張がなされることがある。これは彼自身が語ったとされる「基礎設計を行った」という主旨の発言に由来するものと思われるが、前述のとおり、機体設計はU.C.0092年12月末時点でほぼ固まっていたとあって良い。事実、ノア大佐の復帰と時を同じくしてロンド・ベルに着任したチェン・アギ技術准尉は、新型機概念図を艦隊に持参してきており、レイ大尉に対して簡易的なプレゼンテーションを行っている。これを受けてレイ大尉は、自らが「予てより考案していた「ニュー・ガンダム」（新型ガンダムの意）」と類似していることに驚いた様子であったという。また、大尉は新型機に不足する要素としてサイコミュを挙げ、さらに外装形状の一部変更も求めたという証言すら残されているのだ。したがって、彼が担当した基礎設計とは、サイコミュ関連の仕様策定、およびメンテナンス性と拡張性を確保するためのユニット構造化の促進と、これに伴う装甲形状の変更といった部分に限定され、ゼロベースで設計の立案を行った訳ではなかったと考えられる。とはいえ、20メートル超級非可変MSであるRX-9x系試作機をベースに、操作系にサイコミュを導入、さらにファンネルを含む無線誘導攻撃端末を装備させ、第四世代MSとして完成させるという方向性を決定するにあたり、アムロ・レイ大尉の意見が大きく作用したことは間違いない。以後、AE社フォン・ブラウン工場では、同社の技師オクトバー・サランを主任とする開発チームを割り当て、急ピッチで試作1号機の製造作業を進めることとなる。

[illegible]

RX-93-1

RX-93-1 νGUNDAM

【RX-93-1 νGUNDAM】

型式番号: RX-93-1

頭高: 22.0m

本体重量: 77.5t

推進力: 6000t

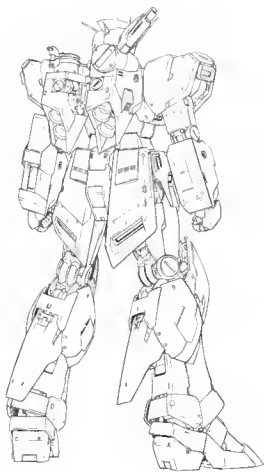
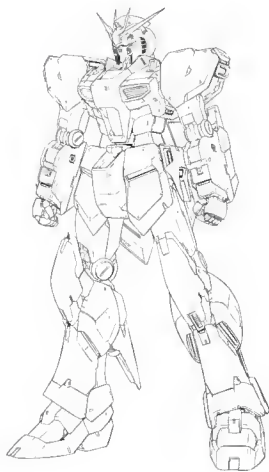
装甲材質: ガンダリウム合金

センサー出力: 80km

最大出力: 97,800kg

最大速度: 21.300m





[RX-93-1(vガンダム)]

RX-93(vガンダム)は、ロンド・ベルからの発注により、フォン・ブラウン工場が生産した試作機である。RX-9x系の基礎設計を引き継いだ機体フレームは全高23メートルに達する大型なもので、ここに出力2,980KWを誇る新型ジェネレーターを搭載した。そして、当時の汎用MSの1.5倍にあたる高い出力を活かすべく、機体各所にマウント・ラッチを配し、武装面の拡張性を担保。ネオ・ジオンとの戦争状態が長期化した場合を想定し、実戦データをフィードバックしたアップデートが容易にできるようにとの配慮から、内蔵火器は極力オミットし、機体を軽量化すると同時に内部に余裕をもたせた設計とした。これと並行して、後述する様々なオプション装備の装着が検討されている。しばしば、本機が「究極の汎用性」をコンセプトに設計されたと言われる所以である。

また、開発開始当初はロンド・ベルによって発注された機体のみの、ほぼワンメイクに近い存在であったが、後の量産化

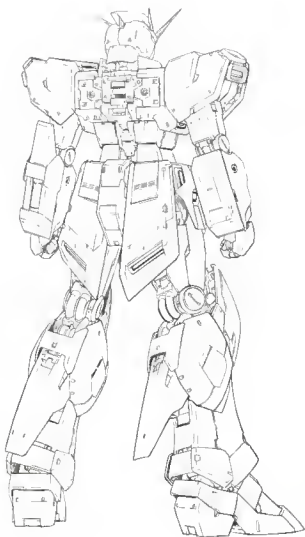
を見据えた配慮も随所に採り入れられてもいた。たとえば、消耗率の高い駆動系や推進系のデバイスには、積極的に規格品を採用。一方で、消耗品ではないケーブル類や機体フレームの一部には、標準規格を超える品質の素材や新規設計の部材を用いるなど、ハイエンド機として一定のラインは保たれたという。

とはいえ、これらの仕様は、いずれも既存のRX-9x系試作機の延長線上にあるものに過ぎない。RX-93を真の意味で、それまでの試作機群と隔てているのは、サイコミュ・システムの採用であろう。まず機体制御の補助を目的として、MSZ-006系由来のバイオセンサーを搭載。これに伴い本機のリニア・シートのヘッド・レストには感応波受信バックが取り付けられており、後方へ肥大化している。また無線誘導攻撃端末「フィン・ファンネル」の運用を想定し、その遠隔操作に必要なデバイスを実装。この処置に伴い、頭部ユニットは一般的な

RX-93-1

RX-93-1 vGUNDAM





RX-93は生産期間の短縮のため最終品を多用した設計となっているが、専用設計の部分には次世代機への採用を視野に開発されていた部材を積極的に採用しているといえる。量産型の制約のため必ずしも完全な近未来品とは比較にならないほど高価ではあったが、強度と機体の軽量化の意味から採算はあてて量産している。

MSより大きくなったとも伝えられている。こうした技術の中には、インコム・デバイス[※]の開発過程で派生したのも含まれていたといい、AE社によるサイコミュ関連技術のすべてが引き込まれたとも表現できる。その最たるものが、材料開発部門を介して提案された「サイコフレーム」の採用であろう。

サイコフレームとは、サイコミュの機能を有する超小型コンピュータ・チップ（通称：サイコ・チップ）を金属粒子並みの大きさで鈑込んだとされる新素材である。個々のサイコ・チップの働きは微々たるものだが、これをコクピット周辺の構造物として用いることでメイン・プロセッサと連結し、高密度なサイコミュ・システムを形成。デバイスの省スペース化を図ると同時に、機体——および無線誘導攻撃端末——のレスポンス向上も果たすという画期的な技術であった。RX-93は、このサイコフレームの採用を以て、ネオ・ジオンのフラッグシップ機、MSN-04（サザビー）に匹敵する戦闘能力を獲得するに至ったのである。

ただし、この素材については、後日、開発元がAE社ではなく、ネオ・ジオン傘下のニュータイプ研究所であったことが判明している。どうやら、ネオ・ジオンのMS製造を請け負っていたAE社グラナダ工場を経由しての意図的なリークであったらしい。一説によれば、ネオ・ジオンの総帥となっていたシャア・アズナブル大佐が一年戦争以来のライバルであるアムロ・レイ大尉との決戦を前に、技術的格差をなくした上での「公正な戦い」を望んだためであったとも伝えられている。だが、戦争において、そのような騎士物語じみたロマンチズムに陥れる行為が許容されたのかという議論もあり、真相は未だに判明していない。

サイコミュデバイス
サイコミュ、専ら有利機誘導式の兵器。サンバングした動きやコンピュータ制御によって、ビットやファンネルに連する小型兵器を操作することで、ニュータイプや強化人間ではない通常のパイロットでもサイコミュに近い兵器の運用を可能としている。

RX-92B LAS [Land Armor System]



RX-93(ガンダム)に連なる試作機のひとつと置われる機体の経緯図。重力下仕様として地上での試験が行われたとされるのは、RX-92Bと呼ばれる試作機であったとされる。その最終オプション搭載型はRX-92LAS (Land Armor System)とも呼ばれた。

【RX-93試作1号機の戦歴】

U.C.0093年2月27日、新生ネオ・ジオンの総帥、シャ・アズナブル大佐はインタビュー番組の中で地球連邦政府に対して事実上の宣戦布告となる発言を行った。そして、翌3月に入ると予てより編成を進めていた宇宙艦隊を率いて軍事行動を開始。同月4日に小惑星「フィス・ルナ」を奪取して、地球連邦（総司令部が置かれていたチベット・ラサ地区）に対する「隕石落とし」を敢行した。

これに対しロンド・ベルは、集合可能な艦艇をフィス・ルナに急行させたものの、先手を取ったネオ・ジオン軍を前に阻止行動に失敗。この戦いにおいてアムロ・レイ大尉はRGZ-91「リ・ガズィ」を駆って出撃したが、小惑星表面にまでたどり着くも、迎撃に当たったネオ・ジオンのサイコミュ搭載機——より具体的にはギェネイ・ガズラン乗機のMSN-03「キャクトーグ」、およびシャ・アズナブル大佐乗機のMSN-04「サザビー」——に圧倒されフィス・ルナの推進器を破壊することが叶わず、隕石落としの実行を許すという苦すぎる経験をすることとなる。

現有戦力では新型の第四世代MSを保有するネオ・ジオン艦隊には対抗できない。その認識を新たにしたロンド・ベルは、直ちにアムロ・レイ大尉を月のAEIフォン・ブラウン工場へと派遣。予定を前倒して、当時、最終組み立て工程にあったRX-93試作1号機を受領し、戦力化しようとする。これに対して開発主任のオクトバー・サラン技師は、実戦装備の完了はどんなに急いでもあと1日は必要であるとして拒否したが、レイ大尉は機体の最終調整は艦隊で行うとして受領を強行。ビーム・ライフル、ビーム・サーベル、ハイブリッド・シールドの標準兵装を装備した状態で機体をブースター・バックにマウントさせると、マストライバーを利用して射出、ロンド・ベル艦隊との合流を急いだ。これが3月5日のことである。

折しも、ロンド・ベル艦隊はネオ・ジオン部隊による攻撃を受けていたが、これに対してレイ大尉のRX-93は遠方から牽制射撃を行い、直撃させることはできなかったものの、援軍の存在を示すことで敵部隊を撤退させていた。その際、ネオ・ジオンのMSパイロットは、RX-93から発射されたビーム弾を出力の高きゆえに艦艇射撃と誤認したとも伝えられている。

なお、これ以降ロンド・ベル旗艦「ラー・カイラム」の艦載機となった本機は、艦内にてサイコミュの調整作業を続行。後送された「フィン・ファンネル」の同期設定も済み、ようやく本

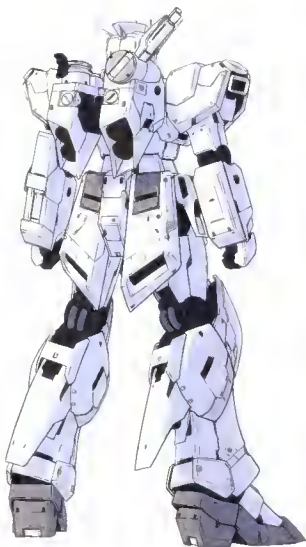
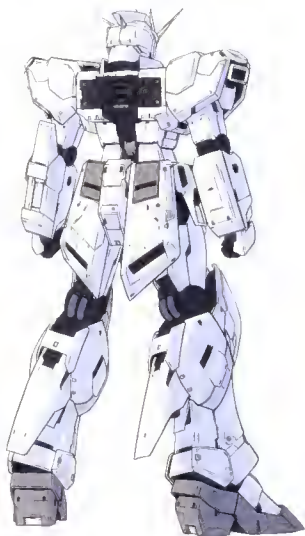
機は、本格的なサイコミュ搭載機としての運用が可能となった。そして、運命のU.C.0093年3月12日を迎える。

同日、ネオ・ジオン艦隊は投降を偽装して差し討ちを行い、小惑星「アクシズ」を奪取、「地球寒冷化作戦」の総仕掛けとして、隕石落としを再度、実行に移そうとしていた。これに対し、ロンド・ベルは投入可能な全戦力を投じて抵抗。RX-93「γガンダム」は、このアクシズを巡る攻防戦において数度に渡り出撃を行い、本格的な実戦を経験している。

アムロ・レイ大尉とRX-93の相性は抜群であった。突貫での作業ゆえに懸念されていたサイコミュの調整も上首尾に終わったようで、フィン・ファンネルも安定的に動作。AE社側の独断で実装されたサイコフレームも期待以上の性能を発揮し、理論上は可能とされていたもののテスト段階ですら使用事例がなかった、複数のフィン・ファンネルによるフィールド・バリア展開を実戦において成功させている。レイ大尉が類まれなニュータイプ素養の持ち主であったとはいえ、その感応波を正確に読み取って反動的にフィン・ファンネルを動作させるには、かなりのレスポンス速度が求められる。レイ大尉は、一連の戦闘でサイコミュ搭載機を含む多数のMS撃破を記録しているが、サイコフレームの採用が活躍の原動力となったことは間違いない。特に、シャ・アズナブル大佐のMSN-04を撃破したことは、殊勲と評価できるだろう。

しかしながら残念なことに、レイ大尉乗機のRX-93は小惑星アクシズを巡る攻防戦の最中に行方不明となり、ついに帰還することがなかった。彼の機体が最後に目撃されたのは、地球に降下しつつあるアクシズの裏側に寄り付く姿であったと言われている。これに先立ちロンド・ベルは、アクシズの核パルス・エンジンで破壊しようとしたサイマル攻撃を行っていたが、ネオ・ジオン側に防がれていた。そこで、ブライト・ノア大佐は旗艦「ラー・カイラム」を小惑星表面に接近させると、自ら白兵戦部隊を率いて侵入。小惑星内部に爆発物を仕掛けることで内側から爆発し、アクシズを中程より分断することで質量を減じ、地球への落下を阻止しようとしていた。ところが、アクシズの後半部分が爆発によりブレーキをかけられた格好となり、地球の重力に引き込まれてしまったのだ。その際、レイ大尉はMSによってアクシズの裏側に回り込み、文字通り押し返そうと試みたのだという。それは、あまりに無謀な行為であったが、地球を守らんとする姿勢が戦場に共感を呼び、連

[illegible][illegible]

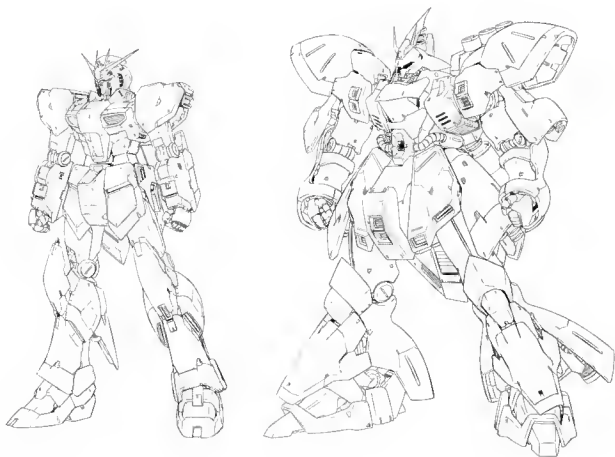


邦陣営のMSのみならず、先程まで激戦を演じてきたネオ・ジオンの所属機までもが、英雄のあとに続けとばかりに動くこととなる。この時、アクシスの裏側に向かった複数名のハイエントたちの証言によれば、総計数1機のMSが、レイ大尉のRX-93を中心に小惑星に降り付いていたという。そして程なく、奇跡が起きた。

レイ大尉乗機のRX-93から不可思議な色合いの光が発せられたかと思うと、次々とアクシス表面に取り付いていたMSを弾き飛ばしはじめたのである。その光はみるみる広がり、地球の軌道1を帯のように包みこんだかと思うと、落下が確定的であったはずのアクシスの断片を弾き飛ばしたのだった。俗に「アクシス・ショック」と呼ばれる現象である。

一説によると、隕石落下を目撃とした多くの人々の恐怖、

あるいは救いを求める願いの意思が、RX-93に搭載されていたサイコフレームを触媒として、正体不明の力場「サイコ・フィールド」を発信させ、これによりアクシスを押し返したのではないかとされている。戦後、地球連邦軍が発表した公式見解によれば、アクシスの落下阻止はロンド・ベルによる決死の分断作戦が功を奏したためであり、世界各地で観測されたオーロラに似た光も、大量に飛散した粉塵が「人」との摩擦熱により燃え尽きた際のものとして説明している。いずれの説が正しいのか、それは今となってはわからない。確かなのは、その後に行われたロンド・ベルによる必死の捜索にも関わらず、RX-93は残骸すら見つかることなく、後にアムロ・レイ大尉は戦死認定を受けて「階級特進、中佐へと昇進した」ことのみである。



【RX-93とMSN-04】

シャアの反乱の最終局面において、アムロ・レイとシャア・アズナブル大佐は雌雄を決するべく一騎打ちを展開したが、その際に両者が駆ったMS、RX-93〈νガンダム〉とMSN-04〈サザビー〉は、共にAE社製であり、かつサイコフレーム搭載機であるなど共通点が多いことで知られている。一方で、これらの機体は技術的な系譜も異なれば、設計のコンセプトにも大きな違いがあった。ここでは、MSN-04との比較を通じて、RX-93という機体の特性を検討していきたい。

では、比較を行うためにも、まずは簡単にMSN-04〈サザビー〉の開発経緯について振り返っておこう。MSN-04はネオ・ジオンからの要請に基づき、AE社の開発拠点のひとつ、グラナダ工場の開発チームが設計した機体である。しかし、そこに至る前段階として、ネオ・ジオンは独自に第四世代MSの開発を試みていた。「スウィート・ウォーター」を拠点と定めた彼らは、ハマーン政権下で開発されていたアクシズ製の汎用主力MSの設計データをベースとして、AMS-119〈ギラ・ドーガ〉を完成させると、そのムーバブル・フレームを転用したサイコミュ搭載機の開発に乗り出していたのである。

その設計を担当したのは、これに前後してネオ・ジオンが独自に設立していたニュータイプ研究所であった。旧ブラナガン機開発出身者を中心とするアクシズ系の研究者と、エウゴ政権下において戦争犯罪者として追われる身であったティターンズ系の研究者とを集め立ち上げられていたこの組織は、ことニュータイプ関連技術——特にサイコミュ・デバイスの設計と強化人間の製造——について言えば、地球圏全体でも屈指の技術力を誇っていた。しかしながら、そんな彼らであっても限られた設備での新型MS開発には苦戦を強いられることになる。AMS-119NとAMS-120Xという2種の試作機を並行して開発を進めていたのだが、当時の技術力ではサイコミュ・デバイスの小型化には限界があり、キャパシティの限られたAMS-119系のムーバブル・フレームでは妥協を

※AMS-119NとAMS-120X

AMS-119Nは（レーダー・ドグ）とされる機体。試作機のうち1機は赤く塗装され、MSN-04（サザビー）完成までシャア総帥の専用機とされていたとする資料もある。AMS-120XはAMS-119（ギラ・ドーガ）をベースとして開発されたサイコミュ試験機。

MSN-04 SAZABI

機体番号 MSN-04
 全高 21m
 頭高 10m
 本体重量 10t
 全機重量 133,000kg
 装甲材質 鋼合金
 出力 3,960馬力
 駆動力 133,000kg
 サイズ 有効半径 500m



重ねなければならなかった。結果として、これらの初期試作機は、円筒形の新型ファンネルの武装など一定の成果は見られたものの、総合的には満足のいく性能を獲得するには至らなかったという。

こうした難局にあって打開策として提案されたのが、サイコフレームの採用によるサイコミュ・デバイスのさらなる小型化と、AE社への試作機製造委託であった。

ニュータイプ研究所の所長を務めたナナイ・ミゲル女史が、下より独門に開発を進めていた新素材「サイコフレーム」が、この時期ようやく大川レベルに達しつつあったことは、ネオ・ジオンにとって幸運以外のなにものでもなかったことだろう。性能的には未知数な部分も残されていたものの、この新素材の登場によってサイコミュ・デバイスの小型化は、やがて現実のものとなった。

問題は、AF社との提携である。新生ネオ・ジオンの総帥となったシャア・アズナブル大佐は、エウロパ時代の活動から月面経済界に太い人脈を築いていた。特に[[ジオン系の人材が多く在籍するAE社グラナダ工場とは、深い関係にあったと言われている。そうした経緯もあり、主力機AMS-119の生産を委託していた訳だが、機密の理である新素材のデータを提供した上で、新型試作機の設計や製造に関与させることは、情報管理の面からすれば極めてリスクが高かった。戦力の引換を成すことを期待された第四世代MSの情報が地球連邦側に流出してしまうのなら、作戦の成否にすら影響を与えかねないためだ。しかし一方で、スウィート・ウォーター内の施設では、フレームレベルでの改修作業も難しいという実情もあり、開発の進行には限界があることも腑かであった。ネオ・ジオン上層部



の間でも様々な意見があったようだが、最終的には総帥の判断によりAF社と試作機製造の契約が交わされることになったのである。

かくしてグラナダ工場にて生み出されたのが、MSN-03 ヤクト・ドーガであった。基本フレームこそAMS-119をベースとするものの、レイアウトを根本から見直した本機は、サイコフレームの採用によって小型化された新型サイコミュ・デバイスの性能も相まって、極めて完成度の高い機体となった。だが、ファンネルへの充電機能が盛り込まれていないなど、未だにシャア・アズナブル大佐が求めるレベルには達しておらず、さらなる新型機の開発へとシフト。新規設計の大型フレームを導入した試作機、AMS-123X等を経て、MSN-04 サザビーの完成することとなる。

MSN-04最大の特徴は、これまで拘ってきたAMS-119系に見切りをつけ、AMS-123X系由来の大型フレームをベースに、さらなる大型化を図っている点だ。そのゆえ、完成した機体の頭頂高は23メートル、全高に至っては25メートルを超える巨大なものとなった。こうしたキャパシティに余裕のある機体に、定格出力3,960kwの高出力ジェネレーターを搭載したことで、急遽であった充電機付きファンネル・コンテナの武装も実現。有り余る出力を活かして、腹部に拡散メガ粒子砲1門が据えられる点も注目し得るだろう。最終的に大戦配備機への武装は見送られたものの、試作段階では右腕ユニットに替えてジェネレーター直結式の大型ハンド式メガ粒子砲を搭載する計画すらあったほどで、内蔵火器を排力排除して拡張性を重視したRX-93とは正反対の設計思想であったことがわかる。

なお、開発過程での設計変更は、これだけに留まらない。一時はAMX-004 キュベレイと同様に、ファンネル・ラックをリア・スカートに内蔵する設計であったが、後にバックパックへ取り付ける方式に変更。コクピット・ブロックについても、当初はAMS-123Xと同じく腹部に位置していたが、開発後期に入って頭部ユニットへと移設されている。シャア・アズナブル大佐が設計に関与したMSとしては、エウロパの主力機であったRMS-099 リック・ディアス が挙げられるが、こちらもAF社が開発を担当し、かつコクピットを頭部に配置している点など共通点が多い。コクピットの配置位置は、パイロットへのGのかかり方に関わるため、リア・シートがあってなお操縦性への

※AMS-123X
※MSN-04 サザビーの初期機体
※近衛MS-AMX-004 キュベレイ
※ネオ・ジオン軍のタイプ研究用機
※人に人間が居る機体



影響は人であること、言われている。一説では、サイコフレームのテストを行うためにMSK 008 デュシェ 系の機体が用いられ、総帥自ら試験運用を行ったとも言われているが、奇しくもこちらまで頭部にコクピットを有するMSである。ここからは推測に過ぎないが、頭部コクピットの操縦席を好むシリア・アズナブル大佐の意向があったからこそ、上増場でレイアウト変更が行われたのではないだろうか。そう考えれば、開発初期の設計を曲げてまで人間的配置変更を行ったことも理解できるというものである。こうした点も、直感的でシンプルな権威性を留めたアムロ・レイ大尉の意向を受けてオーソックスなレイアウトを採用したRX 93と対照的に、える

また、操縦性に影響を与える要素のひとつでもあるスラスター配置に関しても、RX 93とMSN 04では大きく異なった。背部ハックハックの推進器を軸としつつ脚部に推進系を配したリジッドなレイアウトのRX 93に対し、MSN 04は背部より

も脚部やスカート・アーマーに推力を割き、また肩にも補助推進器を配置するAMBAC股に重きを置いた構成になって。総推力にあってはRX 93の97,800kgに対し、MSN-04は133,000kgと圧倒する。市販甲冑えに本体重量において10%ほど上回っていたことを考えても、推力重視の傾向が見て取れる。それだけにプロパティルの消費も多く、MSN 04は背部ハックバックを増槽を装着する状態を標準としていた。

以上のように、MSN-04はIIシオン公団軍系の重MSの設計思想を受け継いだ重装甲かつ大推力、高火力を標榜していた機体であった。大型非可変のサイコミュ搭載機というコンセプトこそ同じくするRX-93とMSN-04ではあるが、その設計思想には大きな差があったことが伺える。RX-93とは、基本的に忠実なシンプルな設計により、汎用性と拡張性を担保した機体だったのである。



〈νガンダム〉の構造とシステム

STRUCTURE AND SYSTEM OF RX-93 νGUNDAM

【アナハイム・カンダムへの軽体構造的アプローチ】

アナハイム・エレクトロニクス社（以下、AE社）がモビルスーツ開発に本格参入したのは一年戦争終結後のことと解されること多いが、戦中からシオン公国軍占領下のグラナダでは、MS-06系バリエーション機の開発や製造に参画する一方、地球上の支社では地球連邦軍（サイト）のMS開発に協力、特にRGM-79系の量産に際しては、かなり大きな貢献を認められていた。そうした経緯もあって、戦後処理の過程で旧公国系の大手兵器メーカー、シオニック社が解体された際には、その大半の開発施設や人員を吸収することを認められ、一挙に機動兵器開発に関連したノウハウを獲得してゆくこととなる。

戦勝国側の公的機関であれば、敗戦国側企業に対して強引な“解体”と“吸収”で応じればことは済むであろうところを、わざわざ民間の一企業に、優先的に買取させるような、もってまわった策を弄しているところに、地球連邦政府の対スハースノイド政策の一端が覗える。この時点で、地球連邦政府ないし旧中東は、AE社の政治的スタンスが完全にアースノイド寄りであると決めつけているようにも見える。その結果、AE社は地球連邦とシオン共和国双方のMS開発・製造とそれに関連する多くの技術を手に入れ集約できる立場に躍り出た。連邦政府と軍部はAE社の本社が地球にあることから地球至上・求心主義的企业体であると勝手に思い込んでいた。思い込まれていた。ことが、後に大きな脅威を招くとは毛ほども思っていない。なかったことの証明でもある。



RX-93 Gundamの機体内部は六角形になっている。これは瓦葺き屋根を造形した部分と組み合わせているため、ワゾオフの試作段階ではよく見られるものだが、規格が決定されて量産される際も、試作型でも瓦葺き屋根を使用する場合は丸型となる。



はシオニクス社を初めとする多数のメーカーから流入した技術的資産を、AE社が確実に掌握し、複数の異なる工場に振り分けて別個に競ってながら開発を行わせた結果であると考えられる。そして、その背景にエウゴと呼ばれる「組織」の存在があったことは、うまてもない。その一例として、しはしはシャ・アズナブル（クワトロ・バニーナ）が「手土産」かわりに持ち込んだガンダリウム合金の合成・製造・加工法が、AE製MSの抱えていたさまざまな問題のブレークスルーとなったと語られるか、果たしてそれだけだったろうか。それにしても、あまりにも準備が整っていない、あるいはきついているようにも思えてならない。

それはさておき、ガンダリウム合金とは、地球連邦軍が造り出した超合金ルナ・チタニウムを、アクシズ（ないしは旧地球連邦系）の冶金工学者がコピーすべく創出した新素材の合金であるとも、それに端を発して戦後世代のルナ・チタニウム系合金全般を指す秘密として扱った語であるとも、われている。いずれにせよ、一年戦争における連邦製

MSの大きなアトバンデー、のひとつが、ガンダリウム合金の祖とされるルナ・チタニウム合金を装甲や躯体材料として用いたことにありと指摘されることが多い。だが実際に使用されたのはごく限られた機体のみというのが現実で、主戦力として投入された大部分のMSにはチタン・セラミック複合材による装甲が用いられていた。なぜなのか？ 理由は単純で、戦中当時のルナ・チタニウム合金はあまりにもコストがかかりすぎたからである。当時、この合金の合成には無重力、無酸素という環境が必須で、地球連邦軍は宇宙で製造した合金を一次加工、または二次加工した部材として地球上のMS生産施設に搬送していた。これだけでも膨大なコストがかかる。重力下、有機素状態の環境でルナ・チタニウム合金を大量に合成する方法が確立されていない以上、この素材を量産兵器に適用することはできなかった。それ故、最高強度の装甲材料開発に成功しなからとも兵器全般に使用することは実現しなかったのである。

しかし、以下のような現実があってもなお、連邦軍主力MS

の主装甲・構造材として広く用いられているにもかかわらず、チタン・セラミック複合材に関する具体的な技術情報開示はなく、組成どころか素性も広く知られているとは言い難い。AE社は、RGM-79系MSの生産を経て得た装甲用チタン・セラミック複合材に関する知見から、将来の改質点や製造加工簡便化に関して研究を進めていたらしく、いくつかの研究資料の中で、この合金についての言及が散見できる。それによれば、初期MSの装甲用チタン・セラミック複合材は、従来から航空機・宇宙船の外殻や単体の材料として用いられてきたチタン基の傾斜機能材料を改質、さらにバルク（充実固体）化したものであるようだ。ニボウ化チタン（TiB2）チタン系の、宇宙船外殻では馴染みのあるセラミック・金属傾斜機能材料を基本とし、これを発展させたものであったらしい。窒化チタンの層もあり多層化した傾斜機能材料として完成されている。最外層は、箱内・箱界型ナノコンポジットのセラミック複合体を形成していた。しかし、この材料は軽量高强度で耐熱性と剛性は高いものの、引き裂きや捻れに対する靱性は要求値に対して充分とはいえず、衝撃耐性は低い、つまり割れやすいものであったようだ。この点に関する性能向上は常に図られていたものの、ルナ・チタニウム合金に匹敵する材料にはならなかった結果、装甲用チタン・セラミック複合材をそのまま構造材として使用することには問題が多く、炭化ケイ素繊維複合材で裏打ちされていたようである。当時の単体構造が疑似内骨格・スート・スケルトン、より正確にはスート・エンドスケルトン型であったこともあり、MS用構造材として実用化できたようなものであろう。

このような事情もあり疑似内骨格から真性内骨格単体あるいはG型内骨格単体機構：Genuin Endoskeletal Frame System（いわゆる“ムーバブル・フレーム”への移行は、ある程度靱性に見切りを付けて靱性を高めた改質型構造材の使用をスタンダータイズしてから急速な進展を見せ、形状や構造による靱性確保のためさまざまな試行を繰り返している。しかし、純粋な意味での“ムーバブル・フレーム”にはならず、実用への道のりは遠いものとなっていた。

地球連邦軍系官立工場の技術を結集し完成したRX-178 ガンダムMk IIはRX-78の正統後継機、という政治的な意図とは別に、完成形としてのフル・ムーバブル・フレームを実装した最初のMSという意味でエポックな機種であるとされる。ここで問題なのは、公開情報ではガンダムMk IIがムーバブル・フレームの構造材に何を用いたのかまったく記述がないうえ、これは他のMSについても同様のたか。装甲がチタン合金セラミック複合材とされている点にある。一年戦争後の連邦軍がGPシリーズを経て開発したMSでありながら、ルナ・チタニウム合金の使用について全く言及しないのは、形状や構造による靱性確保のためさまざまな試行を繰り返しながら依然とした装甲材質のまま、という解釈がごく一般的どころである。

RX-178の開発は急進的な地球全土覇権を標榜するティターンズによって行われたが、その開発施設は宇宙を拠点とし、ノウハウが喪失しているわけでもなくルナ・チタニウム合金を主体として造らない、表記しない程度しか使用しない理由が今もって不可解なままである。グリーン・オアシス事変によってエウゴのアーガマ隊に南獲された3機のRX-178は、戦力化された3号機を除いてAE社に引き渡され解析に回されているが、装甲は昔のままのデータが出ていた。しかし、この事実は伏せられたままであった。あるいは、「チタン合金セラミック複合材」のチタン合金という部分に、ルナ・チタニウムあるいはその改質合金——の使用をほのめかした程度である。これは、後にAE社がガンダリウムγの製法を得たことによってムーバブル



⑧

スート（図説）
「傾斜」型
スケルトン（Skeletal）と置いた場合は「外骨格
及び内骨格を指す



ル・フレームの完成をみたということと対照すれば、ガンダムMk-IIに完成形としてのムーバブル・フレームが実装されたという事実こそが、構造材用ルナ・チタニウム合金の使用をうめしている和解すべきではないだろうか。すでに、U.C.0085年当時、ルナ・チタニウム合金はチタン合金という一般名称の中に含まれるほどに、特殊な材料ではなかったのではないかと。そのような推測もしたくなるのである。たゞそれは、ガンダリウム合金はやはり、組成としてはルナ・チタニウム合金と同等であっても、全く異なる経緯で生み出された合金ということになるのかもしれない。

AE社の設計・開発によるGPシリーズは、RX-78同様に疑似内骨格型の躯体構造であったが、コストの削減を図る目的から積極的に規格化を進めたフレーム部品を可能な限り共用しつつ、個々の機体に要求される機能拡張性を高めるため、汎用適合型フレーム——アジャスタブル・フレーム——という概念を導入していた。これを実用化し、その効果が実証できたことは、GPシリーズの存在そのものが抹消されようとも、AE社にとっては大きな意味があった。業界の耳目を集めるトピックになることも封殺されてしまわせたか、AE社技術陣にとってアジャスタブル・スード・スケルトンという構造の有効性が確認できたことは、同社が次世代MSの設計を見据えるうえで貴重な技術的成果を得たことになる。

RX-178のムーバブル・フレームがAE社のMS開発に大きな影響を与えたことは間違いないだろうが、時系列的にどうしても整合しない事象も多く、AE社が独自に「ムーバブル・フレーム」に相当する躯体構造フランを持っていたと考えてもおかしくはない。AE社ではこれをジーフス（GEAFS: Genuin Endoskeltonic Adjustable Frame System＝真性内骨格型適合フレーム機構）と名付けて、MS開発の基本に据えていたらしい。MSの駆動・動作の可動域を拡張、より効率的かつ有効性の高いものへと発展させるためには、必然的に迫り行く解答のひとつであろうことは間違いのないところから。

厳密にはシャア・アズナブルの意向が大きく働いていたとはいえ、実質的にAE社の独自開発MSとして最初に実戦配備されることになるRMS-099「リック・ディアス」には、このジーフス躯体が用いられた。「ムーバブル・フレームとしては未完成ながら」と評価されることの多い「リック・ディアス」の「ムーバブル・フレーム」だが、それは「ガンダムMk-II」の構造を基準に置いた考え方で、AE社としてはひとつの完成形であったようだ。過去に試行して好感触を得たアジャスタブル・スード・スケルトン（適合型疑似内骨格）の概念を推し進め完成したジーフス躯体の設計を

具体化したものこそ、リノクティアスの“未完成な”自性内性格躯体だった。未完成と評される部分は、アシスト機構のデザインが洗練されていないことに起因すると思われ、連邦軍の美意識からすれば、それかあたかも未成熟、未完成に見えたにすぎないのだろう。生産性や汎用性を視野に、躯体の主要構造部の汎用化を図るといふコンセプトは量産を旨とする兵器として当然の発想で、一般によく行われるユニット化、コンポーネント化という概念から何ら逸脱するものではない。むしろそれをより純化したもので、躯体各部の基本駆動ユニットは共通であっても、それを繋ぐ中間部分を入れ替えることで、大型MSから小型MSまで対応可能な性格構造を実現しているのである。これが、見た目には未成熟な印象を与えたのであろう。

接合部を多く設けるということは構造強度への影響が生じる。連結部のアシスト・コネクティブ・テハイス・シェイプは慎重に設計されていたが、AE社が改質した高強度チタン合金構造材「ルナ・チタニウムではない」は構造強度に余裕がなく、実現するためには人柄でコツイ、不細い「なももの」にならざるをえなかった。そこにもたらされたのがカンタリウムγである。申し分ない剛性と塑性を併せ持った材料ではあったが、開発陣はあえて設計変更に伴う構造のスリム化を図ることはせず、元設計のまま生産に移行した。完成までの時間を節約するためと、構造強度に充分以上の余裕を持たせて素材の負荷耐性確認などの実験的目的があったとされる。

シーフスによる汎用適合型内付格フレームの基礎設計をより洗練し先鋭化した結果として到達したのか、可変モビルスーツの躯体性格フレーム構造（シーフス）である。可変モビルスーツの開発は時流ということも背景にあるが、少なくともざるを得ない貴重な戦力に高い展開能力を求めていたエウロコスの強い要望があったとされ、AE社は開発人材を補強して対応を図っている。ゆえに、可変MSの開発に際しては、並行して幾つかのプロジェクトを立ち上げ同時並行的に進めていたようだ。先行する形で変形駆動試験にまでこぎ着けたのは、△計画 機体（コードネーム「δ」）だったが、Tシーフスとは異なるコンセプトの可変躯体で行われた設計の機体は、反復変形試験で不具合が露呈する。それは構造にタイトさを求めすぎたことが大きな要因で、結局、計画継続は断念された。しかし、この時に得られたデータは、△計画 機体（コードネーム「ε」）の開発に大いに役立ったようである。

カンダムMK II の“ムーンハブル・フレーム”を解析し、これで得た成果を採り入れ、連邦のテクノロジーに目撃した視点から見て完成の域に達した。フレームを、AE社が初めて汎用化にまで着き着けた機体がMSN-00100であった。MSN-00100の式は、△計画 機体か材料や構造強度の不足から可変フレームの装束を断念した結果として、非変形内付格フレーム構造とした機体であるというのが通説だが、すでにカンタリウムγの合成法がもたらされており、RMS-099 リック・ティマスや他の機種は装甲にこの素材を用いているにもかかわらず、構造材に応用しなかった点は不可解きわまりない。

MSN-00100の“ムーンハブル・フレーム”はRX-178のフレーム構造をもとに設計されたことは間違いないが、ある資料によれば、△計画 機体を改設計して非変形化したものではなく、可変MS用Tシーフス構造と対照試験を行う目的でアシスタブル機構を廃した非変形フレームとして新造されたものであり、さらにもう1種、RMS-099よりもスリム化したアシスタブル機構を残したまま固定した非変形フレームとして造られた性格フレーム構造も存在したようである。変形フレームと非変形フレーム2種は、MS形態におけるパフォーマンスが躯体構造に与える負荷と耐性結果の対照を目的として、仮装甲を装着、各種の試験に供されたという。

アシスタブル機構を廃した非変形フレームは、交換用スベア部品を用いて、新規構想に基

「あっ、それぞれが特徴……」
 「開発が……」
 「である。」「ハブ……」
 あるが、先ほど開発……
 は地球連邦軍であった。RX-178ガンダムMK-II
 は試作機で、エー……
 れとなり「オハイム・エレフ……」
 その中で先導的開発に……



つく耐ヒーム兵器用外装装甲の実験機体に……方、アシャ
 スタブル機構を残したままスリム化されリット（固定）加工
 された非変形フレームは将来的な重力下運用を目的とした
 RMS-099の軽量化機体試作機の骨格として用いられること
 になる。このうち前者はMSN-00100として、後者はMSK-008
 ティッシュとなる。MSK-008はカラハがRMS-099をベース
 に「素力を総動員し、独自に陸戦用MSとして急造した機種
 と伝えられるが、これにはいささか無理がある。カラハへの
 協力者は多数あり、高い技術力があったとしても、人類模
 な旱地施設を有しない組織ではおいそれと急造MSが作れる
 はずはない。おそらくRMS-099の軽量化機体試作機の試験
 テータのみならず、装甲用部材、フレーム改修用の機材など

は、キャリフォルニア工場を始めとする地球に置かれたAE
 社の生産施設から供与されていたのであろう。カラハはこれ
 を組み立てて運用したと考えたほうが自然ではないだろうか。
 計画機体がMSZ-006としての目処が立った時点で、AE
 社は「シーフス」「Tジーフス」という独自の呼称で呼んでいた
 骨格構造を「ムーバブル・フレーム」「可変ムーバブル・フレイ
 ム」に統一した。アジャスタブル機構は残されていたが、この
 ことが可変ムーバブル・フレームの開発で生じる問題への対
 処を比較的容易にした。部材は独自に改質を進めた構造材
 用カンダリウム合金を用いている。この後、さらにMSZ-010
 ZZガンダムなどを経て、AE社のムーバブル・フレーム技術
 は頂点に達したといってもいいだろう。



サイコフレームはナノ・バールのサイコ・チップが有機的に連携することにより、一瞬の滞りもなく、機体することが可能になった。その全行に施しては必ずしも解明されたいとは思えない。本家はファンタジーの増強用であるが、サイコチップの増強のインプット・アウトプットに準じて、パイロットの身体に反応した形で機体処理される性質を持つ。このため、リアルタイムパイロットの反応や機体に対する機体反応としても、リアルタイムの反応の機体時には自動的・手動・システムとして動いたことが確認されている。サイコフレームはファンタジー・システムを兼ね、RX-93の攻撃・防御システムの中核であった。

【サイコフレーム】

可変フレームや、その他の非変形MS用フレーム。ここ様々なノウハウを十分に蓄積したAE社にとって、非変形のいわゆる通常型ムーバブル・フレームを用いた機体開発は、これまでの技術を最大効率で組み合わせる思考実験のようなものだったのかもしれない。可動域、可動・回転軸など通常のMSとは比較にならないような特異な駆動と質量移動の大きい機体骨格構造を、構造用ガンタリウム合金の改質などを加えながら破綻なく作り上げてきた経験則は、他社の追随を許さないものである。しかもアジャスタブル機構を備えつつ何の支障もなく実用に耐えうる機体を完成させてきたことは、これをリジッド化した機体の構造強度算定など、たいした問題ではないとさえ感じられる技術者の自信をも台げた。またアジャスタブル機能をアクティブな状態にしておけば、試作時に搭載機材変更の必要性から機体フレーム構造の拡大・拡張が要求されるような事態に直面しても対応が容易で、新型MS開発への対応力は高く、その成果は開発から試作・量産に至る期間短縮とコスト圧縮にまで及んでいたのである。

U.C.0090年代に及ぶ掛かり、政治的な理由から軍事費の予算規模がさらに縮小される

なか、エウロ政権下の連邦軍の発注によりAE社が開発することになったMSは、象徴としての「新しい」ガンダムであった。そして、この構想の果てに生み出された試作機が、外郭新鋭部隊「ロンド・ベル」に回される過程で、運用者サイドからの要求に応じて、本格的なサイコミュ搭載機として開発されることとなる。AE社はサイコミュ研究の先駆者たる旧公国軍系の技術者を多く抱えていたことに加え、U.C.0080年代末期の連邦内戦期にはティターンズとの関係性からサイコミュ搭載機の製造にも関与しており、必然的に脳波伝導（サイコ・コミュニケーション）に関係する部門を複数保有していた。AE社がMS生産に参入して以来、ニュータイプに対する考え方や感情はさておき、MSに限定することなく次世代先進兵器開発にはサイコミュを——オフェンス、ディフェンス、カウンター、インターフェアなどその用途は問わず——^{むかし} 履^はろにするわけにはいかないというのが企業としてのスタンスであり、基礎理論の検証や素材研究、応用デバイス設計は継続的に行うべしというのが基本方針であったという。

多数存在した企業内の研究機関は、積極的に自主研究・開発プランを提示し、これを管理部門が統括、審査を経て予算が計上されるシステムがあった。サイコミュ・システムの研究も将来性のあるプロジェクトのひとつとして、派手ではないが基本方針に沿って、機械部位単位での駆動実験、兵器としての遠隔操作技術開発、脳波伝導への干渉や妨害手段などを継続研究していた。もっとも、これらの研究はニュータイプの素養を持った人材がほとんどいなかったことから、あくまでも擬似的なものとしてはあった。

正式な発注が行われる以前から、連邦軍の一部から非公式にニュータイプ専用機関開発製造が可能かどうかの打診があったらしい。もちろん具体的な要求仕様^{仕様}が提示されたわけではないが、社内では他の各部門を跨^{また}いで情報交換もできるような専任対応開発チームを編成し、「自主

開発チーム」というパッケージまで整えて発注への準備をしていたという。

発注・開発から完成までわずか3ヶ月という驚異的なスピードで完成した……と伝えられるRX-93 v ガンダムは、その理由をアムロ・レイが密かに温めていた開発プランがあったからというところに求める研究者もいる。だが、いかにコスト管理と製造期間短縮に長けたAE社とはいえ、そのようなことは非現実的である。まして、「試料」と呼ばれるサンプル・ピースを手渡されただけで、新概念のサイコ・マテリアルである「サイコフレーム」を用いたフレーム構造や関連機器を造ることは、有り物のMS本体に必要な部分だけ差し替えるという前提であったとしてもほぼ不可能である。「試料」の成分や組成、組織構造解析、成型法の選択やサイコ・マテリアル用材料でコンピューター・チップ相当の集積回路形成をナノレベルで行える技術の完熟と構造材部分とのマッチング等々、必要な作業工程を考えればとても無理な話であることは自明である。昼夜を徹した作業と気合いでなんとかなるレベルの問題ではない。

“自主開発チーム”の中核となった先進技術研究部第2材料工學ラボは、かねてより従来材料の先鋭化に余念がなく、非鉄金属系材料の開発・改質から、その生産法までを一貫して研究し続けていた。過去、シャア・アズナブルによってもたらされたガンダリウムγ合金の構造材への最適化や、ガンダリウム合金全般的な大量生産技術を確立した実績などを有する。しかし、そうであったとしてもサンプルをいきなり渡して、実用に足るものを作れというのは無茶な話である。おそらくサンプルの手渡しが行われるかなり以前から、サイコフレームの基礎的な物性データや合成・造形法を初め、サイコフレームを用いたムーバブル・フレームの概念図などがAE社にもたらされていたのではないかと、と思われる。どのようなルートで誰から誰に伝えられたのかなど具体的なことは不明とされているが、



MSZ-006 Zガンダム[左]とMSZ-000 Zガンダム[右]はそれぞれ「ザ・ビース戦」と「第1次ネオ・ジオン戦争」においてトップの戦機としてニュータイプパイロットの手により運用された（Zガンダム）と両機（いずれもアナハイム）エレクトロニクス社製のMSである。

増しレベルでは、データのみならず複数の試験片やMSのシミュレーション・モデル・データさえ含まれていたという試験片の川には、材料自体が感応波に反応する特性を有しつつ、構造材に転用可能な合金や、構造材合金組織内部に集積型コンピューター・チップに相当するシステムを内包するように構築されたものもあったという

ただ、この時点でAE社にもたらされた試験片は、同社の最低強度保証基準に照らして、実用構造材としての物性が不十分と判断され改質が求められたらしい。そのため構造材として必要十分以上の強度が確保されている自社のガンダリウム系構造材に感応波に反応する特性を有した材料で集積型コンピューター・チップ相当のナノシステムをモールドして封じ込め、かつ確実に作動するような

“組織構造”を形成する試みが行われていたが、構造材といわゆるサイコミュ・チップとの境界が経時によって部分剥離するなどの欠陥が生じると、多くの解決すべき課題も残されていたようである。

一方で感応波反応特性のある試験片は、構造材としての剛性・靱性・強度さえ求めなければ、脳波伝導における精神感応波感知機能材料としての組織構造形成は比較的早い時期にコピーができており、感応波感知機能材料で成形した集積型チップによるマイクロ・コンピューターの機能を付加すれば、自律的に感応波を検知・受信・増幅・放射するサイコミュ機器の心臓部として使用可能なところまでこぎ着けていた。この、いわゆる「サイコミュ・チップ」的デバイスは、従来から使用されてきたコンピューターの演

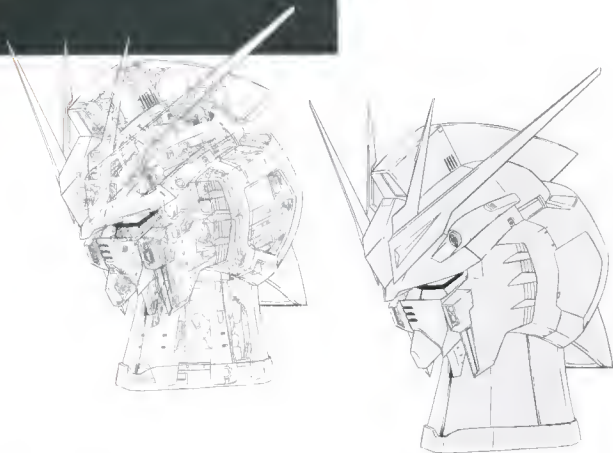


導素子よりも一段と高性能なものとして機能するため、NT専用機ではない通常型MSでも、各駆動部のモーターを制御するなどの駆動制御、とりわけ可変MSなどの複雑な動きが要求される機種への応用が検討された。

しかし『ガンダム』では、駆動制御については Zガンダム や ZZガンダム でも用いられ技術の確立していたバイオセンサーを用いていたとされる。これは先述のように構造強度保証が問題となったためである。それでも、AF社製サイコミュ・チップは各駆動モーターを制御するバイオセンサーと並列して装着。鋳込んだものではないし、モーター制御の信号を送る機能は生きていた。そして、搭乗パイロットのニュータイプ素養の強化で、どちらかを自動選択するともいわれている。

アムロ・レイ大尉の要望による感応波感知・受信の機能を強化するため、サイコミュ・チップを内包した精神感応波感知機能材料を構造材とした外殻構造体がコクピットに用いられ、シートのヘッド・レスト後方では集束型感応波トランスミッター・レシーバーとして機能するデバイスが試作され、搭載されている。ただし、先述のようにAE社の社内規格基準では、この材料は骨格構造材への適用はできず、それはニュータイプである同大尉の言であっても譲れないもので、コクピット外殻に用いたことも人きな譲歩といえる。現場の混乱を避けるため、構造強度基準に満たない「サイコフレーム」を「PFマイナー」と仮称してもいたようだ（マイナーが引いていないものが強度基準を満たすもの。時にはPFメジャーと呼ばれる場合もあった）。

Diagram illustrating the head position and orientation, showing a vertical line and a diagonal line pointing upwards and to the right.



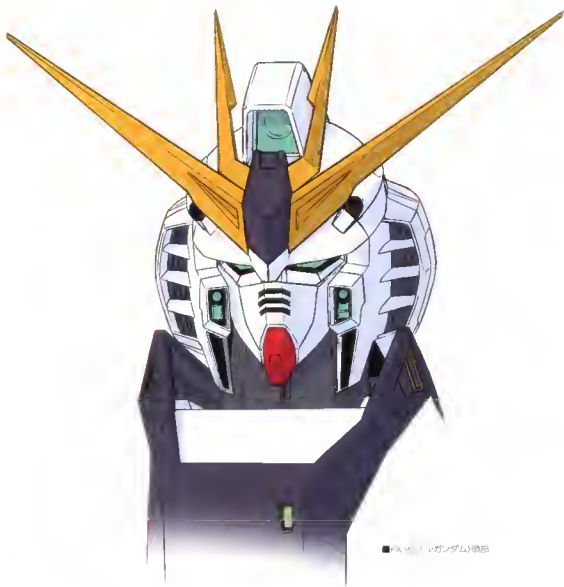
【頭部】

νガンダムは、連判陣のアイコンとして大きな存在である「GUNDAM」としての意匠を踏襲しているが、エウロコが運用した「アナハイム・ガンダム」としての記号性もそのまま維持するデザインとなっている。特別な意味を有するモビルスーツの「機章」・「眼紋」に類する「ツノ」はガンダム、の名を冠する機体からバリエーションで特異（非量産）であることの代名詞になってきたが、νガンダムでは、双眼の「眼の覆い（バイノキュラ・グレイズ・シールド）」部分に集約されてきた光学系映像感受器機ユニットに加えて、「顔」部分にも光学系センサーが追加された。また「ツノであるところのアンテナ」には、MSZ-006やMSZ-010同様のデュアルV形を採用している。これは止断な系統を象徴するV字の「ツノ」が「ガンダムMK.III」によって「ティターンズ」の機章となつたことを嫌い、エウロコ運用のガンダム（MSZ-006、MSZ-010）で標準化された4本ツノタイプが用いられたためであるとの証でもある。

変形を前提とした構造のMSZ系機体では、変形時可動域とクリアランスの関係から頭部胴体は側扁したようなアウトラインで設計されてきたが、νガンダムは、その印象を残しつつもRX 78に近い形状に戻されている。これは筐体内部の容積拡大が目的で、搭載機材の小型高性能化にもなっており、広くなったスペースに固定武装の60mmバルカンと砲弾を収納格納、またサイコミュ用エミッター（発信装置）とレシーバー（受信装置）の格納にも収められているようだ。

サイト・スホンソンの冷却用エアインテイクは全領域運用機体の場合は開口面積を大きく

「ハイノキ」は、**LED**
人間の目のように、**1億1千万**
は光の伝播速度であるが、**1メートル**を精
通常、**ブレイズ・ノーマル**は緑色、**オレニ**
系のカラーに見えるが、これは保護膜にエ
トロクロム系材料を用いているためで、内装
の場合センサカラーと偽物のか
から適度の輝度を選択的に透過する
た機能を実現している。



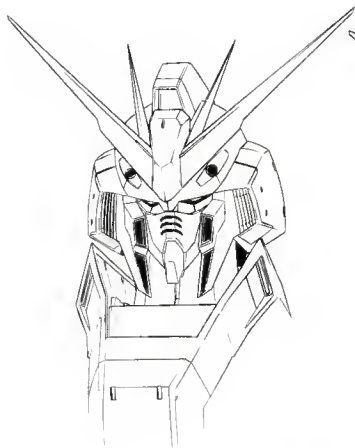
■RX-93 Vガンダムの頭部

したが、少なくとも試作1号機に関しては完全なOG域での運用に特化したMSとして設計されているため、コロニーや航空艦ドック内での使用に耐えうる程度の冷却用空気流入に十分な流量を想定したものへと変化している。

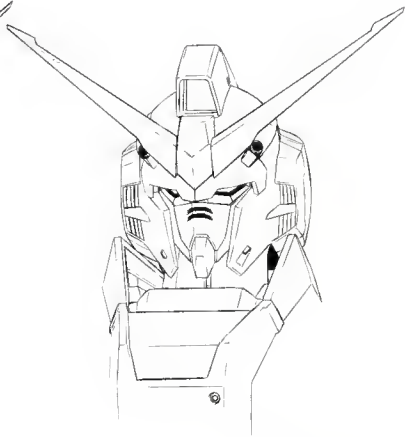
MSZ-006が運用された時代、ミノフスキー粒子散布によるレーザー波妨害環境は変化しており、探知装置は再びRX-78の初期設計時と同じようにレーザー波をメインに掘えることが決定されたが、Vガンダム」の時期になってもこれは同様である。たゞ、MSZ-006では前方探知用主レーザー・アンテナをコンフォーマル・アンテナに変更しているが、機材のロシスティックスの問題から「Vガンダム」は再び「アゴ」部分をレドームとし、内部にアクティブ・アレイアンテナとアダプティヴ・アレイアンテナを併設する方式に戻している。とはいえ、RX-78運用時よりも機材そのもの

の高性能化が進んでおり探知能力は雲泥の差であった。また、「アゴ」上部に被る「面頬」部分も、Zガンダム」ではコンフォーマル・レーザーだったが、これも装甲に戻され、横に走る3本のスリットはレーザー用の送受信「窓」となっており、測距、通信、レーザー・レーザー機材が背後に設置されている。レーザー・レーザーによる感知情報の映像化も精度が向上し、探知距離に違いは生じるが周辺環境の状態によってレーザーの波長を自動的に最適化、コクピット表示画像の補強が行われる仕組みが採用されていた。

なお、光学的視覚情報は、パイロットがリアルタイムで周辺環境合成表示画像を視認しながら機体の操縦を行う方式がMSの標準となったことから依然として重要で、可視光域の光学感受装置、いわゆるメイン・カメラはRX-78



■RX-93CV2(キルガンダム)頭部



■RX-94(電撃型ガンダム)頭部

系MS同様、頭頂部フェアリング内に収められるが、内蔵機材の小型高性能化はさらに進みズーム機能が強化され、望遠画像もはるかに解像度が向上した。画像イメージは、遠赤外線まで拡張感知される情報を処理し合成されるが、情報の重要度判定は従来通りに行われ、パイロットの負荷軽減のため統合整理された映像としてモニターに表示される。もちろんオリジナルのままの視覚情報を表示することも可能である。

眼の透明部(バイノキュラ・グレイズ・シールド)は機能リセットに伴い放出されるエネルギーが、可視光域遷移するために発光する現象はある程度解消されたが、かねてより運用上の問題とはならないとして特に対策を講じることはなかったことに加え、対可視光域ジャマーによる「目眩まし」をより効果的にフィルタリングするためのコーティングが強化されていたようで、光学機器の保護用グレイズ・シールドは肉眼では緑色発光しているのように見える。

“ツノ”は通信用の広帯域送信用ブレードアンテナで、MSZ-006以来のデュアルV形式である。開発時からニュータイプであるアムロ・レイ大尉(当時)による運用を想定し、単機での長距離機動的運用が多くなる。一方で他のMSと協同しての戦闘行動も考えられることから、MSZ-006やMSZ-010同様に、無線通信システムは送受信帯の幅を広げたままであるが、専ら外側の2本が受信用、内側の2本を送信用——もちろん逆転も可能である——に機能分離している。ちなみに、各アンテナは基部からある程度可動させることができ、最適受信角度となるよう角度を自動調整する機構が内蔵されていた。また、基部はレドームであり、内部にはアレイ・アンテナが収納されるが、容積の半分はサイココミュ通信用のデハイスであったようだ。

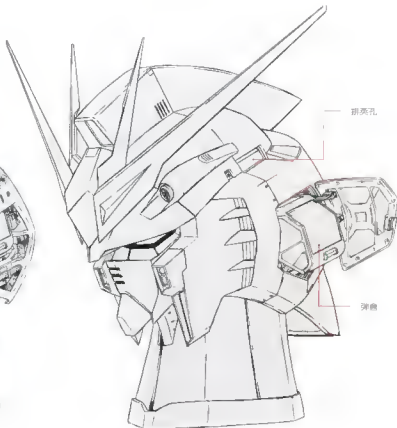
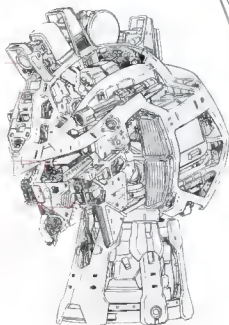
ホドリスコープ式
眼睛が基盤の内面に埋め込まれた装置。主眼を動かす効果のほか、従来の軍用式と異なり推定式装置の性質も持つことから、短い距離でも効率がよいとされる。

メイ トメ

パイノニコ
レイズン

制動、通信、
レーザーレーラー機材

レーザー



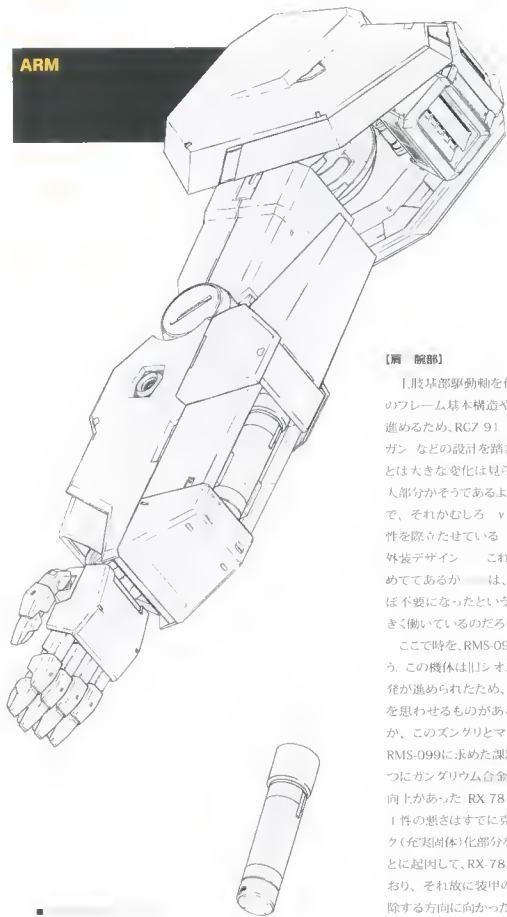
頭頂部後方カメラは超広角で視野を大きく取っているが、フィン・ファンネルを装備した場合には左舷の半分近くの視界が遮られる。この点について設計者は不安を漏らしたが、アムロ大尉はまったく意に介さない様子であったという。必要なのはファンネルを切り離した後の後方視界であって、ファンネルを要するような戦況にならない限り後方の視覚的情報は不要、簡単に後ろを取らせるようなことはしないという自信の表れだったのかもしれない。

頭部バルカン砲ユニットの搭載は機体を設計する側としてはあまり好ましいことは受け止めていないが、*「Vガンダム」*の場合、運用者サイドの強い要望もあって実装された。ただ原則としてDG用であり、砲身や機関部の素材は改善され耐熱性などが向上していても冷却の問題と燃焼ガスの排出、さらに装弾数の少なさは相変わらず解決すべき課題であった。また過去の経験から排炎で放出された空薬莖は時に大きな危険を招くことがわかりながら、依然として薬莖式で機外投棄する仕組みがそのまま搭載されている。側頭部後方斜めに開口した排気孔のデフレクターによって斜め後方に排出されるよう、一応は最大限の配慮がなされている。また発射薬燃焼にともな

い発生するガスは、衝撃吸収装置に併設された吸着用ゲルバックでパッシブながら除去されるようになっていた。

口径は従来通り60mmを維持、実体弾を固体発射薬で射出するという点も変化はないが、ここに至って砲弾は「テレスコープ式」に変更されている。これにより機関部と薬室の構造や給弾方式にも大きな変化が生じている。また砲弾の直径は増すものの前後長が短くなり、多少なりとも機関砲装填収納容積が拡大された。*「Vガンダム」*搭載のバルカン砲口径は60mm説と90mm説があるが、おそらく後者は薬莖径のデータを誤って記載したことによるのであろう。

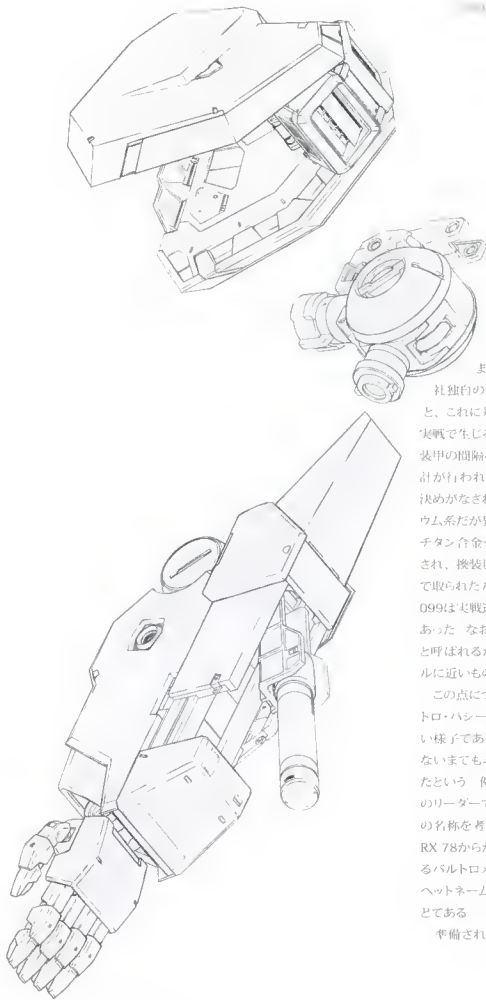
対MS装甲用の弾種は、結局のところ従来通りの運動エネルギー弾頭が効果的であるとされ、ガンダリウム合金で厚く被覆された徹甲弾頭が標準である。このほか装甲の隙間に入ってMSの駆動を阻害するショットシェル相当の弾種も用意されていた。化学エネルギー弾としては徹甲榴弾、MSの光学系を一時的に機能不全とさせる目的の閃光弾もあるが、あまり使用頻度は高くなかったようである。



【肩 腕部】

肩関節駆動軸を保護するための肩部分装甲は、内部のフレーム基本構造やスラスターの共用を図り合理化を進めるため、RG79「リ・ガズィ」や量産機RGM 89「シェガン」などの設計を踏まえた構造で、標準的なMSのそれとは大きな変化は見られない。他のアナハイム製MSの大部分がそうであるように、装甲外部の面構成は平面的で、それがむしろ「ガンダム」では「GUNDAM」の記号性を際立たせている。曲面を排しているかに見える装甲外装デザイン。これは機体全体、そして他の機種も含めてであるが、すでに実体弾兵器への対策はほぼ不要になったという、クライアントとAE社の判断が大きく働いているのだろう。

ここで時を、RMS-099「リック・ディアス」開発時まで遡ろう。この機体は旧シオン系技術者が中心となって設計・開発が進められたため、全体のシルエットにMS-09「ドム」を思わせるものがあると言われる。確かにその通りだが、このズングリとマッシブなプロポーションは、AE社がRMS-099に求めた課題に起因するものである。そのひとつにガンダリウム合金製装甲の強化～肥厚化と耐衝撃性向上があった。RX-78当時のルナ・チタニウム系合金の加工性の悪さはすでに克服されていたが、肥厚のためハルク（充実固体）化部分を従来の数倍に及ぶまで増厚したことにより、RX-78以来の成形性の悪さが再び戻っており、それ故に装甲のデザインは曲面構成をなるべく排除する方向に向かったらしい。

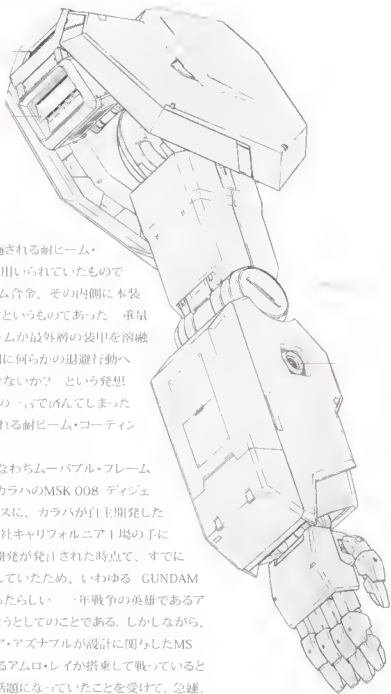


またRMS-099は、実装された シーフス、(AE社独自のムーバブル・フレームに相当する骨格構造)と、これに対する各部装甲の自動追従・駆動システムの、実戦で生じる不都合を洗い出す目的もあり、フレームと装甲の間隙をタイトに決め込むことはせず余裕のある設計が行われた結果、外に向かって大きく各装甲の位置決めがなされたのである。一説には、同形状のガンダリウム系だが異種素材の装甲材や、装甲厚の異なるもの、チタン合金セラミック複合材などの外装も並行して製造され、機装して実戦に送り出されたい。かつてRX 78で取られた方式に似た開発手法である。いかなればRMS-099は実戦運用試験機的な色合いを強く残した機体でもあった。なお、RX-098はプロトタイプリック・ディアスと呼ばれるが、この機体はいわば実動コンセプト・モデルに近いものと解釈すべきだろう。

この点についてはエウゴ側も承知しており、特にクワトロ・バシーナことシャア・アズナブルは一向意に介さない様子であったとも伝えられるが、一方で欠陥とは言えないまでも非合理的な部分には、容赦ない提言を行ったという。例えばそれは機体性能のみならず、エウゴのリーダーであるブレックス准将が独自に「γカンダム」の名称を考えていたことにも及び、その形状があまりにRX 78からかけ離れているとして、喜望峰の発見者であるバルトロメウ・ディアスにちなみ「リック・ディアス」なるヘットネームを強烈に推したという逸話も残されているほどである。

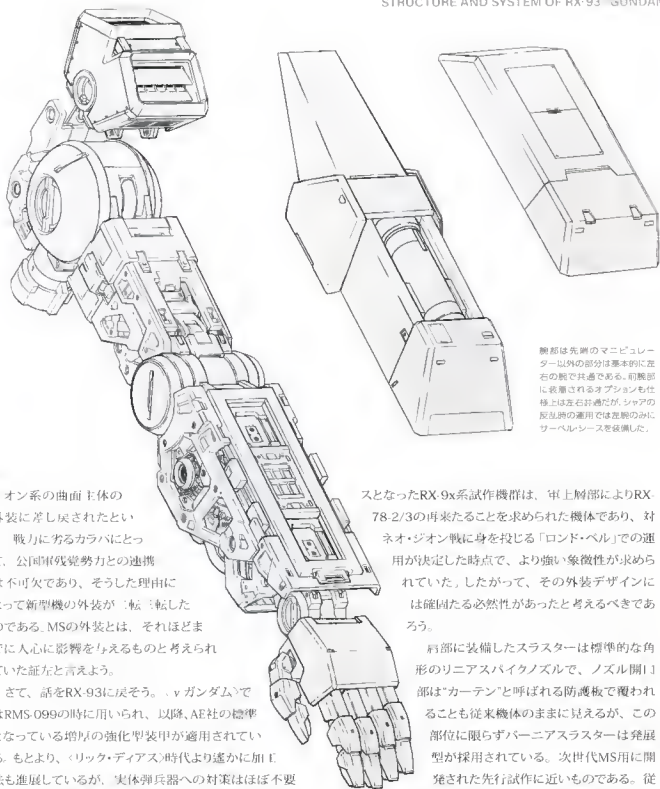
準備された装甲のバリエーションの中でも特異なの

機体1



は、MSN 001後にMSN 00100に改良される。●施される耐ビーム・コーティングと同等の組成を有するジェル状材料が用いられていたものであろう。これは、最外層にハルク化したカンタリウム合金、その内側に本装甲を置き、両者の空隙を耐ビーム・シェルで満たすというものであった。重量が高むため宇宙運用機ならではの発想だが、ビームが最外層の装甲を溶解しジェル層を発火させるまでの、ごくわずかな時間に何らかの回避行動へと移行する「時間稼ぎ」的機能を持たせることができないか? という発想に基づくものである。もとより評価は「意味がない」の一言で済んでしまったが、ここに後のMSN 065・シナンシュにも用いられる耐ビーム・コーティングの発想の原点を垣間見ることができる。

ついでに書けば、このRMS-099の「ジークス」すなわちムーブブル・フレームを元に、独自に改造を施して完成された試作機がカラハのMSK-008「ディジェ」である。エウゴから供与されたRMS-099をベースに、カラハが自主開発した機体とされているが、前述のとおり実態としてはAE社キャリフォルニア1場の手により仕上げられた機体だ。この機体については、開発が発注された時点で、すでに現役復帰間もないアムロ・レイ大尉の搭乗が決定していたため、いわゆる「GUNDAM的な特徴を付与」外装に調整しようという計画があったらしい。一年戦争の英雄であるアムロがカラハに付いたことを喧伝し、「士気を高めよう」としてのことである。しかしながら、ノンスム・ダイクンの後継者であるところのシャア・アズナブルが設計に関与したMS「すなわちRMS-099」に、かつてのライバルたるアムロ・レイが搭乗して戦っているという噂が、旧シオン公国軍系の反連邦組織の間で話題になっていたことを受けて、急速、



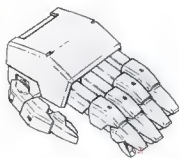
腕部は先例のマニピュレーター以外の部分は基本的に左右の腕で共通である。前腕部に装着されるオプションも仕様上は左右共通だが、シャアの版互換の運用では左腕のみにサーベルシースを装備した。

オン系の曲面主体の外装に差し戻されたという戦力に劣るカラバにとつて、公国軍戦力との連携は不可欠であり、そうした理由によって新型機の外装が「転々転した」のである。MSの外装とは、それほどまでに人心に影響を与えるものと考えられていた証左と言えよう。

さて、話をRX-93に戻そう。『vガンダム』ではRMS-099の時に用いられ、以降、AE社の標準となっている増厚の強化型装甲が適用されている。もとより、〈リック・ディアス〉時代より遙かに加工法も進展しているが、実体弾兵器への対策はほぼ不要になったという判断に加え、曲面を多用すると製造工程が多くなり、絶対的なマシン・ランタイムが延びてしまう。大規模施設のあるフォン・ブラウン工場が有する成形マシンをフル稼働させたとしても、ランタイムを大幅に減じることは難しく、短い開発・製造期間に合わせて可能な限り平面を多用するデザインとなった。これによって、製造時間はおよそ半分になったといわれる。何より、ペー

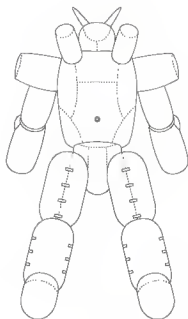
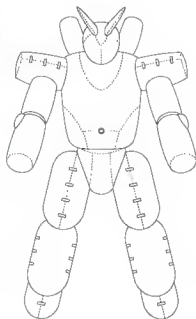
スとなったRX-9x系試作機群は、軍上層部によりRX-78-2/3の再来たることを求められた機体であり、対ネオ・ジオン戦に身を投じる「ロンド・ベル」での運用が決定した時点で、より強い象徴性が求められていた。したがって、その外装デザインには確固たる必然性があったと考えるべきであろう。

肩部に装備したスラスターは標準的な角形のリニアスパイクノズルで、ノズル開口部は「カーテン」と呼ばれる防護板で覆われることも従来機体のままに見えるが、この部位に限らずバーニアスラスターは発展型が採用されている。次世代MS用に開発された先行試作に近いものである。従来機の多くはノズル下、腕基部に可動式の腕保護装甲が装備されスラスターの推力偏向板も兼ねるが、『vガンダム』ではこれを廃し、ノズルのユニット全体が駆動、推力軸を変更する方式——この形態はRGM-89〈ジェガン〉に受け継がれている——となった。肩のスラスターは通常機動時に用いることはほとんどなく、戦闘時の高機動に使用する目的で設置されている。



■ビーム・サーベル
キャパセル

ダモ（機体全長）



■ビーム・サーベル収納状態

【ダモ・バレーン】

U.C.0080年代半ばから使われたダモ・バレーンは、ミノフスキー粒子の影響下においては視覚的に本体とすぐに区別が付かない、とりわけCGによって処理された360°スクリーン映像ではパイロットの視界を幻惑する効果は高かった。また狭小感増進後の数秒～十数秒ではあるが、脳MSの複合センサーを稼働するためのMS本体に似た信号を放出する誘導を持つ。MSや機師は光学及び電磁的にこれをダミーと判定する能力を持つが、使うタイミングによってはゼロコンマ数秒ほどのセンサーの反応によって前向きな誤作動が得られた。機体機にはれば、真正本体と区別することは不可能だったと思われる。

当初、 γ ガンダムには通常のMSに用いられるより推力を強化したものを装備する予定でいたが、これもアムロ大尉の一言で却下され、通常型が採用されている。

関節駆動用のフィールド・モーターは、制御用のバイオセンサーとサイコミュ・チップの並列装備であるが、搭乗パイロットが非ニュータイプであれば前者、ニュータイプであれば後者が稼働する設定となっている。これは他の部分も同様であった。

上腕装甲はシンプルな形状であるが、装甲は厚く、フレームとの結合も他の部位よりも強固になるよう設計された。前腕部とマニピュレーターの可動域を大きく取り、かつ武器の取り回しを考えると、どうしても上腕部を細く設計する方向性に向かうが、激しい機動や動きでは上腕と肘関節に負荷がかかるため、肘関節のフレーム外装も含めて、ギリギリのところまで太く、大きく作られていた。

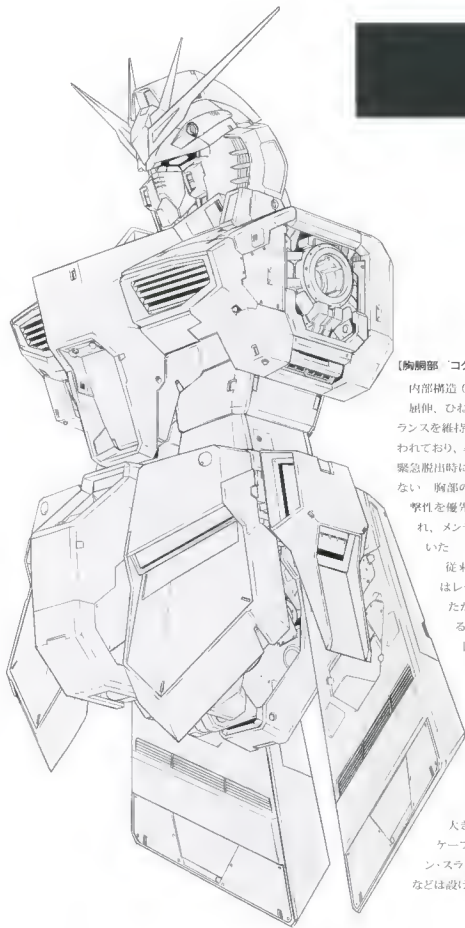
前腕部は連邦系MSとしては異例の左右非対称外装となっている。これは左腕外側にビーム・サーベルを装着せざるを得なくなったためである。2基装備が標準となっているビーム・サーベルだが、 γ ガンダムも同様に2基装備を選択した。原則として固定武装を極力排し兵器プラットフォームとしてのMS初期コンセプトに同帰した機体であるため、ビーム・サーベルは近接防御戦用兵器として頭部のバルカン砲同様に近距離兵装として重要性

は高まっている。本来であればバックパックの上部左右にストックするのが通常だが、本機のもっとも重要なガジェットともいうべきサイコミュ兵器の装備にはバックパック以外、設置すべき場所がなかったこともあり、ビーム・サーベルは片側のみとし、もう1基を腕にセットするという形式に落ち着いていた。この腕に装備するためのサーベル・シースそのものは左右いずれにも装備可能であるが、 γ ガンダムは左に装備される。シースにはサーベル用の専用キャパシターが内蔵され、常にエネルギーがフルチャージされるようになっている。収納されるサーベルは、〈ジェガン〉などで用いられる連邦軍標準仕様様の内部機構を流用したもののだが、筐体は新造されて、ストレートな形状になっている。

前腕の上部、肘関節近くには姿勢変更用の低温ヒートシンクが設けられている。これは機体内駆動部の循環冷却に使用し気化した熱交換用触媒の一部を放出し、運動エネルギーを得ようというもので、宇宙運用の高機動機体には多く使用されてきた装置のひとつである。片腕2基あり、腕の動きによって噴射方向を偏向し機体制動や機動に用いられるものである。

マニピュレーター（手）は駆動系のメカニズムこそサイコミュ対応に変更されているが、基本設計や外装筐体は従来型MSのパーツを共用していた。

BODY

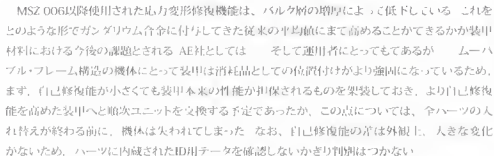


【胸腹部「コクピット」】

内部構造（ムーバブル・フレーム）による機体姿勢の動き＝屈伸、ひねり に対して、これを剛害しないようなクリアランスを維持しながら関節を最小限にするタイトな設計が行われており、基本的にはごくオーソドックスなスタイルである。緊急脱出時に有効なコア・ブロック・システムは採用されていない。胸部の装甲は特に強固に作られており、また、耐衝撃性を優先する目的から分割は最小限となるように構成され、メンテナンス用の開口部も可能な限り小さく作られていた。

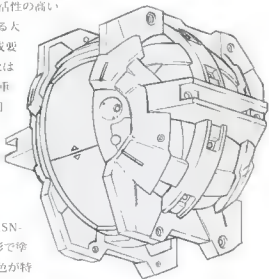
従来から「ガンダム」では胸前パネル背後の空間にはレーダーなどの機器を収納していることが多かったが、本機も同様で、予備のレーダーが収められるが、加えてサイココミュの送受信デバイスの格納区画に充てられている。左肩付近には、予備の光学センサーが設置されている。この機器は、機体が水平に近い姿勢で巡航する際に、進行方向前、前上の光学情報を取得することが主機能であり、当初は左右に各1基が設置される予定であったが、機能的には1基のみで足るであろうとの判断から、最終的には左側のみの装備に落ち着いたようだ。

バックパックとの結合部は従来のような装甲を大きく切り欠く仕様ではなく、機材のロックと伝達ケーブルの接合ポートのみが開口する構造で、メイン・スラスター用のプロペラント・ベレット・収納スペースなどは設けられておらず、筐体構造強度は高くなっている。



Vカンダム、外装の面にも特徴としては、機体色がそのまま装甲材質の違いを表している点にある。AEは過去、新型のMS開発に当たって装甲、塗装という観点からの素材改質にも力を注いできた。装甲は被塗装材の保護という機能がもともと重要で、特に活性の高い

元素に取り囲かれた引当元素（例えば酸素やハロゲン族元素の存在する大気の中）や放射線に暴露する可能性が高い環境下では重要な機体構成要素といえる。しかしその一方で、塗料は塗布せずにすればそれに越したことはない。なぜならば機体の機能、機動のみに着目した場合、塗料は、特に重くない。少なくとも重量であるからか AE社には傘下の金属表面処理部門、メーカに、カンダリウム合金への塗料に代わる着色保護膜形成法の研究を依頼。その成果のひとつとして大川化されたのが、MSN 00100の機体表面に施された耐ビーム・コーティングであった。これとは別に、従来通りの塗料の形態を維持したまま、より機操作性が高いペイントの開発も行われている。



耐ビーム・コーティング剤を塗布定着させる技術が確立されたのはMSN-00100において、コーティングは耐熱金属セラミックス塗膜と積層される形で塗布されていた。当時、積層コーティングによる素材の上塗りによる金色の発色が特徴のひとつだったが、その後、必要に応じて最外層に染料型、顔料型の有色塗料またはコーティング剤を塗布することから一般的になる。

ムタンダム。の場合も例外ではなく、 Pb 、鉛鉄の着色は有色コーティングによるもので、このトの層は耐ヒームコーティングが施されている。鉛鉄部分は白色部よりも耐熱性能を向させたコーティング材料が用いられていた。同様に橙黄色部は装甲材料そのものが耐熱特性を強化したガンダリウム合金が用いられていた。この材料は耐衝撃性が装甲ガンダリウム合金よりも低いが、超高温への耐性が高いもので、色をセラミックコーティングによる。従来であれば耐熱塗料、あるいは耐熱ステッカー式コーションラベルによって注意喚起を行うところを、部位そのものの色を変えることで代替している。足の前縁にある橙黄色部が注意喚起部分の1つだが、アンカー・クローとして機能する部分であるため、材質は装甲用ガンダリウム合金で作られ、装甲同様のカラーコーティングにより橙黄色に彩色されている。

厨房/左右のタケノコ採掘は、宇宙内用機であるためカウンターバーニアシステムであり、内部にはイサギを搭載する。搭載される機材は他のMSでも用いられるコンポーネントだが、制御系にはサイクロ・チップが用いられている。探知機器のユニットを共有し、排気口側修繕材なども可能な限り基産機器の規格に落と込んだ設計となっているものの、基本制御系はすべてサイクロ固有の機器に置換されなければならないため、結果的に純粋な意味での他MSとの部品共用は見込めないのであった。

【コタビット外股】

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㏀ ㏁ ㏂ ㏃ ㏄ ㏅ ㏆ ㏇ ㏈ ㏉ ㏊ ㏋ ㏌ ㏍ ㏎ ㏏ ㏐ ㏑ ㏒ ㏓ ㏔ ㏕ ㏖ ㏗ ㏘ ㏙ ㏚ ㏛ ㏜ ㏝ ㏞ ㏟ ㏠ ㏡ ㏢ ㏣ ㏤ ㏥ ㏦ ㏧ ㏨ ㏩ ㏪ ㏫ ㏬ ㏭ ㏮ ㏯ ㏰ ㏱ ㏲ ㏳ ㏴ ㏵ ㏶ ㏷ ㏸ ㏹ ㏺ ㏻ ㏼ ㏽ ㏾ ㏿ 㐀 㐁 㐂 㐃 㐄 㐅 㐆 㐇 㐈 㐉 㐊 㐋 㐌 㐍 㐎 㐏 㐐 㐑 㐒 㐓 㐔 㐕 㐖 㐗 㐘 㐙 㐚 㐛 㐜 㐝 㐞 㐟 㐠 㐡 㐢 㐣 㐤 㐥 㐦 㐧 㐨 㐩 㐪 㐫 㐬 㐭 㐮 㐯 㐰 㐱 㐲 㐳 㐴 㐵 㐶 㐷 㐸 㐹 㐺 㐻 㐼 㐽 㐾 㐿 㑀 㑁 㑂 㑃 㑄 㑅 㑆 㑇 㑈 㑉 㑊 㑋 㑌 㑍 㑎 㑏 㑐 㑑 㑒 㑓 㑔 㑕 㑖 㑗 㑘 㑙 㑚 㑛 㑜 㑝 㑞 㑟 㑠 㑡 㑢 㑣 㑤 㑥 㑦 㑧 㑨 㑩 㑪 㑫 㑬 㑭 㑮 㑯 㑰 㑱 㑲 㑳 㑴 㑵 㑶 㑷 㑸 㑹 㑺 㑻 㑼 㑽 㑾 㑿 㒀 㒁 㒂 㒃 㒄 㒅 㒆 㒇 㒈 㒉 㒊 㒋 㒌 㒍 㒎 㒏 㒐 㒑 㒒 㒓 㒔 㒕 㒖 㒗 㒘 㒙 㒚 㒛 㒜 㒝 㒞 㒟 㒠 㒡 㒢 㒣 㒤 㒥 㒦 㒧 㒨 㒩 㒪 㒫 㒬 㒭 㒮 㒯 㒰 㒱 㒲 㒳 㒴 㒵 㒶 㒷 㒸 㒹 㒺 㒻 㒼 㒽 㒾 㒿 㓀 㓁 㓂 㓃 㓄 㓅 㓆 㓇 㓈 㓉 㓊 㓋 㓌 㓍 㓎 㓏 㓐 㓑 㓒 㓓 㓔 㓕 㓖 㓗 㓘 㓙 㓚 㓛 㓜 㓝 㓞 㓟 㓠 㓡 㓢 㓣 㓤 㓥 㓦 㓧 㓨 㓩 㓪 㓫 㓬 㓭 㓮 㓯 㓰 㓱 㓲 㓳 㓴 㓵 㓶 㓷 㓸 㓹 㓺 㓻 㓼 㓽 㓾 㓿 㔀 㔁 㔂 㔃 㔄 㔅 㔆 㔇 㔈 㔉 㔊 㔋 㔌 㔍 㔎 㔏 㔐 㔑 㔒 㔓 㔔 㔕 㔖 㔗 㔘 㔙 㔚 㔛 㔜 㔝 㔞 㔟 㔠 㔡 㔢 㔣 㔤 㔥 㔦 㔧 㔨 㔩 㔪 㔫 㔬 㔭 㔮 㔯 㔰 㔱 㔲 㔳 㔴 㔵 㔶 㔷 㔸 㔹 㔺 㔻 㔼 㔽 㔾 㔿 㕀 㕁 㕂 㕃 㕄 㕅 㕆 㕇 㕈 㕉 㕊 㕋 㕌 㕍 㕎 㕏 㕐 㕑 㕒 㕓 㕔 㕕 㕖 㕗 㕘 㕙 㕚 㕛 㕜 㕝 㕞 㕟 㕠 㕡 㕢 㕣 㕤 㕥 㕦 㕧 㕨 㕩 㕪 㕫 㕬 㕭 㕮 㕯 㕰 㕱 㕲 㕳 㕴 㕵 㕶 㕷 㕸 㕹 㕺 㕻 㕼 㕽 㕾 㕿 㖀 㖁 㖂 㖃 㖄 㖅 㖆 㖇 㖈 㖉 㖊 㖋 㖌 㖍 㖎 㖏 㖐 㖑 㖒 㖓 㖔 㖕 㖖 㖗 㖘 㖙 㖚 㖛 㖜 㖝 㖞 㖟 㖠 㖡 㖢 㖣 㖤 㖥 㖦 㖧 㖨 㖩 㖪 㖫 㖬 㖭 㖮 㖯 㖰 㖱 㖲 㖳 㖴 㖵 㖶 㖷 㖸 㖹 㖺 㖻 㖼 㖽 㖾 㖿 㗀 㗁 㗂 㗃 㗄 㗅 㗆 㗇 㗈 㗉 㗊 㗋 㗌 㗍 㗎 㗏 㗐 㗑 㗒 㗓 㗔 㗕 㗖 㗗 㗘 㗙 㗚 㗛 㗜 㗝 㗞 㗟 㗠 㗡 㗢 㗣 㗤 㗥 㗦 㗧 㗨 㗩 㗪 㗫 㗬 㗭 㗮 㗯 㗰 㗱 㗲 㗳 㗴 㗵 㗶 㗷 㗸 㗹 㗺 㗻 㗼 㗽 㗾 㗿 㘀 㘁 㘂 㘃 㘄 㘅 㘆 㘇 㘈 㘉 㘊 㘋 㘌 㘍 㘎 㘏 㘐 㘑 㘒 㘓 㘔 㘕 㘖 㘗 㘘 㘙 㘚 㘛 㘜 㘝 㘞 㘟 㘠 㘡 㘢 㘣 㘤 㘥 㘦 㘧 㘨 㘩 㘪 㘫 㘬 㘭 㘮 㘯 㘰 㘱 㘲 㘳 㘴 㘵 㘶 㘷 㘸 㘹 㘺 㘻 㘼 㘽 㘾 㘿 㙀 㙁 㙂 㙃 㙄 㙅 㙆 㙇 㙈 㙉 㙊 㙋 㙌 㙍 㙎 㙏 㙐 㙑 㙒 㙓 㙔 㙕 㙖 㙗 㙘 㙙 㙚 㙛 㙜 㙝 㙞 㙟 㙠 㙡 㙢 㙣 㙤 㙥 㙦 㙧 㙨 㙩 㙪 㙫 㙬 㙭 㙮 㙯 㙰 㙱 㙲 㙳 㙴 㙵 㙶 㙷 㙸 㙹 㙺 㙻 㙼 㙽 㙾 㙿 㚀 㚁 㚂 㚃 㚄 㚅 㚆 㚇 㚈 㚉 㚊 㚋 㚌 㚍 㚎 㚏 㚐 㚑 㚒 㚓 㚔 㚕 㚖 㚗 㚘 㚙 㚚 㚛 㚜 㚝 㚞 㚟 㚠 㚡 㚢 㚣 㚤 㚥 㚦 㚧 㚨 㚩 㚪 㚫 㚬 㚭 㚮 㚯 㚰 㚱 㚲 㚳 㚴 㚵 㚶 㚷 㚸 㚹 㚺 㚻 㚼 㚽 㚾 㚿 㜀 㜁 㜂 㜃 㜄 㜅 㜆 㜇 㜈 㜉 㜊 㜋 㜌 㜍 㜎 㜏 㜐 㜑 㜒 㜓 㜔 㜕 㜖 㜗 㜘 㜙 㜚 㜛 㜜 㜝 㜞 㜟 㜠 㜡 㜢 㜣 㜤 㜥 㜦 㜧 㜨 㜩 㜪 㜫 㜬 㜭 㜮 㜯 㜰 㜱 㜲 㜳 㜴 㜵 㜶 㜷 㜸 㜹 㜺 㜻 㜼 㜽 㜾 㜿 㝀 㝁 㝂 㝃 㝄 㝅 㝆 㝇 㝈 㝉 㝊 㝋 㝌 㝍 㝎 㝏 㝐 㝑 㝒 㝓 㝔 㝕 㝖 㝗 㝘 㝙 㝚 㝛 㝜 㝝 㝞 㝟 㝠 㝡 㝢 㝣 㝤 㝥 㝦 㝧 㝨 㝩 㝪 㝫 㝬 㝭 㝮 㝯 㝰 㝱 㝲 㝳 㝴 㝵 㝶 㝷 㝸 㝹 㝺 㝻 㝼 㝽 㝾 㝿 㞀 㞁 㞂 㞃 㞄 㞅 㞆 㞇 㞈 㞉 㞊 㞋 㞌 㞍 㞎 㞏 㞐 㞑 㞒 㞓 㞔 㞕 㞖 㞗 㞘 㞙 㞚 㞛 㞜 㞝 㞞 㞟 㞠 㞡 㞢 㞣 㞤 㞥 㞦 㞧 㞨 㞩 㞪 㞫 㞬 㞭 㞮 㞯 㞰 㞱 㞲 㞳 㞴 㞵 㞶 㞷 㞸 㞹 㞺 㞻 㞼 㞽 㞾 㞿 㟀 㟁 㟂 㟃 㟄 㟅 㟆 㟇 㟈 㟉 㟊 㟋 㟌 㟍 㟎 㟏 㟐 㟑

胸前から腹部にかけてのエントリー・ポーチ・ドアは、胸装甲同様の形のもので、かつ3枚のスライド・ドアが斜めに重なり合っている。これは、コクピットへのアクセス環境によっては、気密を保つ必要があることを想定してのことである。最外装のドアは注意喚起のため赤色のコーティング彩色が施されている。

頭部の保護用“襟”装甲は側方のみで、高く立ち上がり、前寄りには“インテーク”様の開口部が設けられている。この内部には動体検知用のセンサーが内蔵され、頭部並びに頸部に正面から接近する異物を感知する。一定以上の質量、速度を有する物体については、センサーに置かれた近射レーザーで破壊することも自動的に行われる。

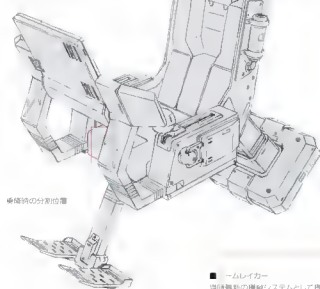
時動用スモスタ

低速スモスタ

BODY

■ リニア・シート

右図は、パイロットが正面のモニターを左向きに左右に分かれる。



乗務員の分割位置

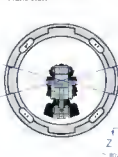
Z X

Side View



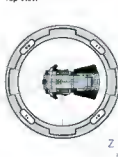
Z X
左右軸回転

Front View



Z X
前後軸回転

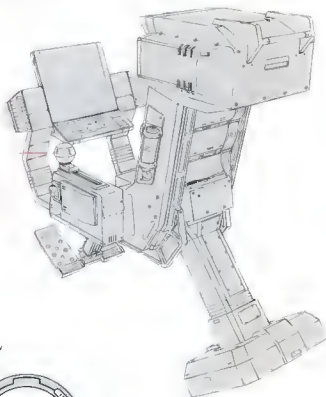
Top View



Z X
上下軸回転

■ リニア・シート

また、乗務員が正面のモニターを左向きに左右に分かれる。



RX-93 (ガンダム) 及び RGZ-91 (リ・ガズィ) に装備されたコックピット・シート。シートそのものはダストシートのものをそのまま適用しており、補助シートを取り付けるため、フレームや外板等所に前後外の穴が開けられていた。ヘッド・レストとヘッド・レストの間に、ノーマルシートと接続するパイプを備える。

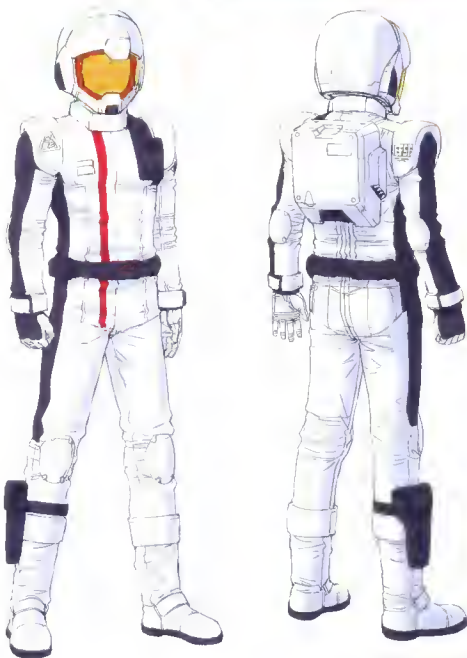
■ リニア・シート
当時最新の機敏システムとして開発されていたゲーム・リニア・シートを採用している。

【リニア・シート】

ガンダムに搭載されたリニア・シートは、直前にアムロ・レイ大尉が使用していたRGZ-91「リ・ガズィ」とほぼ同様の仕様であったことが判っている。ヘッド・レスト後方にサイコム・デバイスである集束型感応波トランスミッター・レーザーバーを備えるこのシートは、ニュータイプ・パイロット用の装備だが、「リ・ガズィ」に採用された理由は判然としなない。生産数の少ない「リ・ガズィ」に関しては詳細が今ひとつ不明で、恐らく本来は「ジェガン」と同じようなノーマルのシートであったと考えられる。「リ・ガズィ」は生産機それぞれで仕様が異なっていた可能性が高いが、ロード・ベール隊における運用機体は、「ガン

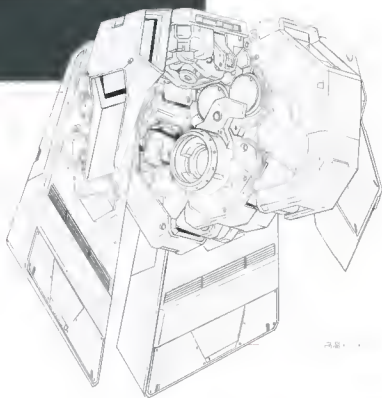
ダム」の開発に併せて、なんらかの改造が施されていたのかもしれない。Z系の機体である「リ・ガズィ」にパイオセンサーを装備することは十分に現実的なプランであり、その制御のためのインターフェースであったとの説が有力である。ただし「ガンダム」とは異なり、サイコフレームによって機体制御や外界知覚に適した演算ができない「リ・ガズィ」の場合、感応波の入出力やその効果の発揮は安定するものではなく、あくまでも補助としての導入であったと考えられる。ましてや、ニュータイプではないパイロットが本機を操縦する場合、これらのシステムを意識的に使用することなどは不可能だった。

COCKPIT / LINEAR SEAT



1983年当時、当試作機が採用していたMSパイロット用ノーマルシート、アルロイ大剣が採用していたものも基本的にはこれに準じ、外観に差はなかった。しかし、シート自体の使用したタイプはヘルメットの仕様が異なっており、詳細は不明であるが、ヘッドレスト後方のトランスミッターと構造体をやり取りしやすいよう、特殊な素材または発振器が採用されていた可能性がある。

BODY



【腰および股間部】

人型のMSでは大きな負荷のかかる部分だが、十分な経験と実績を持つAE社にとっては、設計、製造については大きな問題もなかった。ほぼ地上に降ろす可能性はないだろうという前提もあって、UG環境における運用に際しては、実績のある従来のMSのパーツをほぼ流用する形で完成された。もっとも制御系にサイコミュ・チップを組み込むという作業はあったのだが

股間部装甲は厚く、懸垂式に作り付けたプレート装甲も増厚した装甲であるが、各々に機動用スラスターを設置しているところか、一般的な汎用MSとは異なる特徴と、えるだろう。先述したように、高熱に曝される部分は橙黄色をコートした耐熱特性強化型ガンタリウム合金を使用する。両側と背面のプレート装甲には、この橙黄色が配されていることから、スラスターはフロベラントを用いた高温スラスターであることがわかるだろう。ここに収められたエンジンはいずれに置かれたものと同系列で、フロベラント・ベレットは背面プレート装甲1部に貯蔵されており、両側面へもここから送られる。そして、背面プレートの赤いプレートがフロベラント・コンテナへのアクセスドアになっているのだ

前の装甲にあるスリットは、低温スラスターとして機能するもので、上半身から股間の駆動部を冷却するために循環させる。高温した熱交換用触媒の一部を放出し運動エネルギーを得る。前腕に装備されている円形のスラスターと同じものと考えればよいだろう。内部は1本に絞込まれ、横方向は3分割

され、切替りは可動してスラスターのベクトル変更を可能にする。

股間部上面にある赤いパネルは装甲トアで、内部には熱交換用触媒のための中間冷却装置、触媒タンク、一次蓄熱装置などが内蔵され、また全身の各駆動用モーターのステータスを確認するモニターなどが格納されている。

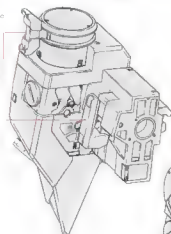
コクピットは「全周囲モニター」と呼ばれる360度全周画像表示式で、この時代のごく標準的な仕様となっている。リア・シートなどの基本装備筐体に関してはRGZ-91で用いられているものと極力共通化が図られているが、制御用の機器そのものがサイコフレーム化されているので、本質的に共用できるのは「ガブ」だけのことにすぎない。コクピットの全周モニター表示面外側はサイコフレームで球体殻が作られ、その外を装甲としてのガンタリウム合金外殻が覆う。球形構造は機体胴部中央に、ムーバブル・フレームのロールバーによって支持されるが、機体への衝撃をコクピットに直接伝達しないように、緩衝機構が収められている。コクピットのものは、緊急時脱出ポッド（イシュエクションポッド）としても機能し、ポッド外殻とコクピット内壁に設けられた空間には保管庫があり、数日分の非常食、飲料水、呼吸クリーナー、酸素ボンベ、救急箱、簡易補修キットなどが収められている。また、残りの空間はシェル化された水で満たされており、内外壁の緩衝・断熱・放射線シールドとしての機能を果たすほか、小径の埋め込み式ノズルから噴射させることでポッドの軌道変更、減速などが可能となっている（長距離、高速移動はできない）。

【バックバック】

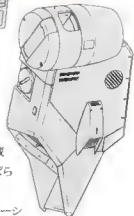
多くの場合、機体の用途に応じて様々な特徴的な形状をし、機種によっては機体側の内部構造を一部共有するような設計のものがあるが、νガンダムはバックバックのみで完結したシステムに近いものである。片側2基のエンジンとノズルをタンデム配置したユニットを1対、計4基のメイン・スラスターが推進のために用いられる。スラスターを取める筐体には、胸部と同じ材質を採用。プロペラント・ベレット・カニスターの寸法は従来のものと大きく変化はないが、内部に収納されるベレットそのものが改置されたうえ、スラスターのシステムも一新されており（別項参照）、同じ体積の旧式ベレットで推力を得た場合と比べ、およそ1.3倍近い出力があるといえる。

右のスラスター・ケーシング1半分はビーム・サーベル・マウントが占める。マウントはローテーション式で、使用時には右側の動きに連動してもっとも掴みやすい位置にサーベルが迎えに行くようになっている。これにより「初火力」までの時間が短縮され、アムロ機の技量のパイロットならば、抜き打ちに突進撃て敵MSを向断するまでに0.3秒ほどであったという。スラスター上部にマウントされているビーム・サーベルはAF社が次世代デバイスとして試験中の「ハイ・エネルギータイプ」の試作品で、伸縮式グリップでミニチュレーターによるグリップを確実なものにできるように大されている。また使用時には鈎状の構造が展開するが、これは単なるガードではなく、フィールドの制御装置で、これによってビームの形状をある程度コントロールし、ビームを扁平にすることも可能である。またエネルギー消費は増えるが、グリップのボメル（柄頭）部もビーム刃を形成することが可能で、1種の隠し武器として機能する。

ファンター・ターレット
ユニバーサル・アダプター



ビーム・サーベル・マウント



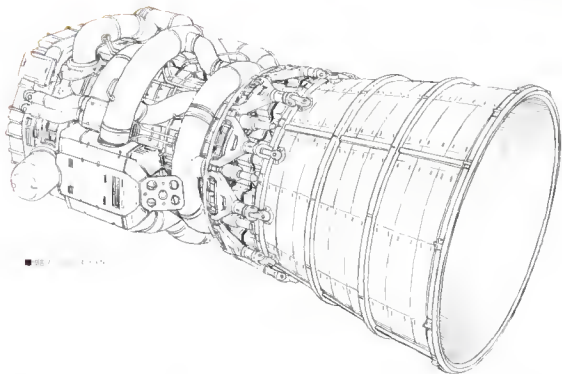
左上部は、サイコミュ兵器であるファンネルをマウントするターレットが設置される。νガンダムで使用されたフィン・ファンネルは大型で、機体開発時は他の部分にマウントして携行することは難しく、苦肉の策としてこのような形になったようだ。マウント・ターレットは感応波の中継デバイスが内蔵されているが、実際にはファンネルをリリースする時だけに用いられ、もっぱらモニターするだけであつたらしい。

バックバックの中央は大きく挟れており、言い換えるところ左右のスラスター・ケーシングは板状のマウントで連結され、ここには兵装をマウントするためのユニバーサル・アダプターが設けられている。

フィン・ファンネルのような大型の兵器を6基、それも左側にオフセットするという搭載方法を見てわかるように、初期のMSでは軌道変更と姿勢制御、高機動時に用いられMSの運動方式として常識となったAMBACは、νガンダムでは巡航時には用いることはなかった。ファンネルを装備した状態での質量移動による機動は、自動的に制御されるとはいえ、機上コンピュータのフライング・コントロール・システムにあまりにも負担をかけるためである。ファンネルをリリースした後は、通常のMSのようにAMBAC機動を行うが、こうした運用はニュータイプの搭乗が前提になっているからであろう。

VERNIER THRUSTER

当初は機体の機動性を向上させる目的でバーニアスラスターの改良を実現したRX-93であるが、その研究で得られた技術を姿勢制御や方向転換用のバーニアスラスターだけでなく推進用のメインスラスターにも転用している。そのためRX-93は（ジェガンタイプ）に匹敵する総推力を得るに至った。



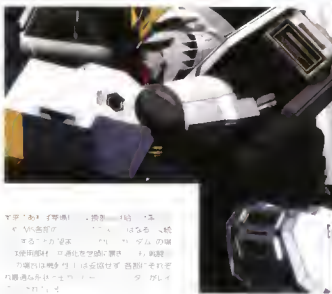
【バーニアスラスター】

マグネット・コーティング・システムの搭載により、RX-78-3以降のMSは4明の動作が高速化され、ニュータイプ・パイロットの操作性は向上したとされているが、宇宙空間における姿勢制御や方向転換用のバーニアスラスターは現用のMSにおいても一年戦争時のMSと比べ、出力の増加はあったもののレスポンスの向上はほとんど見られなかった。そこでRX-93の開発チームは、アムロ・レイからの提言も含め、MSの四肢と同様にニュータイプ・パイロットに対応するべくバーニアスラスターのレスポンス向上を目指して開発を進めることとなった。

従来MSのバーニアスラスターは、溶解のプロセスを経たプロペラント・ペレットを触媒に触れさせることで燃焼する方式だが、触媒に触れ燃焼を開始してから最大出力となるまで0.5秒〜0.8秒かかった。またスラスターから燃焼ガスが噴出しても、慣性の法則により機体が動き出すまでにはやはり時間がかかる。これらのタイムラグは、通常のMSパイロットにおいては訓練で慣れてゆくものだが、ニュータイプ・パイロットは戦闘経験を積み重ねるほど感覚が鋭敏になり、身体反応速度が速く

なっていくので乗れば乗るほど遅く感じるようになるという。

スラスターの開発チームは、まず最大出力までのタイムラグをできるだけ減らすことを考えた。従来知られていたのは、推進薬に触れて化学反応を促す触媒金属自体の温度を上げることだった。触媒金属はメッシュ状に成型され、スラスターの燃焼室の奥に取り付けられている。これにタンクから燃焼室に流入した推進薬に触れると、化学反応により爆発的に燃焼するが、燃焼の初期段階ではこの触媒メッシュの温度に比例して最大出力までの時間が短くなることが知られていた。しかし宇宙空間において触媒メッシュを常時高温に熱しておくことは、スラスターを作動させない時にもエネルギーを供給し続けなければならない。スラスターの数や出力規模によってはMS自体の稼働時間や武器へのエネルギー供給に制限がかかってしまう。また真空中で金属を熱すればそれだけで金属分子が逸散してしまい、メッシュの寿命が極端に短くなる。これらの理由により、従来MSでも触媒メッシュを加熱してはいたが、燃焼が開始されるぎりぎりの温度に抑えられていたのである。



そこでスラスラ開発チームは、触媒膜メッシュの温度を通常よりも低い温度に抑えておき、プロペントタンクからバレットの抽送に開始されると同時にメッシュの温度を「一気に上げるシステムを開発した。タンクから燃焼室に推進される可燃物に順に温度を上げてしまおうと考えたのだ。開発チームが1日目でテストを行ったところ、燃焼開始から最大出力までの時間は0.2秒~0.4秒ほどで短縮された。しかしメッシュの寿命は約半分に減ってしまった。だが、もともとRX 93は実験的な要素が強い。そのため、開発チームは今後のためのデータ取り用と割り切ってこの急速加熱システムを導入を決定。RX 93の納入先となるロケットの隊には技術者を派遣して顧客に連絡を取り合い、常に交換用の触媒メッシュは十分な量を用意することにした。

ところが、ハニアラスターの最大出力までの時間は短くても、その間、テストを繰り返した結果、やはりラスターの出力自体を向上させなければ、ニュータイプ・ハイロットの操作速度についていけなことが判明した。当時の一般的なMSに使われていたラスターのプロポラント・ペレットは、酸化剤を加えたうえ、プースターとなるアルミニウムやベリリウムの粉末を加えて固化させたものだった。開発チームはこのプロポラント・ペレットそのものも改良しなければならなかった。

スラスタの出力を上げるために推進薬に手を加える方法として、排気ガス中の分子数を上げる「推進薬に金属粉を混ぜる」がある。たとえば、MSでは一般的ではない液式システムでも、酸化剤は推進薬の7割の酸素を酸素と結びつけるのではなく、水素をある程度そのまま排出した方が排気中の分子量が下がって出力は上がる。また、金属粉は排気ガスの温度を上げ、これも出力向上に繋がる。開発チームはこの二つを一度に実現させるために、水素を吸着させた金属の粉末をプロペラントベレットに混ぜた「マグネシウムをベースとした水素吸着合金は、水素を取り込むとその主要成分になる」という。

る この粉末を混ぜることで余剰の水素分子と排気温度を上昇させるブースター効果とが一度に得られたのである この改良型プロペラント・ベレットを使ったバーニアスラスタは推力が30%以上も向上したという

触媒メッシュへの加熱とプロペラント・ベレットの改良により、パーニアスラスタのレスポンスは大幅に向上したが、それに伴って新たな問題が浮上した。機体の急激な加速や姿勢変更に伴う慣性により、パイロットの体がついていけないという問題である。ニュータイプといえども身体的能力はオールドタイプと変わらぬ。訓練により瞬間的に10G程度までは耐えられるとしても、新しいパーニアスラスタの導入により最大12G、瞬間最大20Gの加速度がパイロットにかかるようになった。この問題に対し、パーニアスラスタ開発チームだけでなく、RX 93開発チーム全体で対応策を検討した結果、従来は球形コクピットをショックアブソーバーにより支えていた機構をアクチュエーターに交換し、ある程度大きく移動させた後回転させられるようにした。機体が急激な方向に転じた場合などに、機体の運動とは反対方向に球形コクピットブロックを回転させ、その後正位置に戻すようにして急激なGがパイロットにかからないように改良した。この改良により、コクピット周りは1.1倍近く重量が増えたが、パイロットを保護することと優先させている。

RX 93が実戦に投入されると、ローチーごとに詳細なデータが月面の開発チームに届けられた。分析してみると、新開発のバーニアシステム・システムは 理論値をはるかにを超え、操作に對しての機体レスポンスが良くなる場合があることが判明した。これは球形コクピット・ブロックに使われたサイコフレームがパイロットの取波に反応し、一種の取波コントロールシステムとして機能し、操作に對する応答性をさらに向上させたからではないかとされている。

状態ス

【脚部】

大腿部のムーバブル・フレームは膝トから受けた衝撃を緩和し、股関節にこれを伝えないためアクチュエーター・ダンパーが複数内蔵されている。これらは他のMSでも同様で、またサイコミュの関与すべき部分でもないことから、大部分が従来型MSの部品をそのまま使用していた。

膝関節は、上下2軸方式ではなく単軸となり構造はシンプルになっているように見える。しかし、小型高性能化が進んでいる駆動用モーターを内蔵しているにもかかわらず、ケーシングが大型化している点に、新機構が隠されている。定以上に膝を曲げると可動軸そのものが、わずかながら偏心して駆動するメカニズムが内蔵されており、深い屈曲が可能となるように改修されているのである。ただし、外観上はほとんどわからない。

膝屈曲の可動域を得るために、大腿部装甲のト端には大きな切り欠きがあるが、もともとここには、ハイフ状構造を保護するためのスライト可動式装甲で塞がれる予定であった。納期を短縮された関係から、装甲をアッセンブルしないままでも納品されたが、ロンド・ベルでの調整時に、アムロ大尉が取り付ける必要はないという指示を出し、その結果、ムーバブル・フレームの機構が剥き出しになったのである。これは前方も同様で、膝を曲げたときにアクチュエーター・タンパーが露出するが、ここも設計ではスライト可動式の装甲が入る予定で、パーツも納品されていた。

アノカー・ロー

下脚はRX-78系列のシルエットに戻っているが、膝下端と両側にスラスターを装備する。これも高温スラスターで高機動時、姿勢変更、制動などに多用される。プロペラントは両側の紺鉄色部の装甲背後に搭載されており、またこの部分のプロペラントは腹ら脛カバーの下に格納される大推力スラスターへも供給される。腹ら脛部のスラスターは通常の飛行では使用されることはなく、戦域からの緊急離脱、追跡時の緊急加速などに限定的に用いることを想定して装備されたものである。限定的な使用としたのは、プロペラントを複数のスラスターで共用しているため、大推力スラスターを頻繁に使用すると、正面を向いた角形スラスターの駆動に影響が生じる恐れがあるためである。また、大推力スラスターを覆う装甲板はベル型ノズルとモーターを保護する目的の、純然たるカバーであり、一部のMSで導入されている推力偏向に用いることはできない。完全な収納式としなかった理由については、明らかにされていない。

機体の全重量を支持せねばならない足だが、重力下での歩行、戦闘行動は重視されていないため、比較的スリムなシルエットを有する。とはいえ、ロンド・ベルの性質上、コロニー内での戦闘もあり得るため、陸戦MSと同水準とまではいかないまでも、一般的な汎用MS同様、足首には人トルクの駆動モーターと大型アケチュエーター・ダンパーが装備される。中央部には大推力スラスターを内蔵、プロペラントは足の甲カバー内側にタンクを設けて搭載されていた。踵部分はMSの標準的な装備である主着熱装置が設置され、機体内を循環した熱交換用触媒は最終的にここで着熱装置に併設された熱交換器を通り、ポンプで機体各部に送られて行く。着熱装置の効率が良くなり、機体の運用時間は以前に比べて大幅に伸びているものの、排熱をしないわけにはいかない。しかし、依然として排熱は運用基地の専用プラットフォームに立たなければ行えないため、宇宙での新たな放熱方式が模索されている。

足の爪先と踵にはアンカー・クローが収納されている(黄色い部分)。これは無重量、低重力下での接地を確実に行うための、いわゆるスパイクとしての機能を持たせるために装備された。しかし、実際に使用すると無重量の空間では慎重な操作が必要とされたようだ。



■腹ら脛 大推力スラスター

「フィンファンネル」は、機体によって機能し、戦闘時に展開される。機体構造の設計に依拠し、機体の構造によって展開される。機体の構造に依拠し、機体の構造によって展開される。機体の構造に依拠し、機体の構造によって展開される。

【AEV/PFF93 AR フィン・ファンネル】

RX-93を特徴付ける兵器であり、ニュータイプ専用機としてのアドバンテージを保障する装備でもある

ジオン公国軍のモビルアーマーに搭載・運用された脳波誘導の無人無線式攻撃デバイス。ビットに端を発する兵器は、一年戦争後もアクシズにて研究が続けられ、AMX-004 キュベレイに搭載された小型軽量のそれは、「漏斗」のような形状からファンネル・ビットと呼ばれた。このサイコミュ兵器は強烈な印象を残し、そのため名称が下略される形で定着し、以後、サイコミュ兵器の端を発する用語のひとつとして用いられるようになった。

ガンダム の主兵器として開発されたフィン・ファンネルは人型の部類に属するものだが、これはまず第一に従来のような「充電・バッテリー方式」ではなく、「ジェネレーター搭載方式」を採用したことによるものであった。小型化により視認度を低く機動性を高くする方向で改良が進められたビット兵器は、AMX-004搭載のファンネル・ビットでひとつの完成域に達する。しかし、戦闘可能時間が制限され、搭載ビーム兵器の出力にも上限を設けざるを得ないことから、多数を携行し、有効運用可能時間を見据えて、ファンネルを交互に使用しなければならない複雑さもあった。これを活用しうるかどうかは、搭乗パイロットの戦闘技術とセンス、そしてニュータイプとしての素養に大きく依存していたことも事実であろう。

こうした実情を鑑み、いずれニュータイプの能力に依存せざるを得ないのであれば、と割り切った合理性から発想されたのが、ガンダム に搭載したサイコミュ兵器端発のフィン・ファンネルである。戦闘可能時間の制限を取り払い、一撃による効果を可能な限り大きくすることをゴールに開発が進められ、サイズについては度外視し、要求に見合う機材を搭載することを優先した。結果、「宇宙空間の運用を前提とすることから端発本体そのものの代替を遂行するように人型化することはやむを得ないこととされた。サイコフレームの実装が限定的にせよ成功したことにより、MS本体の大型化の抑制に一定の効果が立ちつつあった中で、MSの全高に匹敵する大型の端発を搭載せねばならない状況は、技術陣にとっては本意だったろうが、運用可能時間延長と高出力ビーム砲の搭載を両立させるには小型の熱核反応炉を搭載するより道はなかった。なお、この小型反応炉はMSの動力源としては非力だが、シャトルなどの小型輸送艇用に開発・利用されていたものを改良した機材であり、極めて短期間で実用化されたという。

068 MASTER ARCHIVE MOBILE SUIT RX-93 GUNDAM

RX 93を特徴付ける兵装であり、ニュータイプ専用機としてのアドハンター
シを保護する装備でもある

Vガンダム のドビ装置として開発されたフィン・ファンネルは人型の部類に属するものだが、これはまず第 一に従来のような「充電・バッテリー」方式ではなく、「ジェネレーター」搭載方式を採用したによるものであった。小型化により燃費度を低く機動性を高くする方向で改良が進められたビッド兵器は、AMX 004搭載のファンネル・ビッドでひとつの領域域に達する に対し、戦闘可能時間が制限され、搭載ビーム兵器の出力にも上限を設けざるを得ないことから、多数を携行し、有効運用可能時間を欠け足らえて、ファンネルを交互に使用しなければならない特徴もあった。これを活用したかどうかは、搭載ハイロケットの戦闘技量とセンス、そしてニュータイプとしての素人 人としてく依りつていたことは、ここでも事実にあろう

「フィンファンネル」は、機体によって機能し、戦闘時に展開される。機体構造の設計に依拠し、機体の構造によって展開される。機体の構造に依拠し、機体の構造によって展開される。機体の構造に依拠し、機体の構造によって展開される。

【AEV/PFF93 AR フィン・ファンネル】

RX-93を特徴付ける兵器であり、ニュータイプ専用機としてのアドバンテージを保障する装備でもある

ジオン公国軍のモビルアーマーに搭載・運用された脳波誘導の無人無線式攻撃デバイス。ビットに端を発する兵器は、一年戦争後もアクシズにて研究が続けられ、AMX-004 キュベレイに搭載された小型軽量のそれは、ミサイルのような形状からファンネル・ビットと呼ばれた。このサイコミュ兵器は強烈な印象を残し、そのため名称が下略される形で定着し、以後、サイコミュ兵器の端を発する用語のひとつとして用いられるようになった。

ガンダム の主兵器として開発されたフィン・ファンネルは人型の部類に属するものだが、これはまず第一に従来のような「充電・バッテリー方式」ではなく、「ジェネレーター搭載方式」を採用したことによるものであった。小型化により視認度を低く機動性を高くする方向で改良が進められたビット兵器は、AMX-004搭載のファンネル・ビットでひとつの完成域に達する。しかし、戦闘可能時間が制限され、搭載ビーム兵器の出力にも上限を設けざるを得ないことから、多数を携行し、有効運用可能時間を見据えて、ファンネルを交互に使用しなければならない複雑さもあった。これを活用しうるかどうかは、搭乗パイロットの戦闘技術とセンス、そしてニュータイプとしての素養に大きく依存していたことも事実であろう。

こうした実情を鑑み、いずれニュータイプの能力に依存せざるを得ないのであれば、と割り切った合理性から発想されたのが、ガンダム に搭載したサイコミュ兵器端発のフィン・ファンネルである。戦闘可能時間の制限を取り払い、一撃による効果を可能な限り大きくすることをゴールに開発が進められ、サイズについては度外視し、要求に見合う機材を搭載することを優先した。結果、宇宙空間の運用を前提とすることから端発本体そのものの代替を遂行するように人型化することはやむを得ないこととされた。サイコフレームの実装が限定的にせよ成功したことにより、MS本体の大型化の抑制に一定の効果がもたらされた。MSの全高に匹敵する大型の端発を搭載せねばならない状況は、技術陣にとっては本意だったろうが、運用可能時間延長と高出力ビーム砲の搭載を両立させるには小型の熱核反応炉を搭載するより道はなかった。なお、この小型反応炉はMSの動力源としては非力だが、シャトルなどの小型輸送艇用に開発・利用されていたものを改良した機材であり、極めて短期間で実用化されたという。

068 MASTER ARCHIVE MOBILE SUIT RX-93 GUNDAM



FIN FUNNEL

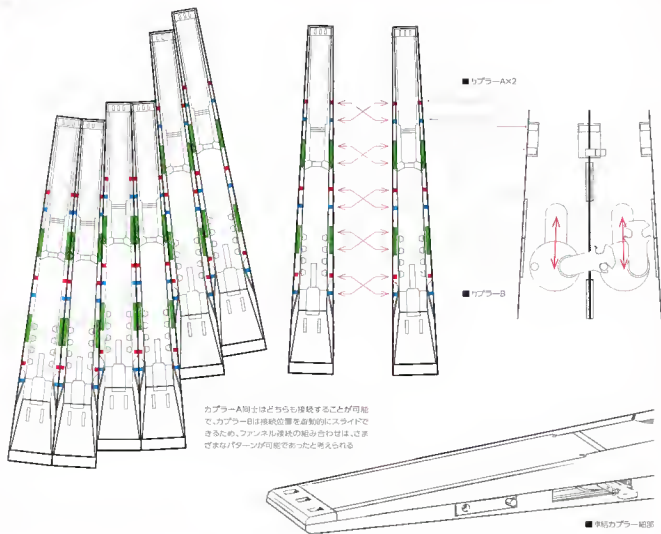


分割された長いフレート状胴体の中央部が推力ハートで、重心位置にジェネレーター（熱核反応炉）を内蔵、そのすぐ後方にスラスター機器を置くという強引な設計であるが、ファンネルの機動性を考慮すると、これ以外に方法はなかったようである。メイン・スラスター用のモーターは胴体に合わせて改設計した特殊なもので、主ノズルのみならず！トプレートとの接合面に開口したサブ・スラスターへの推力供給も可能となっている。

上下の胴体は、単なる開放式メガ箱のアクセラレーティング・ヘルト（加速帯）ではない。内部には粒子アクセラレーター機器以外に、フィールド発生装置と制御装置、近位端（中央部との接合面）にあるサブ・スラスターのエンジンと、メイン・スラスター用も含めたプロペラント・カニスター、側面基部近くに設けられた横機動用低温スラスターや遠位端にある姿勢制御用低温スラスターとその噴射用質量物、他のフィン・ファンネルと連結するためのカプラーなどが装備され、形状のシンプルさとは違い、胴体内部は機器で埋め尽くされている。

上・下胴体（エンド・ユニット）と中央部胴体（ハート・ユニット）は軸で

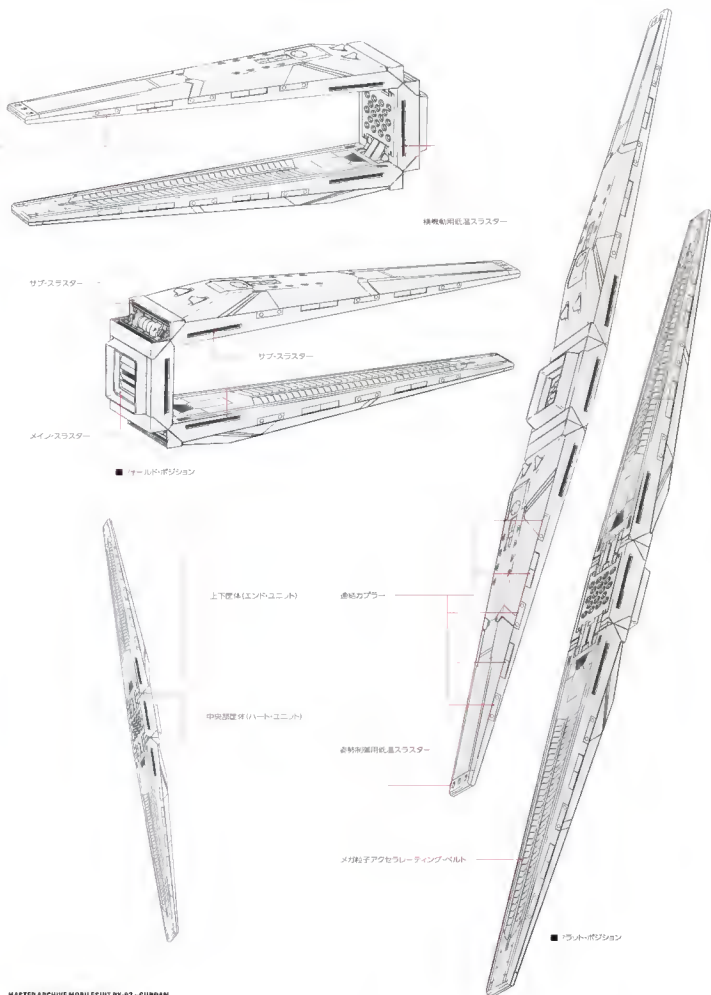
繋ぎあがった（バグザン）は一部の機体について完成が遅れ、フィン・ファンネルなどはMS本体とは別にコンパイルの本拠であるワイド・ロンドニオンに製造された。通常の一般的なファンネルと異なり、独立したジェネレーターを備え、推進機構を持つフィン・ファンネルは生産性もあてられ、設計とは異なり、この時の試作でも部分のみが完成した（予備部品を含め、その時点で生産・組み立てが完了したものはすべてコンパイルに納品されている）。AE社としては3基ないし4基を確保し、残りを予備とするつもりであったようだが、アムロレイ大尉は全基を運搬のうえ、明に投入した。なお、この生産の遅れによってダブルフィン・ファンネル装備での運用は納入前に終えられている。



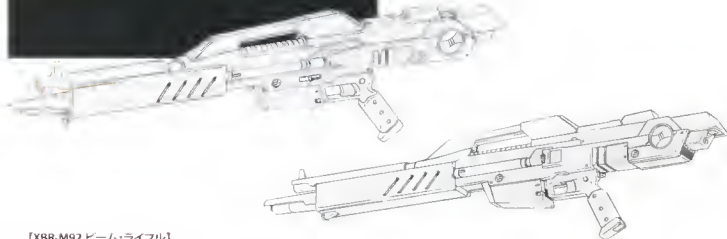
接合されるが、これらは180度の回転範囲を有し、片側のエンド・ユニットを180度だけフォールド・ポジション、両エンド・ユニットを90度に曲げ「コの字型」にしたアタック・ポジション、全機体が平面上に並ぶフラット・ポジションの3段階が基本位置となる。最強最大効率で粒子ビームを発射できるのはアタック・ポジションだが、フィールドの場を変形形成するために、エンド・ユニットを展開し、低出力のビーム発射も可能である。定格出力は3MWとされ、断続的な発射——この1パルス分を“ビーム弾”と呼んでいる——が可能で、出力を低下させないまま、“ビーム弾”7発の連続発射が可能という。

通説ではエンド・ユニットをAMBAC股として利用し特殊な機動が可能だったとされるが、実際は端部スラスターのベクトル変更のためにエンド・ユニットを駆動させているのであって、厳密な意味でのAMBAC機動ではない。

さらに特殊な用法として、エンド・ユニットの角度を調整し、メガ粒子偏向フィールドの収束率を変動させることで、三基以上のフィン・ファンネルを頂点とした面に、擬似的なフィールド・バリアを展開することができた。高度なニュータイプ能力を有するパイロットが運用すれば、敵機から放出される感応波をパイロセンサーやサイコフレームでキャッチ、攻撃意思に反応した上で、瞬時にフィールド・バリアを張り、敵ファンネルからの攻撃を防ぐといった高度なディフェンスも理論上は可能とされている。さらに、このフィールド展開状態からメガ粒子を拡散放射することも可能で、ビームのみならず実体弾を破壊防御することや、敵ファンネルそのものを感応波的に「弾く」といった発展的運用もできたという。もちろんそれは、運用、操作する搭乗パイロットのニュータイプとしての力量に依存するものであるが。



WEAPONS



【XBR-M92 ビーム・ライフル】

RX 93が携行したビーム・ライフルは、次世代MS用火器として試作されていたメカニズムを使用したもので、当時のビーム・ライフルとしては珍しくエネルギーCAP内蔵式を再び採用していた。Eバックは通常火器のようにマガジン交換式でエネルギー充填しようというシステムで、MS携行ビーム兵器の主エネルギー源として使用されてきたが、'マガジン'であるEバックを機体に多数携帯する風潮になっていった。これはこれで兵器進化の必然ではあるが、必要以上にMSの外部装備を増やすことは、とくに重力下においては不都合も多くなることから、AE社の一部開発陣は、今一度内蔵式パワー供給源であるエネルギーCAPを見直す研究を行っており、試作された大容積超高圧縮性能向上を両った新型CAPを装備したらしい。

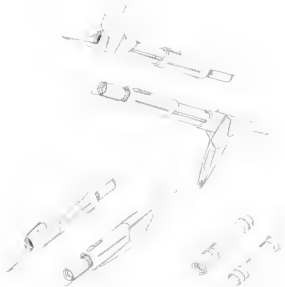
定格出力は3.8MWであるが、機材負荷上限は4.5MWまであり、エネルギーの大幅消費を覚悟の連射であれば、4.4MW

級のビーム発射が可能である。バースト・モードはもともと省エネルギーのために開発されたシステムだが、これを応用・発展させ、短連射の発射回数と出力を任意に変更できるバースト・モード・セレクトが導入された。これを活用するにはパイロットの熟練した技量が必要で、戦況に応じたモードの使い分けとエネルギー残量などの兼ね合いを直感的に判断できなければ、新型エネルギーCAPであってもあっという間に消耗してしまつたろう。まさに、アムロ・レイ大尉のような熟練パイロット向けの装備として完成されたものといえる。

アクセラレーター部を長くとした「長銃身式バレル」に、グリップを兼ねたフォアエンドが装着されるが、可動式ハンドル・グリップは装備されない。バレル上部には単発式のクレネード・ランチャーと通称されるデバイスを備えているが、もともとは攻撃用弾種を装填するものではなく防弾用の高弾度閃光弾を発射することを想定して付けられたオプションである。また本来はこのスペースに独立型の照準装置を装備する予定であったという。

【A・E-BLASH XB-G-51/Lカスタム・ビーム・サーベル】

増幅装置やエミッターに次世代型の試作品を用い、ビーム刃形状をある程度調整可能とした特殊仕様のビーム・サーベルである。U.C.0090年代初期の段階で主流となりつつあったエネルギー節約機能を盛り込んでいるが、視覚情報で自機のビーム刃展開を確認できないと対応が難しく、また起動時にもっともエネルギー消費が高いというデータもあるため、今後精査のうえ改善すべき点であるともいわれる。当時は、使用時のみビーム刃を形成するという方式は、ビーム・ライフルのバースト同様に高度な技量を有したパイロットにのみ有効な方法論であったようだ（本来は逆の目的で開発された機能なのだが）、ビーム刃形成のフィールド展開用メカニズムから起倒式の刃が付属していることも特徴のひとつである。



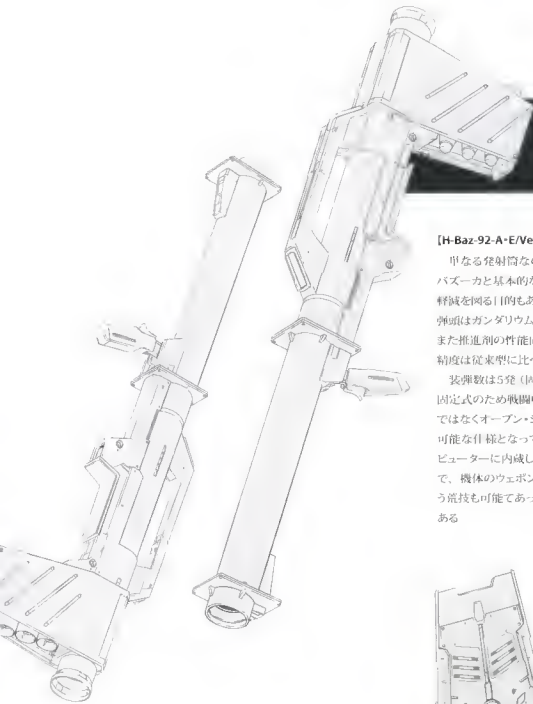


全編で「書まれる」
 への「これは何だか」
 「成語」で「
 「ほか」で「
 「い」で「
 「不」で「
 すると、その時



RX-93のヒューマン・ルは、そのスマートな形状
 が特徴である。MSの場合、ハイコ・小はセンサーと機体を通じて戦争・制
 戦の戦を行うためほとんど問題にならないが、人工工率から見て本来
 は自然に対して非ばした機と戦者のラインは離れていないことが明らか
 になるべく、その証として、戦者のラインは離れていないことが明らか
 な戦艦を戦艦に設計へと、フィードバックした結果がこの形状であり
 ニュータイプだけではなく通常のパイロットにも反応の速さはあれど、戦争
 はあるものと考えられている。

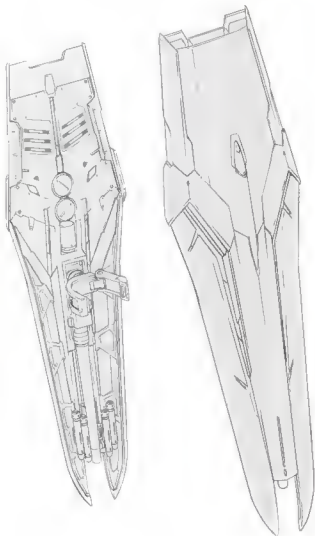




【H-Baz-92-A-E/Ver.023 ニュー・ハイパー・バズーカ】

単なる発射筒なので当然ではあるが、従来型のハイパー・バズーカと基本的な構造は変わらない。しかし、携行重量の軽減を図る目的もあり小型化している。口径は280mmだが、弾頭はガンダリウム合金の厚皮膜射で覆われ、徹撃効果は高く、また推進剤の性能向上と追従センサーの強化で、射程や命中精度は従来型に比べはるかに優れている

装弾数は5発（固定弾倉に4発、発射室に1発）で、弾倉が固定式のため戦場中の給弾は難しいが、クローズド・ボックスではなくオープン・シェルフ・タイプなので、随時の追加装弾が可能なる仕様となっている。サイコミュ・チップを発射指示コンピュータに内蔵しているため、感応波により遠隔操作が可能で、機体のウェポン・ラックにマウントした状態で発射するという荒技も可能であった。もちろん、これは想定外の運用法ではある

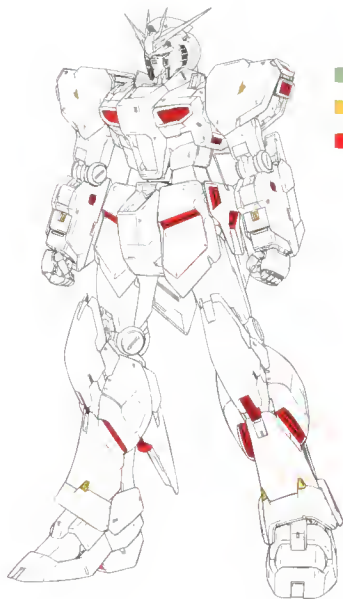


【RX-M-Sh-WR/U-035 ハイブリッド・シールド】

これまでの使い捨て式を前提にした防衛用オプション兵装ではなく、フィン・ファンネルと同じように小型の熱核反応炉を搭載、定格出力7.8MWという艦砲に類する威力のビーム・キャノンで固定装備、加えて小型の通常誘導ミサイル4発を備える隠し武器プラットフォームでもある。シールドの多機能化は武装強化への道筋で当然勘案されるべきテーマで様々な試行されてきたが、単純化を目指したMSであるνガンダムにおいては、これは意表を突く装備ともいえ、効果的な隠し武器になった。しかし、完全装備で出撃する場合、4機にばかり重量が集中することになり、もとよりAMBAC機動はしない、という前提が運用上の約束事としてあったのであろう

CAUTION SIGN & MODEX

急造の士、メカニカルを切り上げる形で納品されたRX 93は、必要最小限のコーション（注意書き）・マーキングのみが施された状態で実戦配備されたと考えられる。母艦となったラー・カイラムのMS整備クルーたちは、不完全なサービスマニュアルと自らの経験と期に頼りながら、本機を整備したのである。



- サード
- バイロ・システム / 受信機
- コーサー

CAUTION
NON-IONIZING
RADIATION HAZARD

CAUTION
MID THORAX ARMOR
SWINGS UPWARD
STAND CLEAR OF HAZARD AREAS

RESCUE
WARNING
EMERGENCY USE ONLY
FORCED SEPARATING
CONTROL

CAUTION
HIGH VOLTAGE
DEVICE IS STOWED

CAUTION
ENTRY DOOR
SLIDES UPWARD

ENTRY HATCH
DOOR CONTROL

CAUTION
HATCH DOOR DROPS DOWN
DO NOT STEP, STAY IN
AND STAND ON

HEAT
EXCHANGER
ACCESS

COXAL JOINT
MECHANISM
ACCESS

CAUTION
HIGH VOLTAGE INSTRUMENTS
AND HIGH-ENERGY SUPPLIES
ARE STOWED INSIDE

CAUTION
ANCHOR CLAW
SWINGS OUT

DANGER
DO NOT STAY IN
FIRING LINE

DANGER
EJECTION PORT
STAY BACK
KEEP CLEAR

CAUTION
IGNORING
RADIATION HAZARD

WARNING
POISON INHALATION
HAZARD
COMBUSTION GAS
EMITTING OUT

WARNING
AMMUNITION BAY
SLIDES TO LATERAL
KEEP CLEAR

E.F.S.F.
LBIF 001

PW-DETECTOR
DO NOT OVER PAINT



MOORING POINT

PW-DETECTOR
DO NOT OVER PAINT

E.F.S.F. RA-CAILUM

CAUTION
HIGH VOLTAGE
DEVICE IS STOWED

WARNING
HEAT ACCUMULATED MEDIUM
SUBSTITUTING CONNECTORS
ARE LOCATED IN GROOVE ENDS

RESCUE

FRONT ARMOR ADJUSTING
/ DETACHING CONTROL

WARNING
EMERGENCY USE ONLY
FORCED SEPARATING
CONTROL

DANGER
HIGH PRESSURIZED WIDE
LINER HEAT VAPOR BLOW
STAND CLEAR OF HAZARD AREAS

PW-DETECTOR
DO NOT OVER PAINT

WARNING
HEAT ACCUMULATED MEDIUM
SUBSTITUTING CONNECTORS
ARE LOCATED IN GROOVE ENDS

DANGER
WIDE LINER THRUST BLOW,
STAND CLEAR OF HAZARD AREAS

DANGER
HIGH PRESSURIZED
HEAT VAPOR BLOW
KEEP CLEAR

PW-DETECTOR
DO NOT OVER PAINT

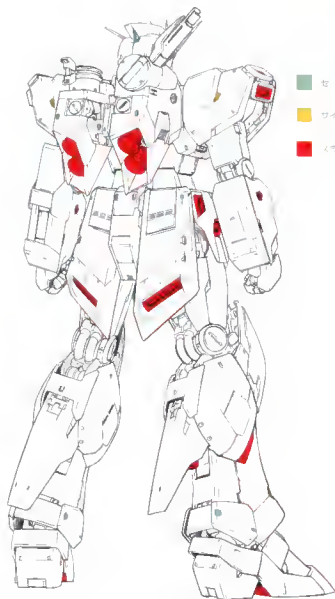
CAUTION
ANCHOR CLAW
SWINGS OUT

JACKING
HERE

DANGER
HOT BLOW AND
SWIRLING SPARKS
KEEP AWAY

JACKING
HERE

RX 93のコピー・マーキングは整備クルーが取り扱う機会の少ない少数生産機には少ない方である。危険度の高いスラスターやセンサー周辺、MSの取り扱いに関するおよそ一般的に重要な箇所のほか、本機を特徴づける装備のひとつであるサイコウェーブ受信器に注意書きが見える。



- センサー類
- サイコウェーブ受信機
- スラスター 等

DANGER
HIGH VOLTAGE / HIGH-ENERGY SUPPLY
HAZARDOUS VOLTAGE
CAN CAUSE SEVERE INJURY OR DEATH
ACCESS ALLOWED S.M.C. TEC
QUALIFICATION PERSON ONLY

CAUTION
HIGH ENERGIZED MATERIAL LOADED
ACCESS ALLOWED S.M.C. TEC
QUALIFICATION PERSON ONLY



DANGER
HOT EXHAUST BLASTS

CAUTION
HIGH VOLTAGE INSTRUMENTS
AND HIGH-ENERGY SUPPLIERS
ARE STOWED BEHIND ARMOR

CAUTION
CONTAINING
HIGH PRESSURE LINE
AND HIGH VOLTAGE
ELECTRICAL LINE

CAUTION
ARMOR COVER
SWINGS WITH
THRUSTER UNIT

DANGER
HOT EXHAUST BLASTS
KEEP AWAY FROM HAZARD AREAS

WARNING
AMMUNITION BAY
SLIDES TO LATERAL
KEEP CLEAR



E.F.S.F.
LBIF 001

PW-DETECTOR
DO NOT OVER PAINT

PW-DETECTOR
DO NOT OVER PAINT

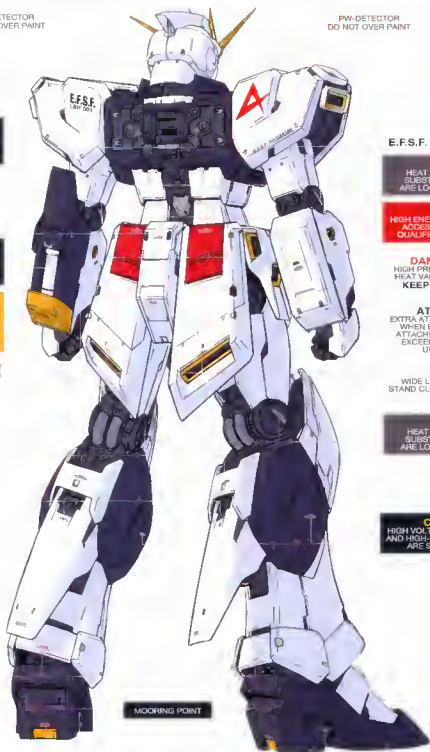
CAUTION
CONTAINING
HIGH PRESSURE LINE
AND HIGH VOLTAGE
ELECTRICAL LINE

T.N REACTOR
INSPECTION ACCESS
ACCESS ALLOWED S.M.C. TEC
QUALIFICATIONAL PERSON ONLY

CAUTION
SLIDES UPWARD

DANGER
HIGH VOLTAGE / HIGH-ENERGY SUPPLY
HAZARDOUS VOLTAGE
CAN CAUSE SEVERE INJURY OR DEATH
ACCESS ALLOWED S.M.C. TEC
QUALIFICATIONAL PERSON ONLY

COXAL JOINT
MECHANISM
ACCESS



MOORING POINT

E.F.S.F. RA-CAILUM

WARNING
HEAT ACCUMULATED MEDIUM
SUBSTITUTING CONNECTORS
ARE LOCATED IN GROOVE ENDS

CAUTION
HIGH ENERGIZED MATERIAL LOADED
ACCESS ALLOWED S.M.C. TEC
QUALIFICATIONAL PERSON ONLY

DANGER
HIGH PRESSURIZED
HEAT VAPOR BLOW
KEEP CLEAR

ATTENTION
EXTRA ATTACHMENT INSIDE
WHEN EXTERNAL EQPT
ATTACHES, MUST NOT BE
EXCEEDED IN LOADING
UPPER LIMIT

DANGER
WIDE LINER THRUST FLOW
STAND CLEAR OF HAZARD AREAS

WARNING
HEAT ACCUMULATED MEDIUM
SUBSTITUTING CONNECTORS
ARE LOCATED IN GROOVE ENDS

CAUTION
HIGH VOLTAGE INSTRUMENTS
AND HIGH-ENERGY SUPPLIES
ARE STOWED INSIDE

CAUTION
ANCHOR CLAW
SWINGS OUT

DANGER
HOT BLOW AND
SPARKING SPARKS
KEEP AWAY

JACKING
HERE



アムロ・レイと〈νガンダム〉

アムロ・レイ大尉(当時)は、さうまでもなくモビルスーツ(以下、MS)が初めて「実戦」に登場した一年戦争以後、現在に至るまで「最高のMSパイロット」「エースパイロット」として語り継がれている。レイ大尉が優れたMSパイロットであることは多くの専門家も認めるところであり、疑う余地はない。だが、ひとくちに「個人のパイロット適性」と言っても、これは様々な角度から評価することができる。操縦の精密さや正確さ、複数機種への習熟の早さ、戦場で起こる突発的事象に対する反応や判断、さらには僚機との連携における的確な指示、チームを率いるためのリーダーシップ、友軍の士気を高めるカリスマ、また後輩に対する技術指導に卓越した者もいただろう。では、アムロ・レイが備えていたパイロット適性とは、具体的にどういったものであったのだろうか。彼が遺したのは単なる撃墜数だけではなく、たとえば自作のシミュレーション用プログラムであったり、数々の新アイデアが盛り込まれたMS

設計プランであったり、記録上の数字以外のところでもその才能は発揮されていた。その特異な才のどれを取って「パイロット適性」とするかには異論もあるが、ここでは記録に残ったアムロ・レイの行動や業績を辿り、彼の何が彼をして「名パイロット」たらしめていたのかを探ってみたい。

パイロットとしてのアムロ・レイを語る上で忘れてはならない前提は、彼がニュータイプであったという点であろう。とはいえ、そもそもニュータイプという存在に関しては現在でも明確な定義が確立しているとは言いがたく、またそのように呼ばれる人間の持つ能力がパイロットとしての適性にどれほど寄与しているのかも曖昧ではある。レイ大尉の操縦が、鋭い感性と反射神経に裏打ちされた、単に優れた通常人と同等のものなのか、それともそういった能力自体こそがニュータイプ能力の一端であるのか、これもまた大いに議論の余地のあるところであろう。



パイロットに乗ったからであるが、パイロットはよく知っている。パイロットの能力を制するのと同時に、適切な状況下でパイロットの生かす必要も高い性質をこの機体が持っている。機体の名パイロットを生かす、高ス。

さて、アムロ・レイが一年戦争時にまったくの偶然からMSに乗ることになったことは、よく知られている事実である。当時の彼の身分は民間人であり、それまでに正規のMS操縦訓練を受けたことはない。ただし、サイド7は地球連邦軍の極秘開発拠点であり、父親であったテム・レイ技術大尉（当時）がRX-78 ガンダムへの開発に携わっていたこと、そして後のレイ大尉自身のインタビューなどから、彼が自宅に置かれた父親のデータバンクにアクセスし、MS開発に関する資料を閲覧していた可能性が高いことが判っている。彼にまつわる伝説によれば、ガンダムのコックピットに座った際に「配線が見えた。システムの繋がりが把握できた」と、さもニュータイプ能力の発現であるかのような表現が見られるが、これ自体は事前知識のおかげであったとも考えられる。むしろ、軍の重要機密であったRX-78やV作戦に関連するすべてのデータに接触できていたとは考えにくく、恐らくは人が使用することを前

提とした機械は、その操作系においても「誤操作しにくく、確実に操作できる」ことを念頭にデザインされているものであるから、勘の良い彼が操作法を類推できたということなのかもしれない。いずれにしても、訓練という実地経験なしにMSの起動に成功したこと、そして曲がりなりにも訓練を積んだ軍人パイロットが乗るMS-06「ザクII」と交戦し、素人がこれを撃破したことは、RX-78の圧倒的な性能があったとしても尋常なことではない。

正規のMSパイロットが訓練を受ける際に叩き込まれる鉄則のひとつは、「自分を取り巻く状況の把握」である。戦場全体は無理にしても、自分を中心として近い位置に展開する敵の数と動きを常に把握することは基本とされる。だが、戦場において、特に経験の少ない新兵は敵を眼前にするとパニックに陥りやすく、いわゆる狭窄の視野に囚われる。ところが、アムロ・レイの場合は初めからその「状況判断」ができていた。頭部バルカン砲を撃ち尽くした彼

は、そこで思考停止に陥ることなく別の攻撃方法を探したのである。港湾エリアへ輸送中であつたその時のRX-78にオプション兵装はなかったが、幸い固定武装としてバルカン砲のほかにビーム・サーベルがあつた。彼はコロニーへ被害を与えないよう配慮し、MS-06のエンジンを傷つけずに無力化することさえやつてのけたのだつた。

初陣の戦いを経て強襲揚陸艦〈ホワイトベース〉のMS戦闘要員となつたアムロ・レイは、年齢相応に戦場の恐怖やプレッシャーに苦しみながら、一人前のパイロットとして完熟していく。置かれた過酷な状況が彼をニュータイプへ覚醒させた要因のひとつであることは確かだが、それだけでは説明としては不十分であろう。同じような経験をした一年戦争時の若い兵士は、なにも彼だけではないからだ。ともかく、彼が得た能力には、二つの側面がある。ひとつはレーダーや管制など状況把握のための情報断片的であっても、ニュータイプは正確に自分の置かれていた状況を把握して適切な行動に繋げることができることだ。そしてもうひとつは、自己とその周辺のみならず、彼らは戦場を俯瞰で把握し大局的に戦況を判断できることである。

ニュータイプに対する「洞察力に優れた人類」との定義が意味するところは、敵MSのささいな行動からパイロットの心理を読み、また複数のそれらの動きから敵の行動目的を掴むことだ。文学的表現であれば「殺気を読む」「空気を読む」という漠然とした察知能力も、実のところその大半が、断片的な情報から全体を正確に類推する力であると言える。これが極限まで研ぎ澄まされると、視野外（あるいは素敵電報外）にいる敵の動きまで予測できることさえあり得るのだ。それは単なる「勘」ではなく、人間心理や戦術の合理的理解をベースとして経験により培われた彼らの内的世界から導き出される演算結果なのである。そして、そのわずかな「情報」の中には、いわゆるニュータイプ特有の力とされる感応波の受信が含まれるということである。ニュータイプや強化人間であっても、ベースとなる戦術論理や行動規範がしっかりしていなければ、感じたものを「適切な行動」としてアウトプットすることはできない。

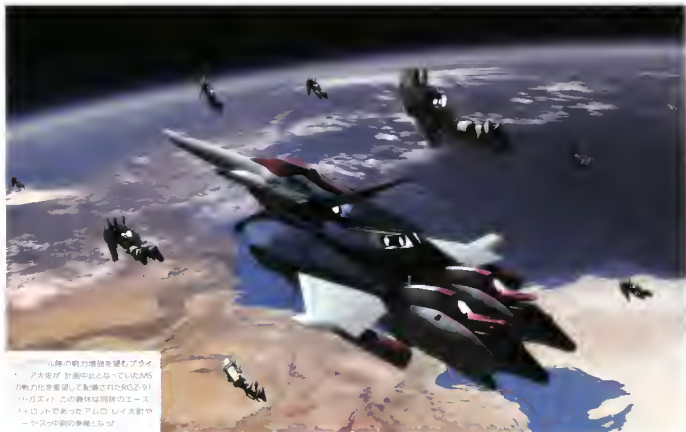
アムロ・レイの場合も、戦場を生き残るたびにそうした総合的な戦いのセンスが急速に磨かれていった。もともと合理的思考が得意であつたことも大きいだろう。付け加えるなら、整備作業を通じて自機のみならず現在の状態（調子）を把握していたことも大きい。当時の〈ホワイト

ベース〉は正規のメカニックマンが不足しており、本来パイロットの仕事ではないはずの整備にまで彼は従事していた。彼の能力の発現は、こうした要素によつても促進されていたのだつた。

彼のMSパイロットとしての適性のうちで、最も重要なものは、一言で言うなら「割り切り」であつたろう。それは、「MSは人ではないから」「撃てる」という、恐らく初期には自己暗示に近かつたであろう思考が、彼の中で早期に定着したことだつた。彼の戦闘データを分析してみると、状況を把握してからトリガーを引くまでに要する時間が通常人のそれをはるかに超えるレベルで短い。もはや「引き金を引かなければ、自分がやられる」といった思考プロセスすら経ることはない（ただし、^{引き金}は引き金を引いて相手の生命を奪う、という行為に快楽を感じる者もいるが、レイ大尉の場合は決してそういった種類の人間ではない）。もっとも、こうした割り切りは、新兵でも何らかの戦闘を経くぐり抜ければ身に着くもので、ニュータイプ能力には分類されない種類のものであるかもしれない。

とは言え、この割り切りの資質は、自分の行動や装備への柔軟な対応力にも表れる。メイン・ウェポンであるビーム・ライフルの残弾が少なく、と見るやそれを瞬時に投棄し、別の攻撃方法を選択するといった思い切りの良さこそが彼の身上だつた。扱うMSとその兵装を熟知し、そして友軍の戦力なども計算に入れて戦い、かつ想定外の大気圏突入など、アクシデントにも冷静さを欠くことなく、最後まであきらめずに対処法を模索する、といった彼の心理的強靱さは、置かれた状況によって否応なく熟成したものであり、かつ天性のものであつたのだろう。自軍と敵軍の戦力や状態を把握し、総合的な戦術を練るのは、これを駒として扱う母艦の艦長や戦術士官に必要と才能だが、レイ大尉は一年戦争時からその片鱗を見せていた。彼は生涯MS乗りであつたが、彼が士官学校を経て指揮官となるべく軍歴をスタートさせていたなら、恐らく希有な艦隊指揮官となつていただかもしれない。

さらに、MIA（戦闘中行方不明）になる直前のレイ大尉の戦い方は以前にも増して常人離れたものとなつていたことが判っている。RX-93〈νガンダム〉における都合3度に及ぶ出撃では、戦場にいる敵MSの行動をあたかもコントロールするような戦いを見せたことが僚機のカメラによって記録されていた。彼は自分のMSが取る行動によつて、敵の思考と動きを誘導する、といったレベルにま



大樹の戦力増強を望むブライ・アダムが、計画中止となっていたMSの動力化を希望して企画されたRGZ-91「バガス」。この機体は同僚のエースパイロットであったアムロ・レイと大樹や、ラースの争戦となつ

に到達していたようである

U.C.0087年頃以降の宇宙戦闘においては、MSの知覚情報を欺瞞する「タミーハルーン」と呼ばれる風船状の装置を使う戦術が一般的になっていた。タミーハルーンは索敵や潜入など隠密行動の際に自機を相手の「目」から隠す用途のほかに、アクティブな戦闘時に瞬間的な眼眩ましや視線・意識誘導に使われる。MSのコクピットはその頃、コンピュータ・グラフィックによる模式的な情報投影が主流であり、リアルな視覚情報は避けられる傾向があった。これは、個人視界の360°スクリーンが導入されたMSコクピットにおいて、「宇宙空間に「溺れる」感覚を抱く者が多かったためであるが、それが逆にタミーハルーンによる欺瞞戦術を効果的なものとしていた（なお、レイ大尉はリアルな視覚による情報投影を好んだと伝えられている）。レイ大尉の場合は、このタミーハルーンを使う以外にも能動的に敵の感覚に訴える欺瞞戦術を用いたという

一例を挙げれば、直撃か狙えないような状況でも、敵の付近にわざと着弾させることによって回避運動を誘発さ

せ、その上で致命弾を叩き込む、といった戦術である。熟練パイロットであればこうした戦術も意図的に使いこなすことができたが、レイ大尉の場合はその次元が違った。戦場を知り尽くした彼は、わずかな挙動から敵パイロットの技術や心理状態を見抜き、それに応じて相手に応じて着弾位置やタイミング、弾数などを瞬時に変えて撃ち込めるのだ

また被弾しそうな場合に、ただ回避運動をやるのではなく、着弾したシールドをその場にわざと残し、相手の視線を釘付けにしておいてからその隙を狙って反撃するといった戦法を使ったという。見トリッキーではあるが、攻防一体の動作を自然に、極めて合理的に行えることが彼の非凡さを際立たせている。シャアの反乱でも、そうした人間の心理や習性をうまく利用した戦術を何度も見せたことが伝わっている。

二手・三手以上の先を読むと評される彼の能力は、この晩年の時期に円熟していたと言ってい、大尉はフィフス・ルナにおける攻防戦で、先述のガス准尉のMSN-03と



アムロ・レイ大尉はグリース戦役時、エー・ゴの地獄上において
高火力組織・カウリに身を翻して反地球連邦艦隊を打倒している。
た、その際の乗機はDとつながるMSK-008(ディンゴ)である。

交戦しているか、彼はRGZ-91 リ・ガズィでこれを片倒ししていた。大尉は「迂闊な」若い彼の行動に対し、余裕をもって対処した。この当時の戦況記録は、ラー・カイラム 編隊時に回収され、現在は公表されているものだが、ネオ・ジオン側のサイコミュ搭載型MSに対し、能力的に劣るとされた。リ・ガズィであっても、相手の行動が読め、一対一であれば十分に勝つ余地があるという証明である。

ただし、誤解のないように述べておくら、この当時のレイ大尉はフィフス・ルナの核ハルス・エンジン破壊するこじが最優先目標であり、そのためにバック・ウェポン・システムをギリギリまで維持しなければならなかった。またガス・ザンクの側も、核ハルス・エンジンを護りながらの戦いであり、自由に制約の中での攻防だった。

そのような域にまで到達していたアムロ・レイが、自分のMSに対してさらに望んだ能力とはいったいなんだったのか。それはこれまでに述べてきたように、戦場全体のあ

らゆる事象を正確に知覚する能力であつたと考えられる彼の所属するロンド・ベル隊は、戦力が充分でない状況の中でネオ・ジオン艦隊とそのMS部隊と戦わねばならなかった。一般兵には、強化人間の乗るサイコミュ搭載型MSの相手ができるわけはなく、おのずとその相手はレイ大尉が引き受けることになる。一年戦争末期の大規模集団戦闘とは異なり、少数戦力によるMS隊同士での戦いは、シャア大佐やガス・ザンクなどが乗るわずかな数機のサイコミュ搭載型高性能MSによって趨勢が決する可能性がある。大尉は、これを阻止できるのは自分だけだと認識していたはずだ。そしてそのためには、なんとしても自分が構想したMSである「ニュー(新)・ガンダム」が必要だった。

一般的には、フィン・ファンネル装備のサイコミュ搭載型ガンダムを大尉自身が構想したとされるが、恐らく彼のアイデアの本質は、これらの装備を含めて「戦場を支配できるMS」であつたのではないのか。レイ大尉はサイコミュ・

システムがなくても、あらゆる些細な情報から全体を類推する能力に長けていたが、さらに敵や味方のパイロットが発する思念をダイレクトに受信することができれば——明確な意思の判別には至らずとも、そのきっかけが捉えられれば——戦況判断はより正しいものになる。彼のようなパイロットにとって、そうした生の情報が得られることは計り知れない武器になるのだ。

サイコミュ兵器を操ることに関して、レイ大尉にはすでに経験があり、フィン・ファンネルが実装されれば確実に操ることができる自信があったようである。RX 93はフィン・ファンネルを装備したこと自体が新機軸なのではなく、そのサイコミュシステムは攻撃・防御というMS単体の戦闘行動はもちろん、指揮官としての管制能力、戦場のあらゆる要素を能動的にコントロールすることさえ考慮して提案されたものであった、というのは穿ちすぎであらうか。少なくとも、レイ大尉は先ほど述べたように、相手のパイロットに対してフェイントや誤認識を仕掛けることを自らの戦術に組み込んでいる。その延長で、もしサイコミュがガンダムに実装されたならば、受信だけでなく発信にこれに応用し、積極的に相手の思考を「誘導」できると考えたのではないか。

たとえるなら、物理的なダメージを放出することなく、きっかけの動作を見せてやるだけで相手に「錯覚」を起こさせるようなことである。戦場のレイ大尉の周りには、利用できるものが多々あった。これまでに、彼はデブリ、隕石、ダミーバルーン、敵MSやその残骸、爆発光、太陽・地球光、果ては友軍機など、それらの存在と位置関係を利用して錯覚を導いてきたであろう（しかも、ほぼ無意識にである）。これまでは、ビームの牽制射やバルカンの発砲などを使用して相手を攪乱していたのを、一歩踏み込んで、それと組み合わせるか、大層な移動や動作などを実行することなく思念のみをぶつけることによって実現できるかもしれないのだ。

そこまで意図していたかどうか、今となっては確かめようもないが、その証拠と言えるかどうか、「シャアの反乱」時の戦闘では、〈vガンダム〉に接近したネオ・ジオンの〈ギラ・ドーガ〉が、なぜか一瞬動きを止め、自らビームに吸い込まれるように爆発四散する光景が見られたという。戦場で是的にならないよう絶えず動きを止めるな、というのは新人教育の際に叩き込まれる鉄則である。だが、端から見てもなぜそのような無防備な行動を取った

のか判らない。撃破されたMSは、レイ大尉の〈vガンダム〉から、なにかしらのきっかけを与えられて動きを止めるよう誘導されたものに違いない。

もちろん、一手ではそれに引っかかる強い強者もいるだろう。だが、レイ大尉は相手が高レベルのパイロットであると見極めるのも早く、正確である。その場合は複合的な手段で段階的に仕掛けを施した。あたかもチェス・プロブレムでも指すかのように、周到に罠を張り、最後に「致命の一撃」を叩き込んだ。その手順を、彼は瞬時に組み立てて実行に移すことができた。そんな彼の意思に文字通り手足のように追従する高性能なMSが必要だったことは言うまでもない。

さらに対ネオ・ジオン戦の場合には、相手側もニュータイプ能力を持ち、レイ大尉と同様の戦術を使うことが想定された。〈vガンダム〉のサイコミュシステムは予測される高度な戦闘の「駆け引き」において欠かすことができない装備だったのだ。〈vガンダム〉とはアムロ・レイにとっての「カウンター・ニュータイプMS」であり、それを実現するために必要な方策として、アナハイム・エレクトロニクス社の技師オクトバー・サランはサイコフレームの実装を決めたのである。サイコフレームが人の思念を演算・増幅して伝達するコンバーターもしくはアンプ的な性質を持つと仮定するならば、まさに最適なシステムであつたろう。

〈vガンダム〉における攻防一体のサイコミュ・システムの真髄とは、このようなものであったと考えられる。アムロ・レイは、その意味でニュータイプとしての能力を、戦闘という技術に対し最大限、効果的に応用した希有なパイロットであったと言える。まさにMSの申し子のような存在であり、生きた教本、そして進化する戦闘マシーンであつた。

レイ大尉の〈vガンダム〉は、戦闘による喪失ではなく、人類や地球への深い愛情に根ざした超常現象を引き起こしてこの世から消えた。少なくとも最期の刻、〈vガンダム〉は人尉の深層にある「優しさ」を具現化しよう働いたのだ。一戦戦争時のア・バオア・クー戦において彼は、戦争を通じて得たニュータイプ能力を、仲間の救出のために使ったという。それが、アムロ・レイというパイロットの本質だ。MS戦闘における究極の体験者が造ったMSは、彼が心の奥底にずっと持ち続けていた平和への願望を、握り取ったと言えるのかもしれない。

RX-93 vGUNDAM DOUBLE FIN FUNNEL



【RX-93〈vガンダム（ダブル・フィン・ファンネル装備型）〉】

フロント・ヘルムのRX-93試作1号機は、機体背部左側にフィン・ファンネル6基を装備していたが、これを右側に3基ずつ、もしくは6基ずつへ変更する案も存在した。機体背部右側のビーム・サーベル・ラックをオミットしなければならないというデメリットもあったものの、フィン・ファンネルをマウントした状態での重量バランスは良好であったと推測される。なお、ビーム・サーベルに関しては、左腕のマウント・ラックに専用ラックを取り付けることで、少なくとも1本は装備可能とされた。ただし、試作1号機にしても腕部に関しては同様の仕様であり、予備のビーム・サーベルを装備していたことは指摘しておくべきだろう。

なお、この装備案のためには、別系統のビーム・サーベルやシールド、ショルダー・アーマーも考えられていたようだが、それらが実際に製作されたのか否かは判明していない。ただし、ネオ・ジオン残党部隊の補討件戦に用いられた試作2号機以降のRX-93にしても、1号機と同じ仕様で運用されていたとの証言があることから、おそらく他の装備案と同様にヘーハープランに終わった可能性の方が高いと考えられる。

RX-93〈νガンダム〉の武装案

ARMED PLAN OF RX-93 νGUNDAM

ロンド・ヘルに納入された試作1号機が約1週間のうちに喪失したこと、そして何よりシヤアの反乱が極めて短期間で収束したことによって投入すべき仮想敵を見失ったことで、検討されていた武装案の多くが実現することなく終わってしまった。ここでは、現在までに明らかになっているプランについて解説していく。

1/100スケールにフィギュア化を依頼したRX-93 νガンダム「ダブルフィン・ファンネル」(仮称)のイメージ画像。機体の外観はRX-93 1号機である。ラム・ローレ・大尉用に開発されたRX-93は片側作戦であったが、組み上がった納期のためにも、システムが同時に扱える上層などの制約で、そもそも実現できなかった可能性もある。

FA-93HWS

FA-93HWS v GUNDAM HEAVY WEAPON SYSTEM

【FA-93HWS】（モビルスーツ）

型式番号 FA-93HWS

頭高 21.0m

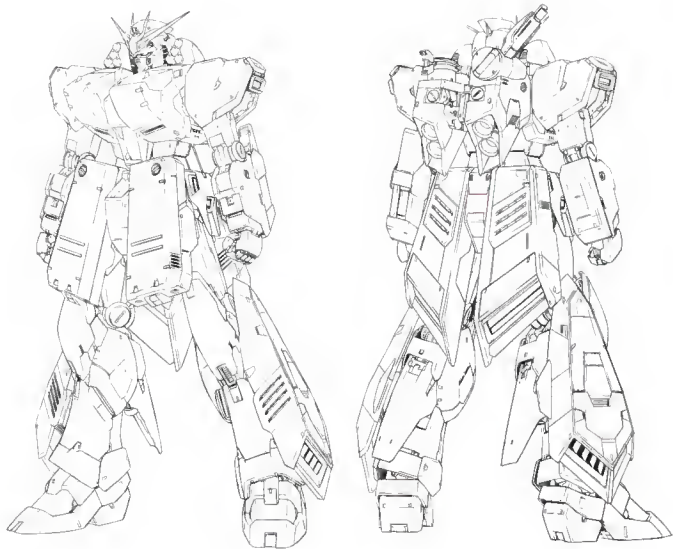
本体重量 52.6t

装甲材質 ガンズ・合金

センサー出力 不明

ミサイル能力 不明





【FA-93HWS (vガンダム (ヘビー・ウェポン・システム装備型))】

RX 78 2/3 ガンダム に対するFAS (Full Armor System & Weapon System: 装甲および武装強化システム)計画のように、MSに対して増加装甲を追加して戦闘能力を向上させようという試みは、古くから存在していた。俗にHWS (Heavy Weapon System)と呼ばれる強化プランもまた、同様のコンセプトに基づいて設計されたものである RX-92Bにて試されたLAS (Land Armor System) 装備が、装甲および武装の強化に伴う重量増に対応するためホバー走行機能を盛り込んだ陸戦強化案であったのに対し、HWSは大気圏外の無重力環境での運用を主目的としていたらしい。

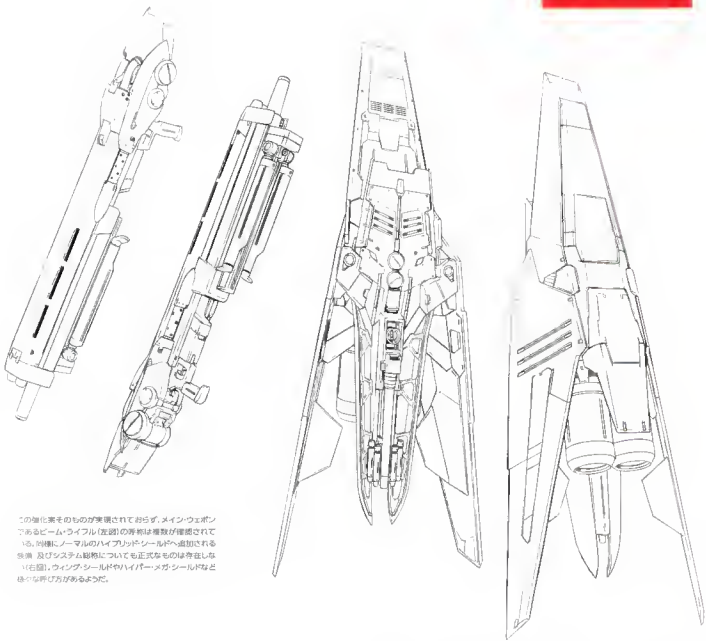
それでは、具体的にどのような強化プランであったのか、近年流出したU.C 0092年時点における計画案から概要を解説していこう

まず、脆弱性が指摘されていた胸部ユニットには、ミサイル・ランチャーを内蔵した装甲ユニットを増設 その上面に

は、ミノフスキー粒子による電波擾乱効果を低減させる特殊パウダーやダミーバルーンなどの補助兵装の装填を予定したマルチ・ディスベンサーを配している。また、増加装甲はフロント・スカートにも追加する計画であったが、こちらには近接戦闘の補助を目的として、「隠し腕 (近接戦闘用補助マニピュレーター)」の内蔵も検討されていたようだ。こうした増加装甲の追加に伴う重量増対策としては、リア・スカート、および脚部ユニットにプロペラント・タンクと推進器を兼ねたスラスター・ユニットを増設することで総推力を向上させ、対応しようとしていたらしい。

以上のようにMS本体に対するオプション類については、ある程度の仕様が判明しているのだが、一方で手持ち式兵装については、外観イメージが出回っているものの資料によって名称や機能はまちまちであり、複製の説が存在している状況だ たとえば射撃武器と目される兵装については、「ハイ





この強化案そのものが実装されておらず、メインウェポンであるビーム・ライフル(左図)の弾数は発射数が増減されている。例題にノーマルのハイブリッドシールドが追加される機体、及びシステム総称についても正式なものは存在しない(右図)。ウイング・シールドやハイパー・シールドなどが様々な呼び方があるようだ。

ハイパー・メカ・ライフル ハイパー・ビーム・ライフル メカ・ハンド・キャノン といった呼称が確認されている。とはいえ、名称はとうとうあれ高出力のメカ粒子砲であったことは間違いない。問題は、アルファバットの A を思わせる特異な形状を成したシールドである。標準武装のハイブリッド・シールドの1に重ねるようにしてマウントする予定とされたこの武装には、下方方向に突き出した一本の筒状の構造物が確認できる。しかし、これを指して補助ブースターであったとする説があったかと思えば、剣鞘ロケット・ランチャーであったとも、人1体のメカ粒子砲であったとも言われているのだ。名称についても ウイング・シールド や ハイパー・メカ・シールド ハイパー・メカ・シールド といった表記が見られ、定していない異なる複数種のシールドが設計されていたのか、あるいは筒状の構造物は機体が効く仕様であったのか、多くの謎が残る状況である。

それもそのはず、U.C.0094年の実用化、U.C.0100年までの大戦配備を目指した長期計画であったHWS案は、シャアの反乱の早期終結に伴い、開発計画そのものが凍結されているのだ。一説では、U.C.0100年にふさわしい機体をとの触れ込みでMS本体の設計も見直し、駆動系へのサイコフレームの導入を行うという、後のフル・サイコフレーム機に繋がるような斬新なプランさえ検討されていたとされるが、そのすべてが水泡と化してしまったのである。ただし、HWS案で示されたアイディアは、後年、立ち上げられることになるUC計画に引き継がれ、RX-0 ユニコーン によって花開いている。特にMSN-066 シナンシュ・スタイン とは、脚部ブースター・ユニットやハイパー・ビーム・ライフルなどに、HWS案の名残が強く表れている。そうした意味においては、本機こそがRX-0の始祖と言えるのではないだろうか。

FA-93S

FA-93S FULL ARMOR vGUNDAM

【FA-93S】

機体番号

機体番号 201

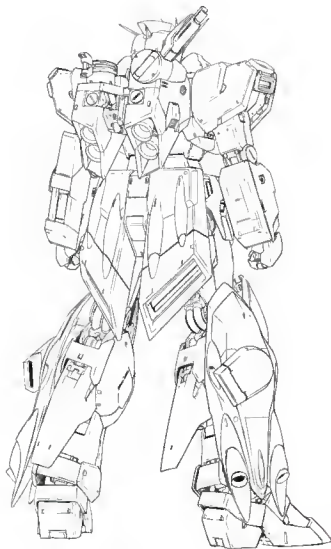
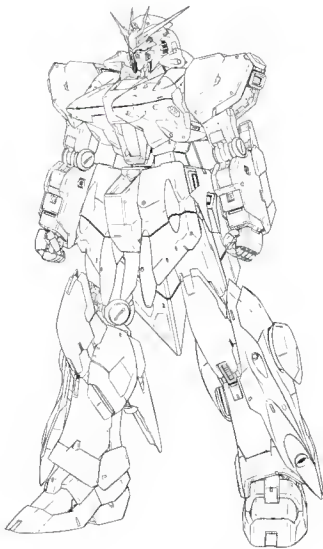
全機重量 不明

装甲材質 カンバ

「エネジ」ダ

・ マタ 座席





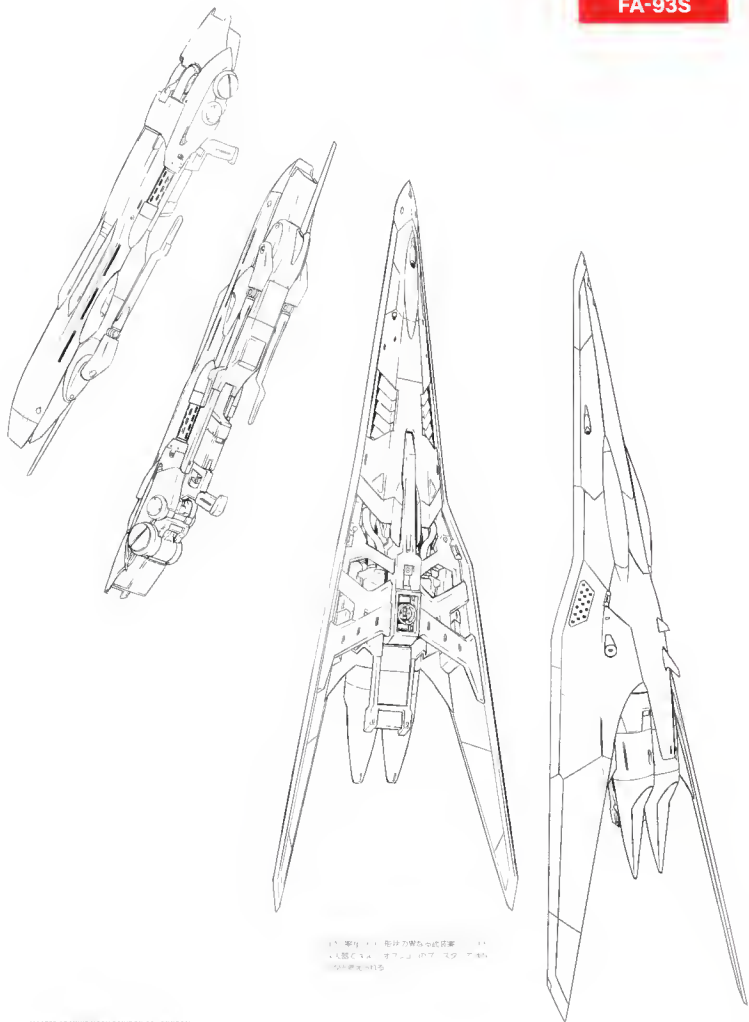
【FA-93S〈フルアーマー・vガンダム〉】

RX-93の強化プランのひとつ。胸部ユニット、フロントノリアスカー、脚部ユニットにそれぞれ、増加装甲やスラスタ・ユニットを増設している点など、基本構造がHWS案と酷似しているのが特徴である。ただし、それらオプション類は全体的に流線型の独特な形状となっており、角ばったシンプルな構造のHWS案とは明らかに異なっている。一説によれば、HWS案は、ミサイル・ランチャーにはMSZ-010系の、脚部スラスタ・ユニットにはMSZ-006系の設計や部材を、それぞれ流用する計画であったという。おそらく、開発期間の短縮や部品調達効率化を目的とした処置であろうが、FA-93Sには、そうした配慮の形跡が見られない。こうした点を踏まえ

るならば、FA-93Sは、オプション類によるRX-93の強化というコンセプトが提示された直後のプランであり、HWS案の雛形とも言える存在であったのだろう。本機的设计によって方向性を確定した後、より兵器として洗練させたものがHWS案であったという考え方である。

ちなみに、手持式武装についてもHWS案とは形状が異なっている。特にシールドについては、ふたつの丸型開口部の形状や警戒色の塗り分けパターンから、火器の類ではなく、ブースターのように見受けられる。少なくともFA-93Sプランにおいては、シールドを補助推進器として利用する計画であったのではないだろうか。





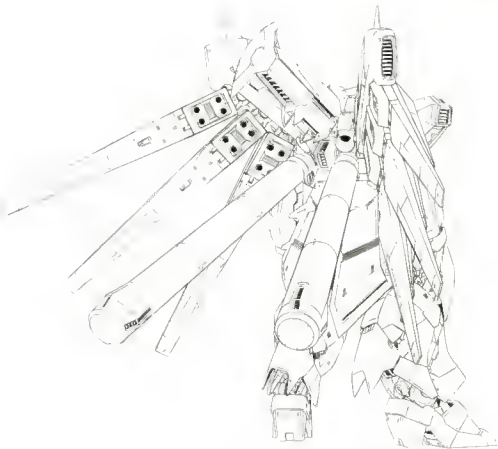
↑↑ 軍用機に由来する機体構造 ↑↑
 ・大規模な「オフセット」のブラスターアーム
 ・機体構造が特徴

RX-93-v2

RX-93-v2 Hi- νGUNDAM

【シナリオ】
高橋ノブ
原田昌
宇津野
城戸
「スレ」
「マター」





RX-93 v2は、サイコフレームを応用する方式ではなく、パイプの専用マウントで個別に接続する方式を採用。これにより、パイプから直接パイロプラント・パイプを抽出可能となるなど、進化した「フレーム」であると感じる。

【RX-93 v2(Hi-Vガンダム)】

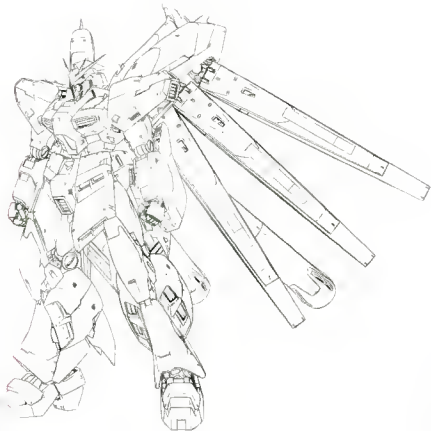
RX-93 v2ガンダムは、ロント・ベルからAE社への要求仕様の提示から、実質3ヶ月程度という極めて短い期間で開発が行われたRX-9x系試作機群という基礎設計の大部分を流用できる母体があったとはいえ、サイコミュ・システムの組み込みを含めて新規実装も少なくない中で、実戦投入可能なレベルの試作機をこれだけの短時間で製造したのだから、驚異的なスピードと言えるだろう。ただし、実戦配備を急ぐあまり、点検めきされていない部分も多く、いささか急造の感が否めない機体だったと評する向きがあることも確かである。

特にサイコミュ・システムに用いられた新素材、サイコフレームについては、RX-93の開発を担当したフォン・ブラウン工場のスタッフですら詳細を把握していない状態で、材料開発部門からの提案に基づいてコクピット周辺に用いたものの、その効果については何ら確信があった訳ではなかった。この点に関しては、実際はゲラナード製のMSN-03やMSN-04を通して人急にテストされていた訳だが、その事実を開発スタッフが知るのには、試作1号機をロント・ベルに引き渡した後

であったとされている。

こうした背景もあって、フォン・ブラウン工場ではサイコフレームという新素材が提示された段階で、製造中であったRX-93(試作)1号機への適用を急ぐ傍らで、基礎設計から抜本的な見直しを行う腹案の検討も開始していたようだ。これが、後にRX-93 v2(Hi-Vガンダム)と呼ばれることになる機体である。まず、フォン・ブラウン工場の技術者たちは、サイコフレームに対する独自のテストを行い、人急にデータの抽出を行ったという。そして、その結果に基づいてサイコフレームの配置を再検討し、メインとなるサイコミュ・システムとの接続方法を改めたようだ。これに伴い、アビオニクスはほぼ刷新と呼べるほど手が加えられ、機体フレームにまで設計変更が行われる運びとなったらしい。

さらにRX-93 v2型試案の計画立ち上げに伴い、試作1号機の仕様を「RX-93-1」と定義し、混同を避けるため型式番号の整理が行われた。においては、標準的な仕様にとどまっていたAMBAC肢や推進系の見直しも図られ、背部に

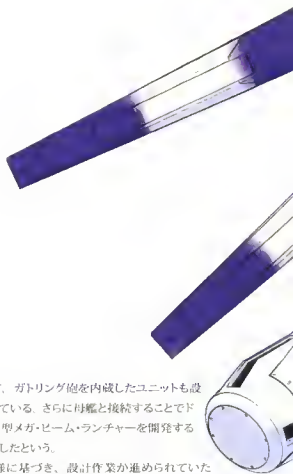


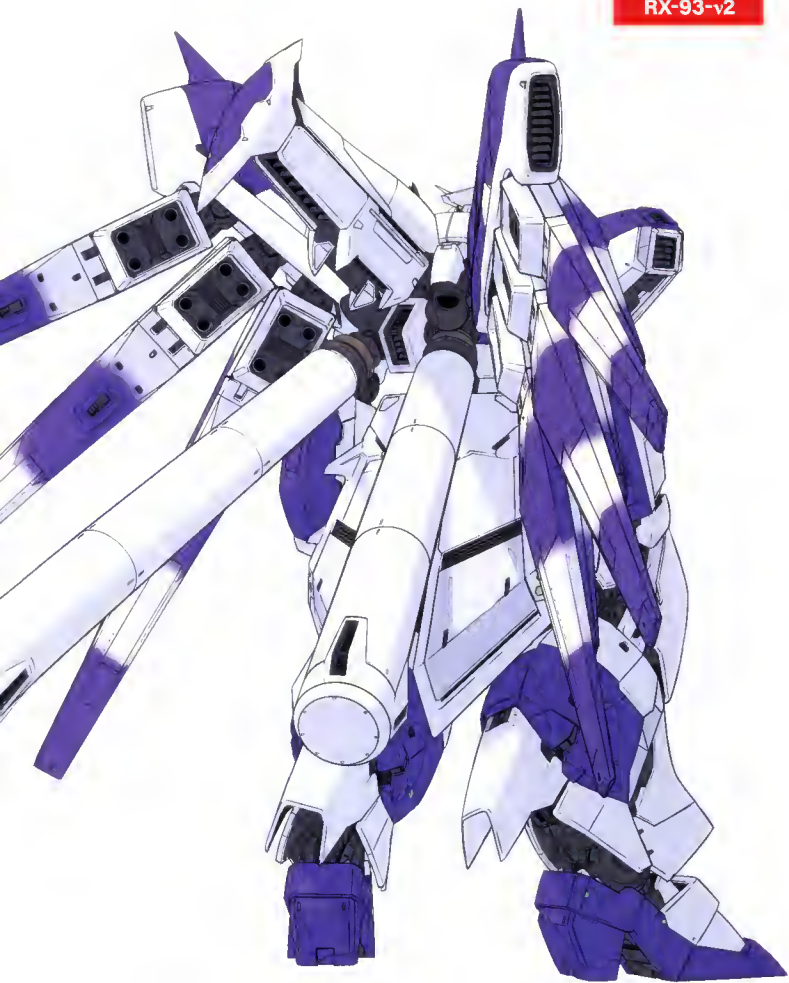
スタビレーターが追加された他、バックパックには補助推進器を備えたプロペラント・タンクを増設することが決定された。なお、このプロペラント・タンクを接続するためのコネクタには、あえて一世代前の部材が用いられるなど、信頼性を重視した設計が採り入れられたという。

また、MS本体のみならず、兵装についても改善が施された。たとえば、フィン・ファンネルそのものは、RX-93-1とはほぼ同仕様とされたが、専用のハンガー・ユニットを新設することで、機体側からプロペラント・バレットを補充することが可能な仕様とされた。これにより、フィン・ファンネルの再使用に要する時間の短縮や、総合的な稼働時間の延伸が可能であったと言われている。この他、基本兵装の見直しも行われ、冷却機構を改善したビーム・ライフル、エネルギー効率を向上させたビーム・サーベル、弾倉をマガジン化したニュー・ハイパー・バズーカ、裏面への装填機を追加により耐弾性を向上させたハイブリッド・シールドなどが用意される計画であったようだ。また、これらに加え胸部ユニットのマウント・ラッチに接続する

サブ・ウェポンとして、ガトリング砲を内蔵したユニットも設計されたと伝えられている。さらに母艦と接続することでドライブさせる、超人型メガ・ビーム・ランチャーを開発するという計画案も存在したという。

以上のような仕様に基づき、設計作業が進められていた本機であるが、RX-93-1試作1号機の実戦投入からほどなく、シャアの反乱が終結したことの余波を受けて、ロンド・ベルへの納入はペンディング扱いとなり、開発計画の詳細についても、特機事項として封印——いわゆる「アケシズ・ショック」に伴うサイコブレイム技術の管理徹底策とも無関係ではないものと思われるが、この辺りの経緯について明確な事実関係を記した資料は発見に至っていない——の憂き目にあってしまう。近年の情報開示に基づいて、その存在が明らかになったものの、最終的にRX-93-12の実機が製造されたのか否かを含めて判明していないことも多く、極めて謎の多いミステリアスな機体となっている。





RX-93-**v2HWS**

RX-93-**v2** Hi- **v**GUNDAM HEAVY WEAPON SYSTEM

【RX-93-**v2** Hi- **v**GUNDAM HEAVY WEAPON SYSTEM】

機体番号 RX-93-**v2HWS**

機体高 20.0m

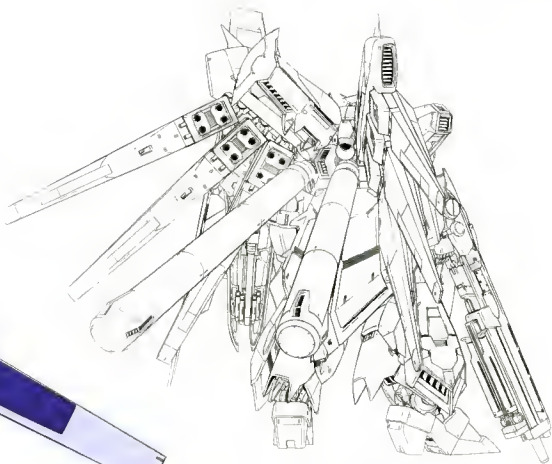
体重 重量 不明

装甲材質 カンダリウム合金

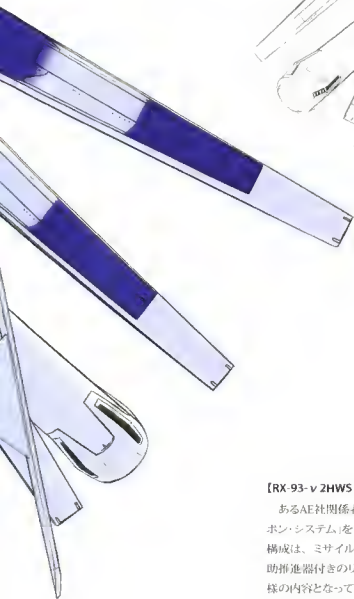
エネルギー出力 不明

ウェポン能力 不明





一點よると、RX-93ガンダムはハイパー・メガ・シールド・システムを、フル稼働したハイラム・システムを電源として運用することができたと思われる。

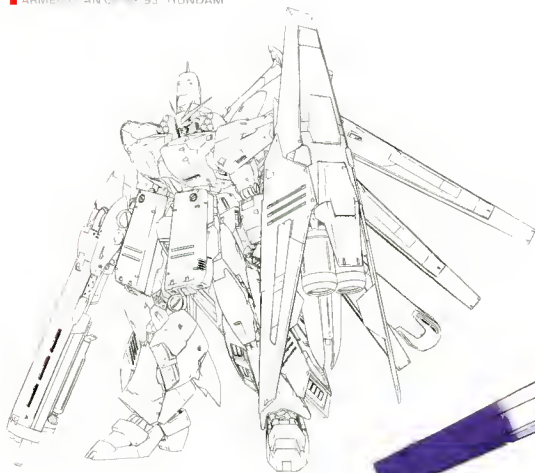


【RX-93-ν2HWS〈Hi-νガンダム（ヘビー・ウェポン・システム装備型）〉】

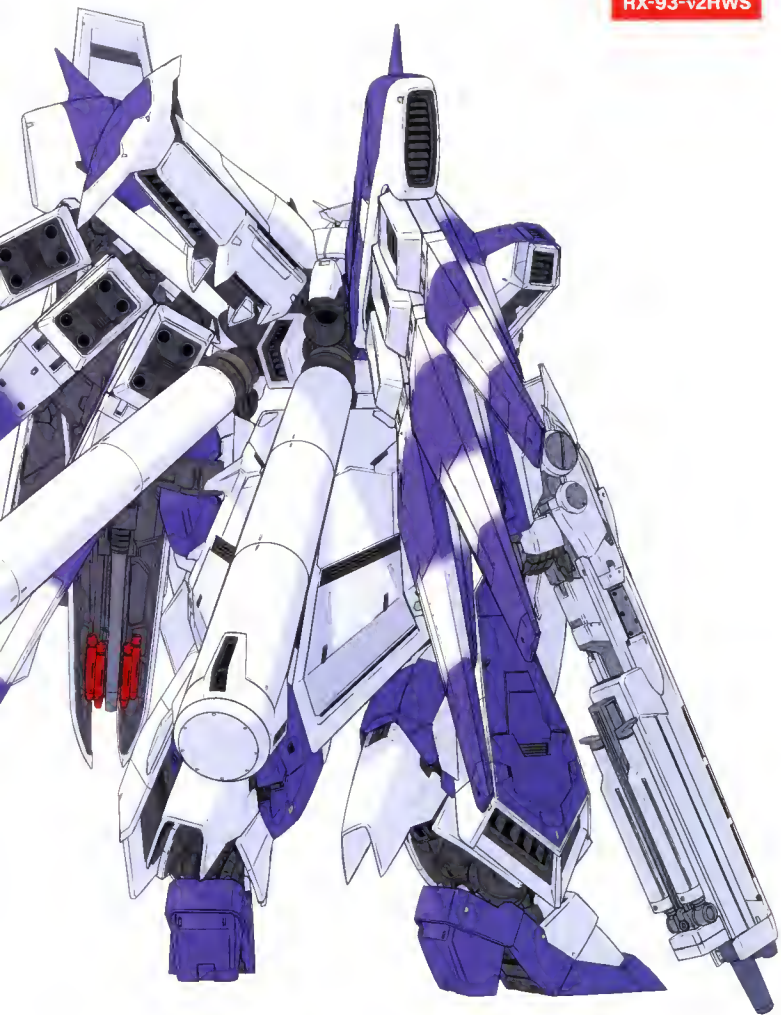
あるAE社関係者の証言によれば、RX-93向けの強化プランとして検討されていた「ヘビー・ウェポン・システム」を、RX-93 ν2に対して適用しようという計画案も存在していたという。増加装甲の構成は、ミサイル・ランチャー内蔵型胸部装甲、「隠し腕」内蔵型フロント・スカート・アーマー、補助推進器付きのリア・スカート・アーマー、脚部スラスター・ユニットと、HWS試案のそれとほぼ同様の内容となっていたようだ。

特徴的なのは、ハイパー・メガ・シールドを背部にマウントした「第三形態」と呼ばれる運用方法が検討されていた点だ。シールドの一部に可変機構を組み込むことで、簡易的なウイング・バインダーとしてAMBAC機構を追加するという試みで、重装甲に伴い低下した機動力の補助として、一定の効果を見込んでいたようだ。

注目すべきは、この時、ハイパー・メガ・シールドの前面を機体下面方向に向けている点だろう。これはあくまで想像に過ぎないが、ハイパー・メガ・シールドの異様なまでに太いバレルは、荷



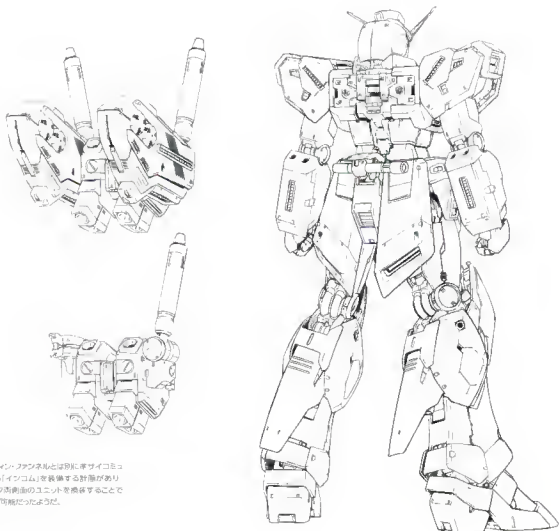
電線の可変速制御を盛り込むことで、推進用ブースターとしても転用することを目的としたものだったのではないだろうか。同様の技術としては、U.C.0120年代に開発されたF71B Gキャノン・マグナのヒーム・キャノンなどを挙げることができるが、技術的には20年余り遡ることとなるため、いざさか時代を先取りしすぎている感もある。だが、HWS試案のシールドが補助ブースターを内蔵したウイング・シールドであったとする記録と併せて考えてみれば、あながち有り得ない話でもないだろう。当時の技術で、予定通りの性能を発揮させることができたかは別問題として、メカ好き層を転用した補助ブースターというコンセプト自体は、考案されていたとしても何ら不思議ではないからだ。HWS試案がU.C.0100年の実戦配備を目標とした長期計画であったのも、このような理論上は可能とされながらも、技術的問題から直ちに実用化はできない装備が含まれていたかゆえだったのかもしれない。



RX-94 vGUNDAM [PRODUCTION MODEL] INCOM TYPE

【RX-94】標準型
 型式番号 RX-94
 全高 1.2m
 本体重量 14.6t
 全機重量 58.0t
 装甲材質 カンダマール合金
 出力 2,500kW
 推力 87,000kg
 センサー有効半径 1.340m





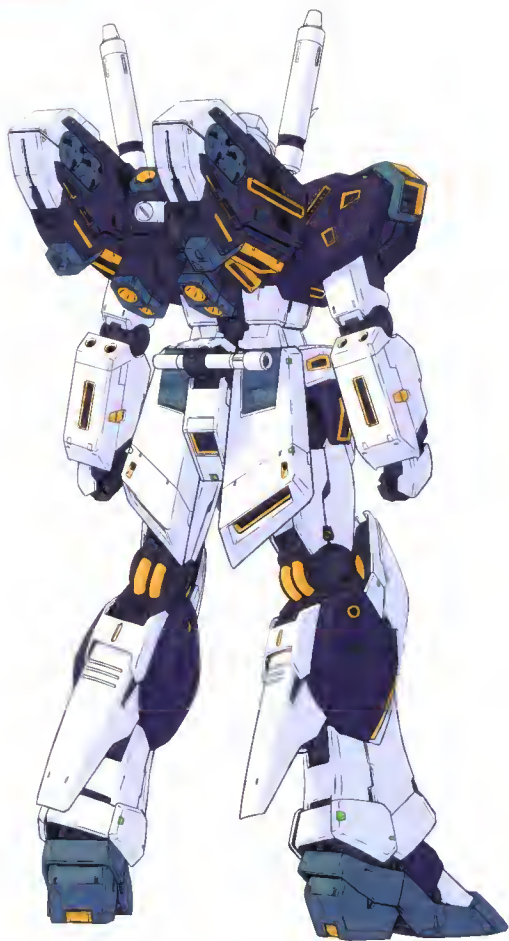
RX-93はフィン・ファンネルとは別に専サイコミュ兵器である「フィンコム」を装備する特徴があり、バックパック両側のユニットを換装することで武装変換が可能だったようだ。

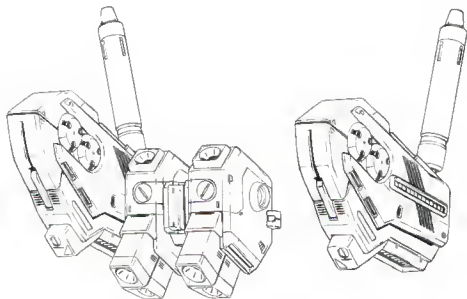
【RX-94(量産型νガンダム)】

RX 93-1は、ほぼワンメイクに近い機体として製造されたが、先にも述べたとおり開発の初期段階から量産化を視野に入れていた。そして、RX 93の量産モデルとして開発されることになるのが、RX-94 量産型νガンダム、と呼ばれる機体である。ただし、ここで注意しておきたいのが「量産型」と言いつつも、RCM 89 シェガン の代替となるような大量生産機を口指していたわけではないという点だ。発注者であるロンド・ベルとしては、ネオ・ジオン軍の主力機たるAMS-119 ギラ・ドーガと比較してRCM 89の性能不足を指摘してはいたものの、それはマイナーチェンジで充分に対処できる程度の差であると認識していた。彼らが望んでいたのは、ネオ・ジオン陣営がMSN 03に代表される第四世代MSを多数投入してきた場合に備え、それらに対抗し得るハイエンド機を、エースパイロット向けに少数配備するという構想であったのだ。

しかしながら、RX 93-1をそのまま量産することは、ふたつ

の理由から難しかった。ひとつ目の問題点は、製造コストである。規格品の部材を多用しているとはいっても、将来的な拡張を見据えてオーバースペック(味)に設計されたRX 93-1は、製造に要する費用があまりに高額であったのだ。さらに、ふたつ目の問題点はより深刻であった。完成した機体を運用し得る人材の確保が、極めて難しかったのである。ロンド・ベルのMS部隊を率いたアムロ・レイ大尉は、最も著名なニュータイプ・パイロットのひとりであるが、彼と同様にサイコミュ・デバイスを操作し得る人員となると連邦軍全体を通じて、数えるほどしか存在していなかった。エウロコ政権は、ティターンズによる強化人間研究を非人道的であるとして声高に非難してきた過去があり、政権奪取後は各地のニュータイプ研究所を閉鎖に追い込んできた経緯がある。この点が倫理的な規範に縛られることなく、強化人間の「製造」を続けていたネオ・ジオン陣営との大きな差となったのだ。





以上のような背景から、RX-94の設計にあたっては、「基本スペックをRX-93-1比80%程度に抑えること」と「非ニュータイプ・パイロットでも運用可能なサイコミュ兵器を選択可能とすること」の2点を掲げることとなった。

まず、ジェネレーターは出力2500kw級のタイプに換装。装甲やフレームの構造材も、「段階安価なものにグレードダウンすることで、製造コストの削減を図っている。また、推進系の部材を大量生産品に変えるなどしてコストカットを断行したが、こちらは配置数や位置を調整することで、ハイエンド機としての水準を保つように配慮された。また、サイコミュシステムに関してもサイコフレームの採用を含めて、RX-93-1と同水準となるよう設計されたが、一方で兵装の選択肢として「フィン・ファンネル」とは別に、準サイコミュ兵器である有線式攻撃端末「インコム」を用意。これに伴い、バックパックは根本的に設計が見直され、サイコミュ兵器とビーム・サーベル・ラックをユニット化する方式が採用された。結果的に6基のフィン・ファンネルを保持できる「ファンネル・ユニット」と、左右各2基ずつ計4基のインコムを内蔵する「インコム・ユニット」を換装できるよう設計されたのである。

手持ち式の兵装については、RX-93-1と同型のビーム・ライフルとニュー・ハイパー・バズーカ、ハイブリッド・シールドの使用を検討していたが、ビーム・サーベルについては、MSZ-010向けの装備を参考に開発されたビーム・キャノンとしても利用可能なタイプに差し替えられていたようだ。この他の変更点としては、腕部ユニットに取り付けるオプション装備が挙げられる。RX-93-1試作1号機では、左腕にビーム・サーベル・ラックを接続させていたが、RX-94では両腕にビーム・スプレー・ガンを搭載する仕様を標準としたのだという。なお、予備のビーム・サーベルについては、リア・スカート・アーマーに出すことになったが、こちらはエネルギーの充填

機能は持たないシンプルなラックであったようだ。

ちなみに本機は、RX-92-v2と同様にシャアの反乱の早期終結に伴い、開発計画が凍結されたものの、後に地球連邦宇宙軍向けの次期主力機候補として開発を再開させている。その際、機密ランクが引き上げられていた都合上、サイコフレームはオミットされ、あくまでもインコム装備型に限定した機体として調整されたとも伝えられているが、この点については確たる証拠は残されていない。とはいえ実機の完成までは消ぎ着けたのは確かなようで、月近傍にてインコムのテストなども実施されたという記録が残されている。また民間の記録となるが、U.C.0099年刊行の『アナハイム・ジャーナル』誌に掲載されたスナップにて、カメラに向かってポーズを取るAE社の女性社員たちの後方に偶然写り込んだ本機姿が確認されている。このスナップには、U.C.0094年6月22日という日付が印字されており、本機が製造された時期を推定する上で重要な情報源となっていることを追記しておく。

ところが、実機が作られるまでに進んだ本機も、後の調査に繋がったのかと言え、そうではなかった。U.C.0096年以降、地球連邦軍はRCM-89の上位に位置づけたハイエンド機として、RCM-96X〈ジェスタ〉の採用を決定。製造済みのRX-94は、軍工場に移管され次期主力機のテストベッドとして転用されたと伝えられている。また余談であるが、後にAE社は、本機の設計をベースとした技術検証機を製造したようだ。ただし、こちらは合体変形機構の組み込みを行うなどRX-9x系から受け継がれてきた「大型非可変MS」というコンセプトから大きく離れており、むしろMSZ-010やMSZ-011といった方向性へと先回りした機体であったという。そうした意味においてもRX-94こそが、純粋なる最後の「vガンダム」であったと言えるかもしれない。





RX-93のオプション装備はバック四角形の
2ユニットを換装することで変更が可能な仕様で
「フィンファンネル装備の場合、RX-93と同等
に片持ちとし、右側はヒームサーベルマウン
トとするプランだったようだ。ただし、コックピ
ットであることから機体上はダブルフィンファン
ネル仕様とすることも可能だったと考えられる。

RX-94 COLOR PLAN

実機の生産工程まで計画が進められたRX-94であるが、地球連邦軍への売り込みに当たっては配備状態のイメージ画像が作られている。ここに挙げたのはそのうちの幾つかをピックアップしたものであり、実際の部隊で採用されたカラーリングではない。

シェガン 同様の汎用カラーイメージのほか、コロニー防衛隊、軌道上バトロール艦隊、地上部隊、特殊部隊などを想定したカラーリング・パターンが提案されている。



■ シェガン配備型



■ コロニー防衛隊型



■ コロニー防衛隊型



■ 地上部隊型



■ シェガン配備型





■ スタンダード配備型



■ 1st開発型

■ ネル装備型



■ 2nd開発型

■ 3rd開発型

E.F.S.F. RA CAILUM

カイルム級機動戦艦〈ラー・カイルム〉



【建造の経緯】

人類史上初の大規模宇宙戦争となった「一年戦争」において、地球連邦宇宙軍の主力艦を務めたのは、U.C.0070年代軍備増強計画に伴い戦前に開発、建造されていたマゼラン級戦艦やサラミス級巡洋艦であった。戦中にはV作戦の一環としてMS運用能力を有するヘカサス級強襲揚陸艦が就役してはいるものの、総建造数は10隻に満たず、全体としてはやはりマゼラン級やサラミス級を中軸にした布陣であり続けた。

こうした状況は、戦後もしばらく続いた。戦後復興に予算が割かれる中で、莫大な数の既存艦艇を、すべて新造艦に置き換えることなどできようはずもなく、サラミス級巡洋艦にMSデッキを後付する改修作業を進めるのが精々であった。た

これは、予算的に優遇されていたティターンズにしても同様

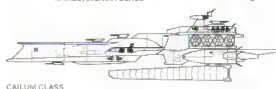
で、ドゴス・ギア級戦艦やアレキサンドリア級重巡洋艦などの建造を進めはしたものの、それのみで艦隊を編成することは叫ぶ。数をカバーするためには旧来型をベースとしたサラミス改級巡洋艦に頼る状況が続いたのである。

状況に変化が生じたのは、U.C.0090年代に入ってからのことだ。U.C.0080年代を通じて相次いだ戦乱を経て、大規模な艦隊戦力を保有する勢力が淘汰された結果、地球連邦にとっての軍事的脅威は、エグムやNPSといった小規模のテロリストグループへと変化していったのだ。そうとなれば、一年戦争時のような100隻規模の艦隊戦はおろか、グリプス戦役時の10数隻単位の艦隊戦すら起こり得ない。軍縮を求める政府からの強烈なプレッシャーも相まって、地球連邦軍は艦隊規模



E.F.S.F. RA CAILUM

カラーカイト
 駆動 機動戦艦
 艦種 カイム級
 所属 地球連邦軍第90部隊司令・ロンド・ヘル
 全長 487m
 全幅 165m
 武装 食糧メカ粒子砲×5
 電磁ミサイル×4 チョウ×6
 対空機銃砲×2



の縮小へと舵を切ったのだった。しかし、規模が小さくなったことで、かつては不可能であった艦隊単位における新造艦への刷新という芽が出てくる。特に、U.C.0090年代初頭の散発的に発生するテロへ対応するための外郭新鋭部隊——後のロンド・ヘル——という構想が立ち上がると、こうした機動性が求められる部隊にこそ、単艦行動にも対応できるMS運用母艦が必要であるとの見解が示され、新造艦の建造計画に承認が下りることになったのだ。もちろん、その背後にジョン・ハウアーを筆頭とする国防派勢力の存在があったことは言うまでもない。

ともかくにも、新造艦の建造計画は承認された。しかも、機動戦艦と巡洋艦の二艦種が、である。とはいえ、かつてのティターンズのように潤沢な資金があったわけでもなく、軍縮時代らしい制約もなされた。新たに建造される運びとなった新造艦、すなわちカイラム級機動戦艦とクラブ級戦艦は、主砲塔や機銃座、推進器、艦橋など、様々な部分の設計が共通化され、建造や運用に要するコストの削減が図られているのである。

基本設計

カイラム級の構造は、アイリッシュ級戦艦のそれとよく似ている。MS発艦用の開放型カタパルト2基を互いに備え、着艦用甲板を艦尾方向に備え、計12機の艦載MSを効率的に運用することかできた。また、ユニット型の主推進器を艦尾に備える点も、アイリッシュ級に近い。ただし、艦首についてはどちらかと言えば旧来型のサラミス級に近く、ミサイル発射管6門を備えた先細りの構造を採用している。

火力については、さしたる特徴はない。主砲はクラップ級巡洋艦とはほぼ同系の連装メカ粒子砲であり、設置数は艦首方向に3基、艦尾方向に1基と標準的だ。ロンド・ヘルの初代旗艦を務めたネール・アーカマが、複数の副砲に加えてハイパーメカ粒子砲を備えていたことと比較すれば、かなり控えめな武装と評されていたろう。

一方、防御面ではいくつかの点が見られる。まず、対空武装が既存の艦艇に比べて手薄になっており、対空機銃座は計22基と多い。さらに被弾率の高かった艦橋は、通常航行時のみの使用に限定されており、交戦時になると艦長以下のブリリッシュは艦体中央の戦闘ブリリッシュに移動する方式を新たに採用した。この戦闘ブリリッシュはリオン空母軍の艦艇のように緊急時の脱出ポッドとしての機能を備えているなど、地球連邦軍の艦艇としては類を見ない設計となっている。

またブリリッシュは、カイラム級とクラップ級で共通のレイアウトになっており、座席数も同数であった。

艦歴

就役したカイラム級のネームシップは、直ちに外郭新興部隊「ロンド・ヘル」に引き渡され、その艦隊旗艦として運用される運びとなった。そして、ロンドンニオンを母港とし、各サイドのテロ対策、および再興の兆しがあるネオ・ジオンの捜査に従事。U.C.0093年のいわゆる「シャアの乱」において、先陣を切って戦い、特にアクシス攻防戦の最終局面においては自兵による爆撃を試みるために、小惑星「アクシス」への着陸を強行するなど、人々に奮戦した。

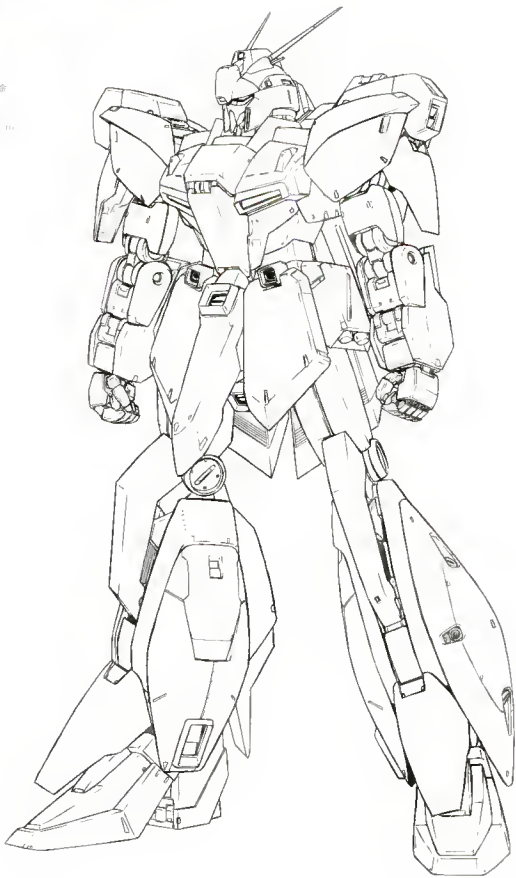
この後も、ラー・カイラムは「ロンド・ヘル」の旗艦として運用され続けることになるが、U.C.0096年時点では新型ミノフスキークラフト・エンジン搭載実験艦としての役割を与えられており、地球（土への）降下も果たしている。また、これに前後してMSデッキにも手が加えられていたようで、艦載MSの数が12機から16機へと拡充されている。

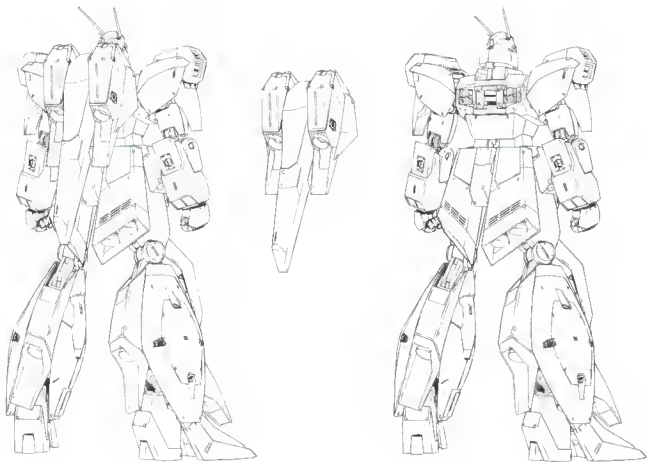
なお、「ロンド・ヘル」が第13独立部隊に編入された後も運用を続けられ、U.C.0105年時点ではビーム・ヴァリアーなどの新装備が追加されていたことも判明している。





生(器)
R.O.T.
全盛電機
被甲材料 3金
Z力、550r
製造の、
1977年10月





【RGZ-91〈リ・ガズィ〉】

アムロ・レイ大尉がRX-93に乗り継ぐ以前に運用していたRGZ-91 リ・ガズィとは、いかなる機体であったのだろうか。その奇妙なヘッドネームは「Refine Gundam Zeta」の略称とされ、本機がMSZ-006 ズガンダムに連なるMSのひとつであったことをよく表している。

可変機構の導入により、衛星軌道上からの降下作戦や弾道飛行による長距離侵襲作戦を可能としたことで、極めて展開能力に優れた機体と評価されたMSZ-006であったが、一方で製造と運用に要する費用の高額さが看過され、大量調達には繋がらなかった。そのため、U.C.0088年には早くも可変機構の簡易化や省略による低コスト化の道が模索され始めることになる。こうした流れの中で登場したのが、Z系のフレームを転用した非可変MSとバック・ウェポン・システム（以下、B.W.S.）と呼ばれる特殊装備であった。

B.W.S.を端的に表現するならば、「MSの背部に装着することで火力と装甲を強化することができる増加ユニット」となるが、

サブ・ジェネレーターを内蔵した増加武装というだけであれば、それまでも存在していた。そうした既存の装備とB.W.S.が異なるのは、武装だけでなくノーズと主翼を備えており、装着することでMA状の巡航形態をとれるという点であろう。ただし、大推力のブースターが付属している訳ではなく、推力はMS本体に依存するという、かなり割り切った作りになっている。補助的な推進器が付属しているものの、これはあくまでAMBAC肢が使えなくなった場合に、最低限の機動性を担保するためのもので、総推力を大幅に向上させるものではない。であるとするならば、B.W.S.が有する火力と装甲以外のメリットは何なのか。それは大気圏内で運用する際に、空気抵抗を低減し揚力を向上させるという効用であり、また宇宙空間では大容量のプロペラント・タンクとして機能する点であったのだろう。

一度取り外してしまえば、戦場での内装着は不可能であるというデメリットがあるにせよ、複雑な可変機構を導入せずMA的な運用が可能であることは一定のメリットとされた。

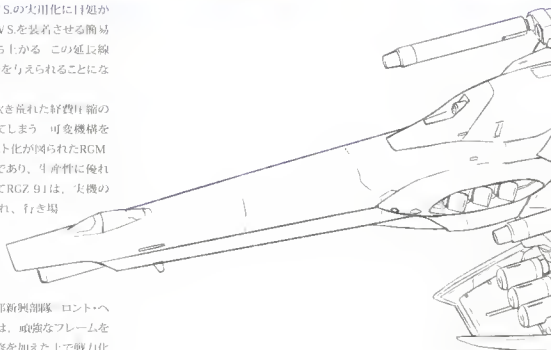
RGZ-91 RE-GZ [BWS: BACK WEAPON SYSTEM]



MSZ 006Rといった試作機を経て、B.W.S.の実用化に目処が立つと、ほどなく7系の非可変機にB.W.S.を装着させる簡易Z系ともいえるような機体の構想が立ち上がる。この延長線上にあるのか、後にRGZ-91の型式番号を与えられることになる機体である。

ところが、ハマーン戦争の終結後に吹き荒れた経費圧縮の嵐を受け、RGZ-91の採用は見送られてしまう。可変機構をオミットしたと、いっても、徹底的に低コスト化が図られたRGM-89 シェガンと比べれば製造費は高額であり、生産性に優れるとも、いえなかったためである。かくしてRGZ-91は、実機の製造工程まで進みながら採用は見送られ、行き場を失ったのだった。

捨てる神あれば、拾う神あり。AEUの倉庫の中で、杓ちゆく運命にあるかに見えたRGZ-91の1機を、実機の場に引っ張り出そうとする者たちがいた。外郭新鋭部隊「ロント・ヘル」である。戦力不足に悩んでいた彼らは、頑強なフレームを有するRGZ-91に着目し、いくつかの改修を加えた上で戦力化することとした。



二に注意しているのか、ロケットヘル配備に合わせて改修されたのは、その部分であつたのかという点である。最終的な仕様はある程度、判明しているものの、採用は遅りとなった時点での細かな仕様までは判明していないという。いくつかの点から総合的に判断すると、B.W.Sの搭載シミュレーターとメカ粉砕装置を模倣し、洋艦艦クラスとも論ぜられる打撃力を与えたこと、そして操縦装置に2系系のパイロットセーラーを簡易化し、感応波による操縦アシスト機能を盛り込んだことが、この時点での変更点としてみられ相違ない。一説によれば、こうした戦力仕への試みはラサの参謀本部に知らせることなく、ロケットの独断で行われていたという。配備の申請は、その後の作業が早々に完了に終わったためだろうか。そうとなれば参謀本部としてみれば、前線部隊から戦力を奪うような真似もできず、敗戦事実を後進で承知するかもしれないからかたがたのうろ

なお、RGZ 91の操作性に関しては、元よりヒキキであったとされ、ロスト・ヘルのMS部隊でも乗りこなせるのは、アムロ・レイ人間を除けば、ケーラ・スウ中尉ぐらいのものであった。

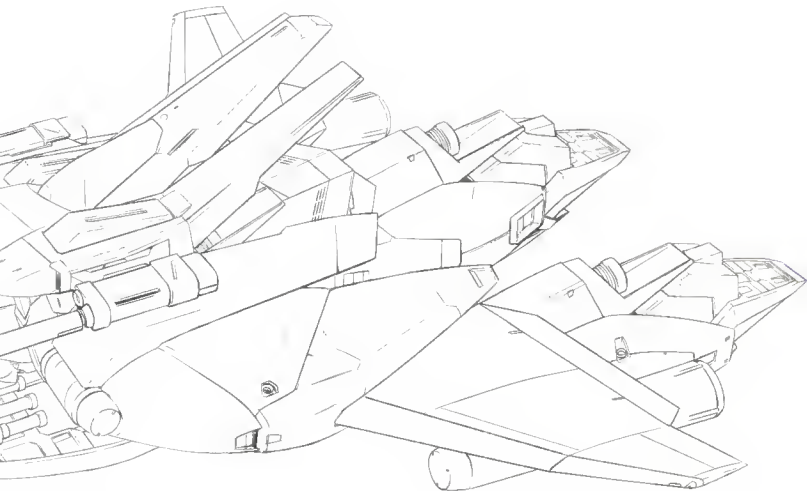


「は、正規数値を待てな！」

「疑問」 船内へ入部！ ・も同地攻撃のため 開発した可変AGFの動

「結果はね？」 AGFのいゝ あゝ。

と伝えられている。レイ大尉がRX 93の製造に際しても、殊の外、シンプルで素直な操作系統にこだわったのは、扱いにくいRGZ 91の存在があればこそだったのかもしれない。



RGM-89

RGM-89 JEGAN

【RGM-89 ユーガン】

型式番号 RGM-89

全高 20.4m

頭高 19.0m

本体重量 21.3t

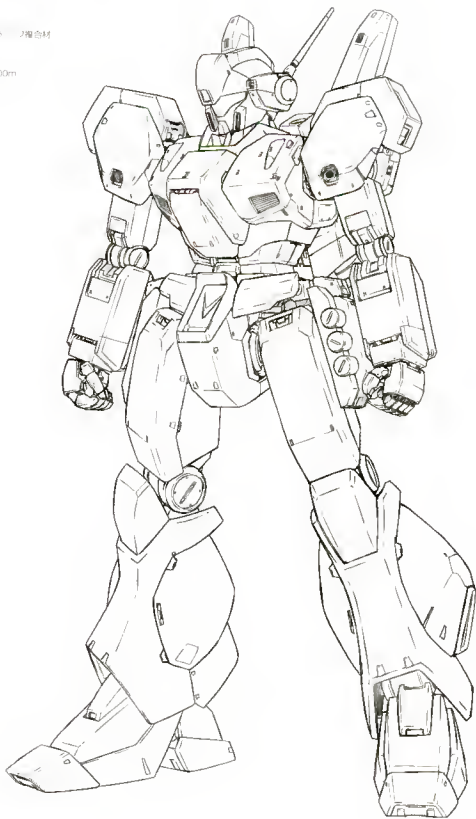
全備重量 47.3t

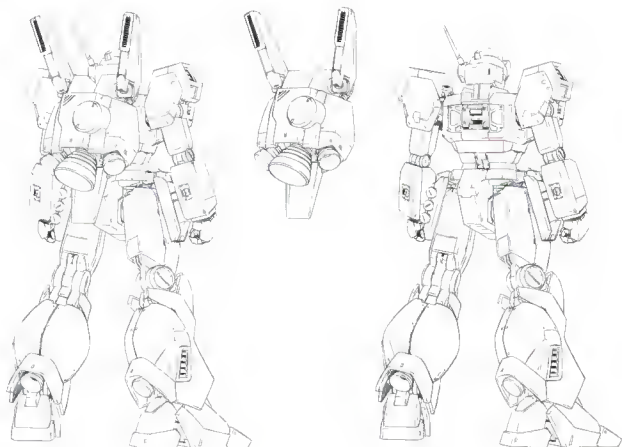
装甲材質 ナタン合金セラム / 複合材

出力 1,870kW

総推力 48,700kg

センサー有効半径 14,200m





【RGM-89〈ジェガン〉】

AE社が開発した汎用主力MS。シャアの反乱において、ロント・ベル艦隊の主力機を傷め、フィス・ルナ攻防戦では14機が投入された。

U.C 0080年代末期、同社は地球連邦軍向けの次世代主力機として、RGM 88X ジェタ なる機体を開発し、軍部に対して売り込みをかけた。RX-178 ガンダムMk-II の解析によって得られた技術を惜しみなく投入したこの機体は、その簡易生産版とも呼べるようなフル・ムーバブル・フレーム機であり、RGM 86R ジムIII の後継機としては十分な性能を持ち合わせていた。しかしながら、軍事費の削減を望む地球連邦政府の意向には抗えず、結果不採用となる。この時点で製造されていた6機の試作機は、試験中に大破した1機を除き、3機がロント・ベルに納入、残る2機は予備部品とすべく解体されている。

かくしてAE社は、さらなる低コスト化を図るべく、RGM 88Xをベースに製造工程を簡略化させたマイナーチェンジャー・バージョンの開発に着手。フロント・スカート・アーマーを排除するなど、思い切った改設計によって製造費用を抑え込むことに成功したこの機体の開発は順調に進み、U.C 0089年初頭には実機の製造段階へと進展した。そして、RGM-89「ジェガン」として

の制式採用が決定すると、U.C 0090年5月より順次、実戦配備が開始される。ただし、ジョン・バウアー（国防族勢力）の強引とさえ言える後押しがあってなお、旧来機からの機種転換は遅々として進まず、U.C 0093年時点での生産数は80機ほどに留まっている。こうした傾向は、シャアの反乱によってテロの脅威が改めて明示されたことで覆れ、後に地球連邦政府も戦力拡充の方向へとシフト。以後、約30年間に渡って改修を繰り返しながら増産が続けられた結果、RGM-89は総生産数3000機とも言われる大ベストセラー機となってゆくのだった。

なお、ひとつのMSとしてのRGM-89は、極めてシンプルながら改修が容易な機体として知られており、強行偵察型や要軍政略用の支援機など、さまざまなバリエーションの母体となった。また、地球連邦軍の大量生産機としては、初めて本格的にアームレイカー式の操縦システムを導入した機体であるが、操作性は良好という評価を得ることが多い（アームレイカー自体の操作性についての評価はさておいても）。一方、運用側からは装甲の脆弱性などが指摘されてもあり、そうした点を改善した改修型の機体も開発されている。

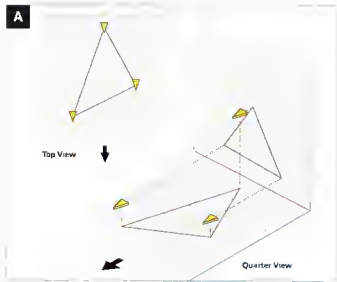


ラー・カイラムと艦載MS
ために搭載する艦載機（ジェガン）
機、カイラム艦載機数は12機
BMSを搭載、運用可能である。

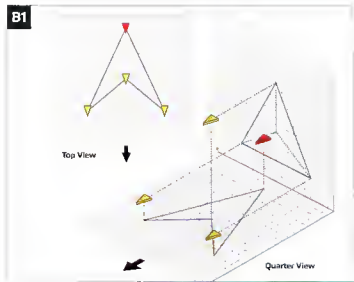




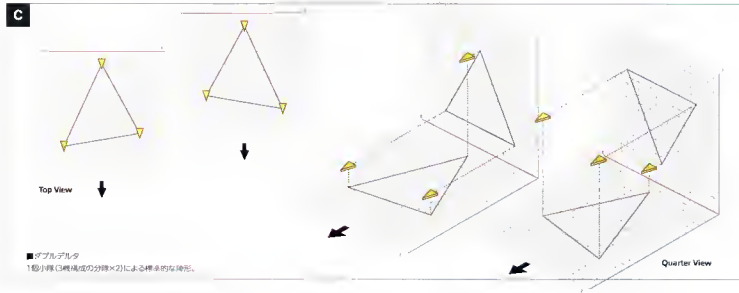
地球の軌道上をフォーメーションを組んで訓練飛行する「ラーカイラム」艦隊の1機。1機は「ラーカイラム」艦隊の1機として存在し、過剰の訓練飛行や試験飛行はRGZ-91（リ・ガンズ）が交代でアサイン（割り当て）された。左下の客員はRX-93（ガンダム）が交代でアサイン（割り当て）された。右下の客員はRX-93（ガンダム）が交代でアサイン（割り当て）された。右下の客員はRX-93（ガンダム）が交代でアサイン（割り当て）された。



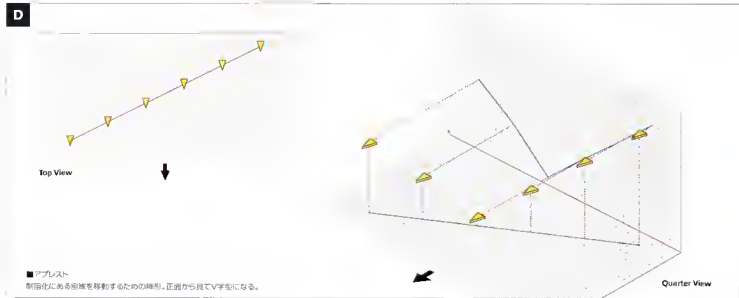
■デルタV
最も基本的な陣形。後方に指揮官機を置き、それぞれの機体はフォーメーションの外側を監視しながら進行する。



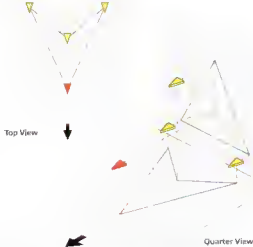
■デルタコーン
デルタVの発展型で、4機編隊。当初はエース機を後方に置く陣形であった。



■ダブルデルタ
1個小隊(3機編成の分隊×2)による標準的な陣形。



■アプレスト
制空化にある部隊を移動するための陣形。正面から見てV字型になる。



■ タコ (ース)
1ース戦を顔面から前刀に力1こ置く。角座陣形。戦闘時に1ースは突出し、より警戒を誘導が受け持つ。

【戦間期フォーメーション】

二 年戦争時、連邦軍ではモビルスーツによる戦闘移動時の編隊について、明郎軍規定と指針は行っていないかったようである。当時、連邦軍格闘隊たちにとってのMSは、完全武装の巨大歩兵・宇宙兵にすぎず、戦闘の中核はあくまで宇宙戦闘艦であって、航空艦艇の戦闘フォーメーションこそ研究されていたが、MSに關するそれは2機以上の最少構成単位を2個、計4機がMS部隊編成における最少単位という取り決めがあった程度と、わかる。しかも歩兵的な扱いを好む巨上格闘の意向からすればこれには規模が小さすぎたとしても、10機を基本単位(分隊)とする編成を強行した部隊もあったらしい。MS搭載宇宙艦のキャパシティからしてもこれには無理があったが、大戦末期の大規模攻勢時には10機編成分隊を標準としたらしい。とは言っても個々の部隊によって運用条件が輻輳に変わるケースも多く、往々にして現場の裁量に任せる。あるいはそれぞれの特長に從う傾向にあったようだ。戦争後半に大量のMSを投入していったものの用兵パターンは未成熟なままで、物量による制空戦の主要な運用を繰り返したにすぎず、量産MSのRCMや補助兵器RBに多くの犠牲を強いることになった。

ジオン公国軍では、MSを開発当初から機動兵器システムの要として位置付け、MSの絶対数が限られていることもあって、運用法も厳密に規定されていた。数が少ないことは部隊編成にも影響し、MS部隊の最少構成単位は3機を基本とした。

戦後になって、ようやく現実味のあるMS部隊編成と運用方法の研究がなされた。その結果、宇宙空間における編隊の最小単位は3機、作戦によって4機とすると明確に規定された。3機編成の分隊、これを2個で1個小隊、2個小隊で中隊を構成、予備機を含め計16機(大勲12機)が、MS運用母艦の最底層格納機とされた。

戦国時代動向の秘蔵本。この機軸3を標準に考えられていた。

SQUADRON FORMATION

実質的に有視界戦闘のみに限定されるわけではなくなったという戦闘環境の変化から、編隊の密集中度にも違いはあるものの、基本的なフォーメーションは、デルタと呼ばれる隊形である(図A)。上面から「目字空間」で上を定義するのは難しいが、見方の場合にV字(頂点は後方に向く)、進行方向から見るとA形になる編隊で、テイルエンドに指揮官機が沖を占める。またそれ以外の機はフォーメーションの外側を向くのが原則で、これによって移動経路周囲への死角を最小限にする目的があった。各機からの視覚情報は共有され、機上AIによって互いの危機監視を行うことになっていた。各機が編隊の内側を向くことは、強く禁じられている。

この発想はデルタコーンと呼ばれる4機編隊である。3機+1機という考え方のフォーメーションで、得てして単独行動に走りやすい、いわゆるトップエースと呼ばれるようなパイロットの自重を促す意味も含めての編隊であったと考えられている。指揮官機（エース機）を頭頂点とし、偵察機3機が底辺の各頂点に陣を占めて「角錐を描く編隊である。もともとは指揮官機を後方に置くように考えられていた（#D1）、エース・パイロットの技量が高いほど、頭頂にある指揮官機を前方に置く形が通例となっている。作戦開始時に至って指揮官機は単独行動に移行することが多く、編隊離脱時の後方警戒を僚機が受け持つという必然から生じた結果であらう」（#D2）。特に呼び名はないがデルタコーン・リバースなどと通称されていた。アムロが出撃する際にも自機を頭頂点とするデルタコーン・リバース隊形がなかったという。

このほか、1個小隊が移動する際のダブルデルタ（図C）、制宙域内で移動する際のアブレスト（図D）などが標準的なフォーメーションといえる。



U.C.0093年3月12日、ネオ・ジオン軍によるアークシイズとレノバ・ベルを中心とする地球連邦軍部隊によって阻止された。
*その結果として地球人類存続の危機はようやく抑えられ、アスナルの被害する攻撃の被害はひとまず食い止めたが、アスノイドとス
クスノイドの衝突は今なお続いている。なお、RX-93のガ
ンダム)の機体の行方は現在も不明としている。



MASTER ARCHIVE MOBILESUIT RX-93 v GUNDAM



STAFF

【監修】

株式会社サンライズ

【Mechanical Illustration】

菊川 達彦
シラユキ

【Written】

大橋 千博
大塚 元
二宮 浩幸
横村 空

【CG Modeling Works】

飯沼 勇一 (number 4 graphics)
オカモト マキヲ
大塚 元
中尾 博 (number 4 graphics)
高田 和紀 (number 4 graphics)

【コピー・マークデザイン】

大塚 元

【SFX Works】

飯沼 勇一 (number 4 graphics)
GA Graphic 編集部

【Cover & Design Works】

飯沼 勇一 (number 4 graphics)
高田 和紀 (number 4 graphics)
志村 孝弘 (number 4 graphics)
中尾 博 (number 4 graphics)

【Editors】

佐藤 元 (GA Graphic)
村上 元 (GA Graphic)

【アドバイザー】

森 繁樹 氏

【Management】

★ 菊川 達彦
★ 飯沼 勇一 (GA Graphic)
★ 大塚 元
★ 中尾 博 (GA Graphic)
★ 大塚 元
★ 大井 聡 (GA Graphic)
★ 伊藤 和典 (GA Graphic)
★ 大塚 元
★ 大野 良樹 (GA Graphic)
★ 飯沼 和典 (GA Graphic)

【Cooperator】

★ 森 繁樹 氏
西宮 浩二 氏 (サンライズ 機人部)

■ マスターアーカイブ セビム・マーン RX 93 vガンダム

2019年7月19日 初版発行

編集 本誌編集部

製作 GA Graphic

発行人 小川 博

印刷 共立印刷株式会社

発行 SBクリエイティブ株式会社

〒106-0032 東京都港区六本木2-4-5

TEL 03-5549-1201

© 創心・サンライズ

© SB Creative Corp

ISBN 978-4-7973-9721-5

Printed in Japan

※本書に関するお問い合わせは、書店にてお受けしています。

※本書の複製・複製・転載を禁じます。

※丁・張丁は4枚組単冊にてお取り扱いいたします。定価はカバーに記載されています。

※本書「マスターアーカイブ モビルスーツ RX 93 vガンダム」は、「公式設定」ではなく、ガンダムシリーズ作品に登場するRX 93 vガンダムについての歴史・技術開発資料であり、作品世界において刊行された書籍、という属性に基づいて執筆されています。

SB Creative

GA Graphic

4
www.sb.jp

000

001

002

003

004



005
006
007
008
009
010
011
012
013
014
015
016
017
018
019
020
021
022
023
024
025
026
027
028
029
030
031
032
033
034
035
036
037
038
039
040
041
042
043
044
045
046
047
048
049
050
051
052
053
054
055
056
057
058
059
060
061
062
063
064
065
066
067
068
069
070
071
072
073
074
075
076
077
078
079
080
081
082
083
084
085
086
087
088
089
090
091
092
093
094
095
096
097
098
099
100





MOBILE SUITS: GUNDAM/COMPTON'S: LUMBA



MOBILE SUITS: GUNDAM/COMPTON'S: KUBIKI

RX-93 νガンダム の開発経緯

DEVELOPMENT OF RX-93 νGUNDAM

時代は戦争によって形作られ、戦争は幾多の英雄を生む。宇宙世紀においても、それは同様であり多くの英雄が生まれ、そして戦火の中に消えていった。中でも、一年戦争のトップエースとして知られるアムロ・レイ中佐(最終階級)は、その悲劇的な最期によって人々の記憶に残り、伝説の域へと達した。地球への落下コースに乗った小惑星「アクシズ」を押し返さんとした彼は、愛機と共に文字通り消失したのだ。本書では、この宇宙世紀最大の英雄が最後に搭乗したことで知られる名機RX-93 νガンダムを中心に、その関連機種について時代背景と共に解説を試みるものである。



この機体は、一年戦争末期に、地球連邦軍のトップエースとして活躍したアムロ・レイ中佐(最終階級)が、小惑星「アクシズ」を押し返すために搭乗した。その結果、機体と共に消失した。この機体は、宇宙世紀最大の英雄が最後に搭乗したことで知られる名機RX-93 νガンダムである。



【アナハイム・エレクトロニクス社の機体】

RX-93 vGUNDAM

【アサハイム・カンナムへの最前線のアプローチ】

「アサハイム・カンナム」への最前線のアプローチ。RX-93 vGUNDAMは、その機体構造とシステムについて、以下のように説明されている。

機体構造：RX-93 vGUNDAMは、その機体構造とシステムについて、以下のように説明されている。

システム：RX-93 vGUNDAMは、その機体構造とシステムについて、以下のように説明されている。

機体構造：RX-93 vGUNDAMは、その機体構造とシステムについて、以下のように説明されている。

システム：RX-93 vGUNDAMは、その機体構造とシステムについて、以下のように説明されている。

RX-93 νGUNDAM DOUBLE FIN FUNNEL

NO.93(レガンダム)の既装画

ARMED PLAN OF RX-93 vGUNDAM

ロートベールの納入された制作(1月発売)は酒場のつらさに重なり、
たこと。そして何よりリアの抱負が極めて短期間で実現したこと
により、投与すべき思想を伝えたことで、機軸されていた
武家もの多くが見失ふことなく終わってしまっただけでは、現
在まで明らかになっている「サウンド」について解明していく。

【原典】『セザンヌ』(ダブリュー・フィン・ブックス・アート・エディションズ)

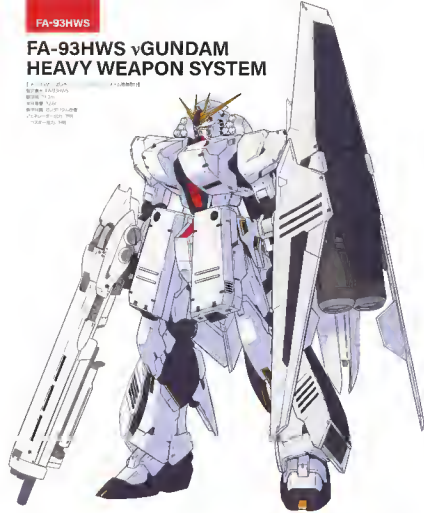
[illegible]

なお、この集録画の点には、別刷紙の「レ・ミゼ・アン・ド・シゲダ・アマム」も書き加わっているが、そのうち「ミゼ」に書かれた赤色の筆跡が削いでない。ただし、その「ミゼ」の宛先が「東京府知事」で、(用いた)紙が「明治6年」の紙であるとしても、1冊増えれば、手元で整理されたものと合致し、見当も合致する。なお、この集録画と同様に「レ・ミゼ・アン・ド・シゲダ」に類する「レ・ミゼ」の存在が認められる。

1990年12月25日、東京・有明コロシアムにて、第1回「日本プロレス大賞」が開催された。この大会は、プロレスラーの活躍を表彰するもので、大賞は「大賞」に与えられた。

製造元: 1. 2m
 材料: 鋼管 1.2m
 重量: 1.2m
 1.2m
 1.2m
 1.2m

$\lambda = 2.5$ (billion years)



084-93HWS (ロガンダム (ヘビー・ウェポン・システム装備型))

図17 左: ガーゲン、右: 対空用WS (内: Armor System & Weapon System)。装甲および武器統合システムに代表されるように、SGCに対して平均値を抽出して戦術情報に41させようという試みは、全く成功してはいない。特にHWS (Heavy Weapon System)と呼ばれる武器プラットフォームは、同様のコンセプトに基づいて設計されたものである。図18: 2割に不足していたAS (Armor System) 装備が、装甲および武器統合の強化に伴う増強に対応するための41結果である。これは明確な変化を示したものの、対し、WSは人気順位の低減と増強の両面から41対応して見られる。

それでは、具体的にどのような値上げプランであったのか、近年実施した17の2002年時点における計画案から推定を割愛していこう。

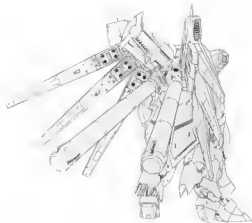
まず、熱処理が施されている鋼部はニットには、ミサイ
ル・ランチャーを内蔵した装甲はニットの側面、その上に

は、コンピュータ等による情報通信機器の普及と相連する各種機器、いわゆるデジタル・ネットワークなどの通信設備の整備を予定した上で、マルチメディア・システムを推進している。また、新築計画には「ソフト・シティ」にも通ずる「計画型」を掲げ、これらには建築技術の最先端と見做している。「建設時」に建築技術の最先端（マルチメディア）の内部にも視点を絞っていったうえで、こうした知能建築の適用に即ち情報技術の活用としては、リアル・タイム、非同期型マルチメディアによるプロジェクト、タスクと推進力を兼ねたシステム・コンピュータを推進することで「能力向上」を旨とし、対応しようとしている。

以上のように、日本国に対するオアション像については、ある程度の目録が判明しているのだが、一方で手持ち式兵器については、外国イメージが出力されているものの資料によって名称や機能はまちまちであり、推察の説が存在している状況が、たまたま複製品であるとされる兵器については、ハ

RX-93-v2 Hi-νGUNDAM

機体色
白・青・黄・赤
機体高 20.1m
全長 20.1m
全幅 20.1m
全高 20.1m
全重 100.0t
全高 20.1m
全重 100.0t



機体色は白・青・黄・赤の4色で、機体高は20.1m、全長は20.1m、全幅は20.1m、全高は20.1m、全重は100.0t、全高は20.1m、全重は100.0t。

【RX-93-v2(Hi-νガンダム)】

RX-93-v2ガンダムは、ロケット・バスターからA社への新機仕様の開発から、実質3ヶ月程度という極めて短い期間で開発が行われた。RX-93系試作機群という機體設計の大部分を共用できる機体があったとはいえ、サイコ・システムを組み込みを含めて新規開発も少なくない中で、実戦投入可能なレベルの試作機をこれだけ短期間で開発したので、開発的なスピードとさえいえるだろう。ただし、開発期間を急ぎ過ぎた結果、試作機に不具合があることもあった。

特にサイコ・システムに關した新素材、サイコフレームについては、RX-93の開発を担当したファン・ブラウン1機のスタッフでその技術を把握し、CIがない状態で、技術開発部門からの提案に基づいてコアビッド設計した。このため、その開発については何ら確認があった訳ではなかった。この点に関しては、実際にグラナダ1機製のMSN-03やMSN-04を通して人々にテストされていた訳だが、その事実を開発スタッフが知ることは、試作1機をロケット・バスターに引き継いだ後

であったとされていく。

こうした背景もあって、ファン・ブラウン1機ではサイコフレームという新素材が用いられた例で、事実上であったRX-93試作1機への適応を急ぎ、機體設計から基本的な形式を行う開発の検討も開始していたようだが、これが、機體RX-93-v2ガンダムと呼ばれることになる機體である。まず、ファン・ブラウン1機の技術者たちは、サイコフレームに対する自身のテストを行い、人々にデータ抽出を行った。そして、その結果に基づいてサイコフレームの設計を再開し、メインとなるサイコ・システムとの接続方法を改めて決めた。これにより、アビオニクス系統の刷新と呼べるほど手が加えられ、機體フレームにまで設計変更が行われる運びとなったらしい。

さらにRX-93-v2——2号試作機の計画も上げられ、試作1号機が機體を「RX-93-1」と定直し、機體を機體のため形式番号の整理が行われた。これによって、開発時の機體にどういった改良が加えられたのか、開発の経緯も明らか



スタビレータが追加された形。バックパックは、補給装置を備えたフロベラント・ランチャーを格納することが決定された。なお、このフロベラント・ランチャーを格納するためのコミナターには、あえて、旧机の要素が付けられるなど、旧機作を再現した面が窺い入れられたという。

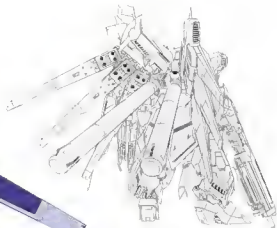
また、RX-93の両足、尻尾についても改造が施された。たとえば、フィン・ファンネルそのものは、RX-93-1とはほぼ同じ格とされたが、右足のフィン・ファンネルユニットを改造することで、機体側からフロベラント・ランチャーを格納することが可能な仕様とされた。これにより、フィン・ファンネルの脱出時に要する時間の短縮が、総合的な機動時間の短縮が可能であったとされている。この他、基本机の足元にも、旧機作の足元を再現したビーム・ライフル、ライフルマガジン化したニュー・ハイパー・バズーカ、前面への折り込みの追加により射撃方向にさせたハイブリッド・シートなどが追加される計画であったようだが、これらに加え機体ユニットのマウント・ラックに格納する

サブ・ウェポンとして、ガトリング砲を内蔵したユニットも、提案されたと伝えられている。さらに、機と接続することでドライブさせる、超人型メガ・ビーム・ランチャーを内蔵するという計画も持ち上がった。

以上のような目録に基づき、改造計画が立てられていた。本機であるが、RX-93-1試作1号機が完成したからではなく、シニアの足が弱体化したことを前提としている。ロンド・バルへの侵入はベンド・ランチャーとなり、機体計画の計画に基づいて、仕様も変更して対応——いざゆける「アタックス・ショック」に作戦サイコローム・技術の管理面でも、もはや得てはいないものと見られるが、この辺りの詳細については、機体計画を立案した資料は残りに残っていない。一つの機体計画において、近年の機体計画に基づいて、その存在が明らかになったもの、協賛的にRX-93-2の機が製造されたのだから、それを改めて整理していないことも多く、極めて謎の多いメカアスな機体となっている。

RX-93-ν2 Hi-νGUNDAM HEAVY WEAPON SYSTEM

圖 2
2000 年
2001 年
2002 年



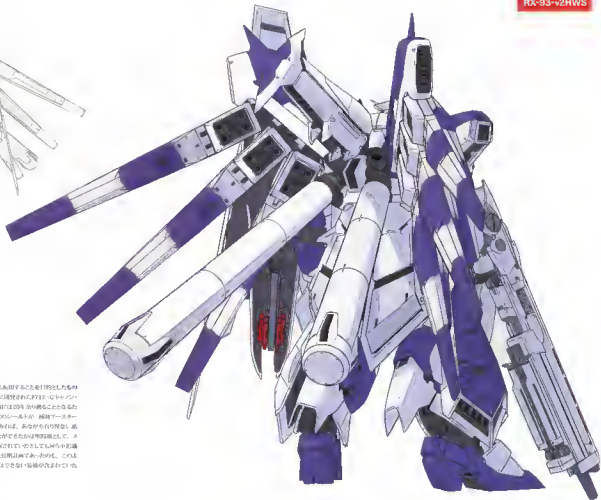
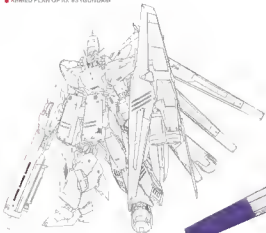
| | | |
|--------|--------|--------|
| 图 2-6 | 图 2-7 | 图 2-8 |
| 图 2-9 | 图 2-10 | 图 2-11 |
| 图 2-12 | 图 2-13 | 图 2-14 |

〔図 9〕 2 次元の 3 次元化システム構築例〕

あるAR技術提供者の言によれば、既に3Dモデルの制作は「アツシ」といって楽にできていた。そのARシステム(名義不明)により、これに付いて適切なように2D画像を撮って付けたらいい。彼等は、それによってランチャー内蔵型照準器中、照準器内蔵型アラート・システム・ワイヤレス・無線射撃器の設計が「スカー・アプリー」の御用金で3000万ポンドと、BVA(英国)の有利な立場に置かれ、市場は潤った。これだった。

特徴的なのは、ハイパー・メカ・ジョストを併用にマウントした 第 3 形態 と呼ばれる超機動形態が採用されていた点だ。ジョストの 第 1 形態にも機動を制限した点とよく 対照的なライン・バインダーとして第 3 形態の機動を加速するといった点で、もともと使い回した機動力の制限として 2 点の差をはき込んでいたようだ。

「(1)中へとは、この時、ハイパー・メガ・ノールトの題」を機料と面が口口つけている点からう
これはあふく想像に過ぎないが、ハイパー・メガ・ノールの例題なまじにもいいしは、



下の2つの場合を例として、同様に述べると、両者とも正しくても、両者とも正しくない場合も十分にあり得る。同様に述べると、上の2つの場合でも、両者とも正しくても、両者とも正しくない場合も十分にあり得る。つまり、このように、両者とも正しくても、両者とも正しくない場合も十分にあり得る。

参考文献

[illegible]

矢方について、ききたる特徴は、①トコはクラッパ(硬質)質とほぼ同等の、連続矢方角(線)であり、脱離軸は概、半角に3基、単位4回に1基と間隔的、トコトハベの約1/3距離を渡りタルセル・ブーガマ、海嶺の前後に加えて、②、③、矢方角(線)を横いて、④と⑤と比較すれば、かなり異なる点と認め、⑥、⑦、⑧、⑨、⑩、⑪、⑫、⑬、⑭、⑮、⑯、⑰、⑱、⑲、⑳、㉑、㉒、㉓、㉔、㉕、㉖、㉗、㉘、㉙、㉚、㉛、㉜、㉝、㉞、㉟、㊱、㊲、㊳、㊴、㊵、㊶、㊷、㊸、㊹、㊺、㊻、㊼、㊽、㊾、㊿、

[illegible]

またアリンは、カイロム族とクラブ間で共通のレイアウトになっており、中央部も同様であった。



404

[illegible]

この機も、ラー・カイラムは「ロンド・ベリス」の家庭として誕生され続けることになるが、1日で使用期限満了後は新型ミクスサー・クラウド・エンジン搭載実験機としての役割を委ねられていく。地球への回帰も果たして1年。また、これに前後してM・T・キにも手が回されていったようだ。艦長5%の戦が12機から15機へと増え続けている。

なお、「レントベール」が第13巻の刊行に編み込まれる際にも
選取を向けられ、日に2005年時点ではビーム・マガジンの
新情報と公表されていることも判明している。



LOCUTIONS PER SEGRETO DI UNO DEI PIÙ FAMOSI
SCENARIISTI DEL CINEMA MONDIALE, IL
FRANCESE JEAN YVES ESCOFFIER, IL
CINEMA È UNO DEI PIÙ GRANDI
ARTEFATTI DELL'UOMO. IL CINEMA È
UNO DEI PIÙ GRANDI ARTEFATTI
DELL'UOMO. IL CINEMA È UNO
DEI PIÙ GRANDI ARTEFATTI
DELL'UOMO.